

# 第2部

高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築に用いられた正統性

## 6章. 高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築における組物の構成

多包系建築の組物は、一手先の枳肘木から梁に至るまで、台輪と直交する方向の水平材（力肘木や梁）ごとに枳肘木と通肘木が組まれ、また同時にそれらが段を重ねることで、水平方向・垂直方向の両方向に拡張しながら手先の数を増やす。

2章での考察から、虚梁を使用した多包系組物の組物は一定の原理を用い、組物の段ごとの力肘木方向の水平材（力肘木や梁など）に枳肘木および通肘木を組むことが明らかになった。その原理とは、外側と内側の各手先において、最外郭の手先とその内側の手先まで枳肘木を組み、それより内側の手先や柱真では通肘木を組むことである。

虚梁を使用した多包系建築の組物に見られる一定の原理が、高麗時代末期・朝鮮時代初期の多包系建築に、どの程度用いられたかを明らかにするため、虚梁を使用した事例を含め、14世紀から16世紀までの多包系建築25棟<sup>1)</sup>を対象（表6-1を参照）に、組物（平斗栱と中備斗栱）の組み方を分析する。そして、上記の構成原理を用いた事例以外の組み方を用いた事例に関して、その組み方が例外的なものか、定型化された他の種類の組み方なのかを考察する。そこから、高麗時代末期・朝鮮時代初期の多包系建築における組物の構成形式を類型化し、類型ごとの特徴を明らかにする。

高麗時代末期・朝鮮時代初期における多包系建築の25棟は、一手先から四手先までの組物を持つ。多包系組物において手先の数は、外側と内側を同数にしたものと、外側と内側で異なるものに分けられる。そして、外側と内側で手先数が異なる場合、外側の手先数を多くしたものと、内側の手先数を多くしたものに細分される。分析に当たり、外側の手先数を基準に、一手先から四手先までに分類でき<sup>2)</sup>、さらに、外観によって、正結合A類型で梁頭形の木鼻を出すものと、正結合B類型で梁頭形および雲栱形の木鼻を出すものに分けて考察を行う。

---

1) 現存している建築だけではなく、焼失または焼失後に復原された建築の中で過去の調査記録や写真、図などから組物の構成や梁架構の形式が考察可能な建築も含めた。

2) 外側の手先数によって、梁が組物に組まれる位置が決まるためである。

<表6-1> 高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築の概要

順番	建築名	年代	建築の用途	建築の層	平面規模	屋根	組物の手先
1	平壤崇仁殿	1325年	官宮建築(靈廟)	単層	3X3	入母屋造	外2内2
2	安東鳳停寺大雄殿	1361年頃	寺院建築	単層	3X3	入母屋造	外2内2
3	博川深源寺普光殿	1368年	寺院建築	単層	3X2	入母屋造	外4内4
4	郭山開元寺大雄殿	1368年	寺院建築	単層	3X3	入母屋造	外2内2
5	燕灘心源寺普光殿	1374年	寺院建築	単層	3X3	入母屋造	外3内3
6	正陽寺般若殿	14C	寺院建築	単層	3X3	入母屋造	外2内3
7	槐山覚淵寺毘盧殿	14C	寺院建築	単層	3X3	入母屋造	外2内2
8	釋王寺応真堂	1386年	寺院建築	単層	5X2	切妻造	外2内2
9	開城南大門	1392年	官宮建築(門楼)	単層	3X2	入母屋造	外1内1
10	釋王寺護持門	1393年	寺院建築	単層	3X2	切妻造	外2内2
11	安岳月精寺極楽宝殿	14C	寺院建築	単層	3X2	入母屋造	外3内2
12	永興濬源殿正殿	1396年	官宮建築	単層	3X2	入母屋造	外1内1
13	平原法興寺藏經閣	1401年	寺院建築	単層	3X1	入母屋造	外2内2
14	安国寺大雄宝殿	1419年	寺院建築	重層	5X4	入母屋造	外3内4(下層) 外1内1(上層)
15	ソウル崇禮門	1448年	官宮建築(門楼)	重層	5X2	寄棟造	外2内2(下層) 外3内2(上層)
16	驪州神勒寺祖師堂	1472年	寺院建築	単層	1X2	入母屋造	外2内2
17	平壤普通門	1473年(修理)	官宮建築(門楼)	重層	3X3	入母屋造	外2内2
18	瑞山開心寺大雄殿	1484年	寺院建築	単層	3X3	切妻造	外2内3
19	安邊客舍駕鶴樓	1486年	仏殿	楼閣	3X3	入母屋造	外1内1
20	瑞興歸進寺極楽殿	1488-1505年	寺院建築	単層	3X3	入母屋造	外4内4
21	成仏寺応真殿	1327年 (1530年多包系に改造)	仏殿	単層	7X3	切妻造	外1内1
22	安城清源寺大雄殿	1535-1550年	寺院建築	単層	3X3	切妻造	外2内2
23	春川清平寺極楽殿	1550年	寺院建築	単層	3X3	入母屋造	外2内2
24	安城石南寺靈山殿	1562-1565年	寺院建築	単層	3X2	入母屋造	外2内2
25	蔚珍佛影寺應真殿	1578年	寺院建築	単層	3X2	切妻造	外2内2

## 6.1 一手先の組物

一手先の組物をもつ建築は、25棟の中で5棟に該当する<sup>3)</sup>(表6-2参照)。時期別に分けて見ると、14世紀の建築は、開城南大門(1392年)と永興濬源殿正殿(1396年)の2棟、15世紀の建築は、安国寺大雄宝殿(1419年)<sup>4)</sup>と安邊客舎駕鶴樓(1486年)の2棟、16世紀の建築は、成仏寺応真殿(1530年)<sup>5)</sup>の1棟がある。

5棟のうち、平斗栱において梁頭形の木鼻を結合A類型として出した建築は、開城南大門と安国寺大雄宝殿(上層)、成仏寺応真殿の3棟に当たり、その中で、虚梁を用いた建築は、開城南大門1棟のみである。他の2棟の中で、永興濬源殿正殿は、梁頭形の木鼻を正結合B類型として出した建築であり、安邊客舎駕鶴樓も雲栱形の木鼻を結合B類型として出した表現を持つ建築である。

そして、外側を一手先にした組物は、内側の手先の数も一手先として構成している。

〈表6-2〉 外部において一手先組物の建築

順番	建築名	年代	組物の手先	平斗栱における虚梁の使用	平斗栱の外観表現	秤肘木の使用
1	開城南大門	1392年	外1内1	O	梁頭形(A類型)	最外郭の手先とその内側の手先まで
2	永興濬源殿正殿	1396年	外1内1	△ (虚梁と類似する部材の使用)	梁頭形(B類型)	最外郭の手先とその内側の手先まで
4	安国寺大雄宝殿(上層)	1419年	外1内1(上層)	X	梁頭形(A類型)	最外郭の手先とその内側の手先まで
3	安邊客舎駕鶴樓	1486年	外1内1	X	雲栱形(B類型)	最外郭の手先とその内側の手先まで
5	成仏寺応真殿	1327年 (1530年に多包系に改造)	外1内1	X	梁頭形(A類型)	最外郭の手先とその内側の手先まで

3) 重層建築である安国寺大雄宝殿において、下層の組物は外側が三手先、内側が四手先であるが、上層の組物は外側と内側を一手先となっている。安国寺大雄宝殿の組物を考察するに当たり、上層の組物は「一手先組物」の項目で、下層の組物は「三手先組物」の項目で、それぞれ分析を行う。

4) 安国寺大雄宝殿は1419年に建立され、その後、1594年と1654年、1714年、1785年に修理を受けた。建築の四面において、1層と2層の正面側の組物の意匠と形式が異なる。これは、1785年に行われた修理で改造されたものと推定されている(国立文化財研究所、『北韓文化財解説集Ⅱ(寺刹建築編)』、1998.12.、p.210)。本建築に関する分析では、両側面と背面の組物を対象とする。

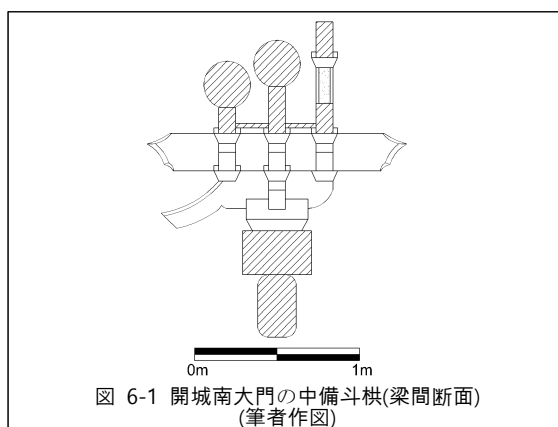
5) 成仏寺応真殿は、柱心包系建築として1327年に建立され、1530年に行われた修理の際に、組物を多包系に改造した(杉山信三、『韓国古建築の保存—浮石寺・成仏寺修理工事報告—』、韓国古建築の保存刊行会、1996.11、p.31)。

### 6.1.1 結合A類型

梁頭形の木鼻を結合A類型として出した3棟について、平斗栱と中備斗栱の構成を分析する。

2章で行った虚梁と組物との結合原理に関する分析から、開城南大門における平斗栱の構成は、次のような組み方を用いたことが明らかになった(図2-60、図2-61参照)。

1段目の力肘木(擬似尾垂木)において、柱真に小秤肘木を組み梓肘木とする。そして、力肘木と秤肘木の両端には斗を載せる<sup>6)</sup>。2段目には虚梁が載り、外側・内側の一手先の小秤肘木と柱真の部分の大秤肘木を、虚梁の下に組み込む。その小秤肘木と大秤肘木の両端には斗を載せる<sup>7)</sup>。そして、外側と内側の一手先に組まれた小秤肘木と柱真に組まれた大秤肘木の上段に通肘木が載り、虚梁の上段側面の枅穴に差し込まれる。外側の一手先に載る通肘木は出桁受通肘木となる。



開城南大門の中備斗栱は、1段目の力肘木(擬似尾垂木)において、柱真に小秤肘木を組み梓肘木とし、2段目には、先端部を三分頭形にした力肘木を載せて、外側と内側の一手先に小秤肘木を、柱真には大秤肘木を組む。そして、外側と内側の一手先に組まれた小秤肘木と柱真に組まれた大秤肘木の上段に通肘木を載せる。外側の一手先の通肘木は出桁受通肘木となる。

まとめて見ると、平斗栱と中備斗栱は次のような共通する構成をもつ。組物の1段目では、柱真に小秤肘木を組み、2段目では、外側と内側の最外郭の手先である一手先に小秤肘木を、柱真には大秤肘木を組む。3段目に当たる位置には通肘木が載り、外側一手先の通肘木は、出桁受通肘木となる。平斗栱と中備斗栱における構成的な差と言えるのは、平斗栱には2段目に

6) 1段目の力肘木に組まれた肘木と秤肘木の両端に斗を載せることは、他の建築における一手先の組物にも共通する。

7) 2段目に載る肘木や水平材(虚梁、梁)に組まれた小秤肘木と大秤肘木の両端に斗を載せることは、他の建築における一手先の組物にも共通する。

虚梁が生まれ、3段目に当たる位置に載った通肘木を同時に組むことである。

梁を結合A類型として組み出した安国寺大雄宝殿(上層)と成仏寺応真殿の組物の構成において、秤肘木と通肘木を組物の段ごとの力肘木方向の水平材(力肘木や梁など)に組む形式は、開城南大門と基本的に同じ組み方となっている。

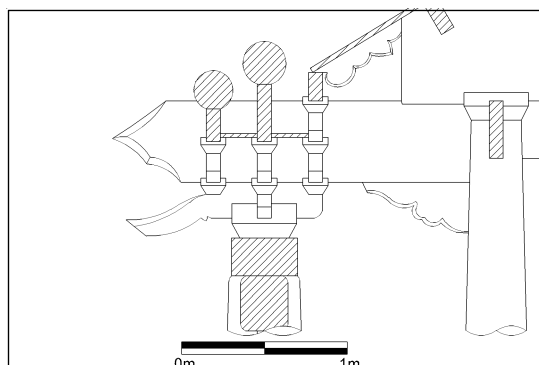


図 6-2 安国寺大雄宝殿(上層)の平斗栱(梁間断面)  
(筆者作図)

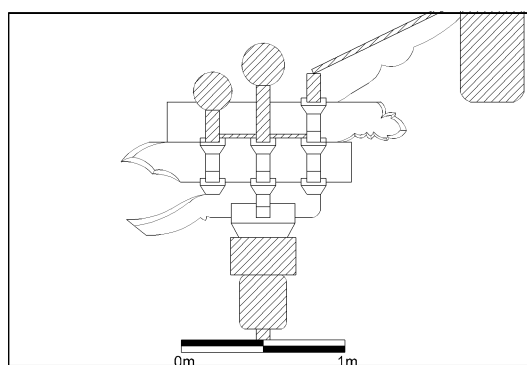


図 6-3 安国寺大雄宝殿(上層)の中備斗栱(桁行断面)  
(筆者作図)

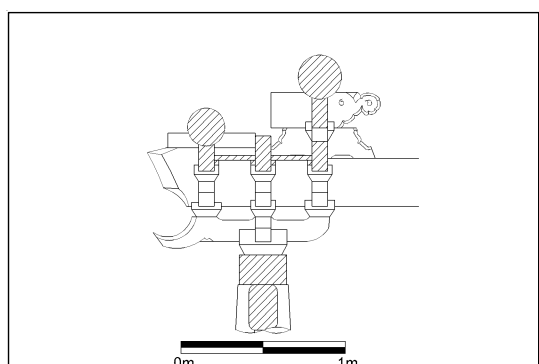


図 6-4 成仏寺応真殿の平斗栱(梁間断面)  
(筆者作図)

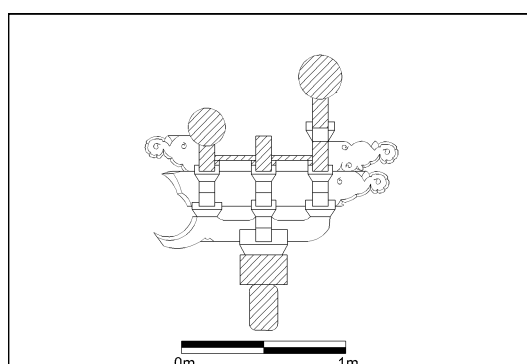


図 6-5 成仏寺応真殿の中備斗栱(梁間断面)  
(筆者作図)

安国寺大雄宝殿(上層)と成仏寺応真殿の平斗栱と中備斗栱において、1段目の力肘木(擬似尾垂木)には柱真に小秤肘木を組み、2段目では、外側と内側の最外郭の一手先である一手先に小秤肘木を、柱真には大秤肘木を組み共通点が見られる。3段目では外側と内側の一手先と柱真に通肘木が載るが、安国寺大雄宝殿(上層)の場合、外側の一手先と柱真に通肘木を、内側の一手先には大秤肘木を組み、その上段に通肘木を載せている。成仏寺応真殿は開城南大門と同じく、3段目で、外側と内側の一手先と、柱真に通肘木を載せている。

上記の2棟の平斗栱は、2段目には梁が載り、外側・内側の一手先の小秤肘木と柱真の部分の大秤肘木を、梁の下に組み込み、3段目に載せた通肘木<sup>8)</sup>が梁の上段側面の枅穴に差し込まれる。このような梁(虚梁を含め)の組み方は、開城南大門と安国寺大雄宝殿(上層)、成仏寺応

8) 安国寺大雄宝殿は、3段目に当たる位置において、内側の一手先に載せた大秤肘木と組み込まれる。

真殿の3棟に共通し、梁頭形の木鼻をもつ結合A類型に典型的な構成といえる<sup>9)</sup>。

中備斗拱の場合、3段目に当たる位置に雲拱を設けたのは成仏寺応真殿である。安国寺大雄宝殿は18世紀に改造された正面側の組物に雲拱を載せたが、それ以前の組物が残っている両側面と背面には雲拱を載せてない。開城南大門の中備斗拱にも雲拱が載ってない。

### 6.1.2 結合B類型

結合B類型として木鼻を組み出した2棟について、平斗拱と中備斗拱の構成を分析する。

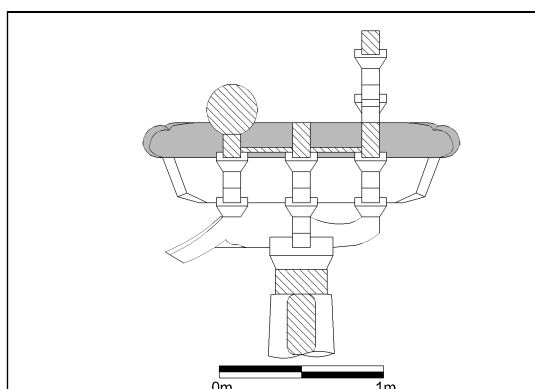


図 6-6 永興濬源殿正殿の平斗拱(桁行断面)  
(筆者作図)

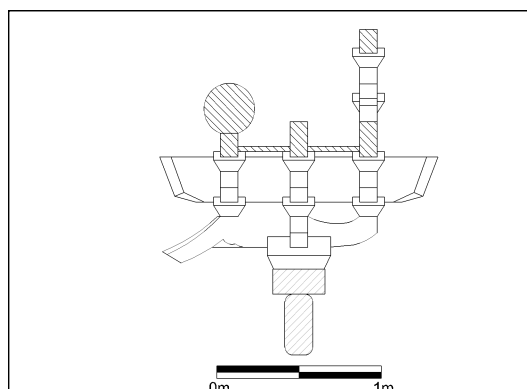


図 6-7 永興濬源殿正殿の中備斗拱(桁行断面)  
(筆者作図)

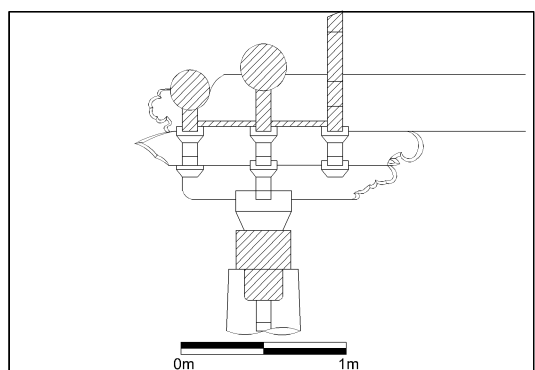


図 6-8 安邊客舎駕鶴樓の平斗拱(梁間断面)  
(筆者作図)

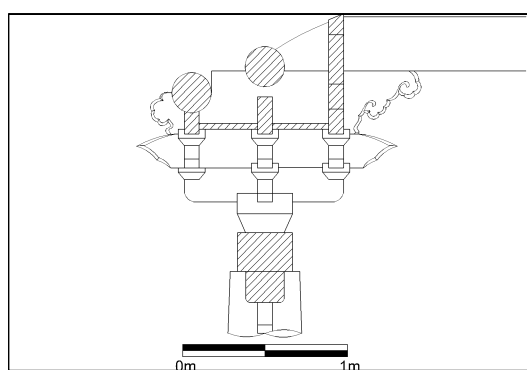


図 6-9 安邊客舎駕鶴樓の平斗拱(桁行断面)  
(筆者作図)

9) 成仏寺応真殿は、梁と出桁の間に雲拱に当たる部材を載せている特徴があり、このような形式は、虚梁を用いた開心寺大雄殿の平斗拱でも現れる。

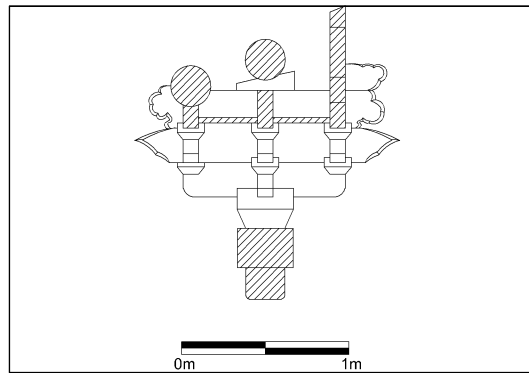


図 6-10 安邊客舎駕鶴樓の中備斗栱(梁間断面)  
(筆者作図)

永興濬源殿正殿（梁頭形の木鼻）と安邊客舎駕鶴樓（雲栱形の木鼻）の平斗栱と中備斗栱において、1段目の力肘木<sup>10)</sup>には柱真に小秤肘木を組み、2段目の力肘木は、外側と内側の一手先に小秤肘木を、柱真には大秤肘木を組む。3段目に当たる位置には通肘木が載る。このような組み方は、上述した、梁頭形の木鼻をもつ結合A類型として組み出した3棟の組物の組み方とほぼ同じ構成である<sup>11)</sup>。つまり、一手先の組物の構成は、14世紀の開城南大門をはじめ、16世紀の成仏寺応真殿まで、同じ構成原理を用いて、組物の段ごとの力肘木方向の水平材（力肘木や梁など）に秤肘木と通肘木を組んでいる。

上記の2棟において、平斗栱に木鼻（梁や虚梁など）が組まれる形式を見ると、永興濬源殿正殿は、3段目に虚梁（梁）<sup>12)</sup>が載り、外側・内側の一手先と柱真に載せた通肘木と組まれている。安邊客舎駕鶴樓の平斗栱も、3段目に梁（雲栱）<sup>13)</sup>が載り、外側・内側の一手先と柱真に載せた通肘木と組まれる。

中備斗栱において、3段目に雲栱を設けた建築は安邊客舎駕鶴樓であり、外観では平斗栱と中備斗栱を同様に表現する。永興濬源殿正殿の場合、中備斗栱に雲栱は設けてない。

以上の分析から、一手先組物においては定型化した組み方が用いられることがわかる。この組み方は、外側と内側の各手先において、最外郭の手先とその内側の手先まで秤肘木を組むと

10) 永興濬源殿正殿の1段目の力肘木は擬似尾垂木であるが、安邊客舎駕鶴樓の1段目の力肘木は普通の肘木が用いられている。

11) 安国寺大雄宝殿(上層)は、内側の一手先の3段目に当たる位置に大秤肘木を載せていた。

12) 永興濬源殿正殿に関する考察は、『朝鮮古蹟図譜11』(朝鮮総督府、1931.3)に載った写真資料を元に分析した。内部の写真から梁間方向に梁が掛かっているように見えるが、正面と背面の平斗栱に組まれた形式ははっきりしない。

13) 安邊客舎駕鶴樓において、梁間方向の梁は結合B類型として平斗栱に組まれるが、桁行方向の梁は上段結合式の梁架構となり、両側面の平斗栱において、出されている木鼻は梁の木鼻ではなく、雲栱である。



いう原理を基にしている。

そして、結合A類型や結合B類型として木鼻を出す平斗栱において、類型ごとに梁の掛かる位置に差があるが、平斗栱の各段に組まれる秤肘木や通肘木には、同じ組み方が用いられている。そして、このような組み方は、平斗栱と中備斗栱に共通している。

このような共通する組み方から、高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築において、一手先の組物には模範となる構成形式が存在していたものと推測される。

虚梁を使用した開城南大門の場合も、その模範となる形式に従い、平斗栱と中備斗栱を構成したと考えられる。また、虚梁を使用し、梁頭形の木鼻（三分頭形）を結合A類型として平斗栱に出し、正統性のある外部表現を維持しようとした。

## 6.2 二手先の組物

二手先の組物を設けた建築は、25棟の中で16棟、高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築において最も多い比率を占める<sup>14)</sup>。時期別に分けて見ると、14世紀の建築は平壤崇仁殿(1325年)を含めて7棟、15世紀の建築は法興寺藏經閣(1401年)を含めて5棟、16世紀の建築は清源寺大雄殿(1535-1550年)を含め4棟となる(表6-3参照)。

16棟のうち、平斗拱において、梁頭形の木鼻をもつ結合A類型の建築は、平壤崇仁殿(1325年)をはじめ10棟に当てはまる<sup>15)</sup>。そのうち、虚梁を設けた建築は、鳳停寺大雄殿(1361年頃)を含め5棟がある。

平斗拱において、木鼻を結合B類型として出したように表現したのは、正陽寺般若殿と覚淵寺毘盧殿<sup>16)</sup>、釋王寺護持門、神勒寺祖師堂、石南寺靈山殿、佛影寺應眞殿の6棟がある。そのうち、虚梁を設けた建築は、覚淵寺毘盧殿1棟のみである。これらの建築は、平斗拱を中備斗拱と同様に構成するため、平斗拱に雲拱形の木鼻を結合B類型として出したように表現する特徴がある<sup>17)</sup>。

外側を二手先とした組物は、内側の手先の数も同数にするのが一般的であるが、内側の手先の数を三手先として構成した事例も現れる。外側を二手先、内側を三手先とした建築は、正陽寺般若殿(14世紀頃)と開心寺大雄殿(1484年)の2棟がある。

---

14) 重層建築であるソウル崇禮門の下層の組物は、外側と内側を二手先にして、上層の組物は外側を三手先、内側を二手先としている。ソウル崇禮門の組物の構成を考察するに当たり、下層の組物は「二手先組物」の項目で、上層の組物は「三手先組物」の項目で、それぞれ分析を行う。

15) 平壤普通門の場合、下層の平斗拱は、梁頭形の木鼻をもつ梁が結合A類型として組物に組み込まれているが、上層の平斗拱には梁を掛けず、平斗拱と中備斗拱の形式を同じく構成し、外観から見ると雲拱形の木鼻をもつ結合B類型の典型的な構成のように表現した。

16) 覚淵寺毘盧殿(14世紀頃)は、正面の中央間の平斗拱に梁頭形の木鼻(雲形)を結合B類型として出し、両側面と背面の平斗拱は雲拱形の木鼻を結合B類型として出したように表現しながら、平斗拱を中備斗拱と同様に構成している建築である。

17) 平斗拱に出す雲拱形の木鼻は、梁が結合B類型として組物に組み込まれ木鼻を出す事例と、梁が上段結合式として組み込まれ、平斗拱に出した木鼻は雲拱もしくは雲拱と類似する部材となる事例がある。

<表6-3> 外部において二手先組物の建築

順番	建築名	年代	組物の手先	平斗栱における 虚梁の使用	平斗栱の外観表現	秤肘木の使用
1	平壤崇仁殿	1325年	外2内2	X	梁頭形(A類型)	一手先に秤肘木を使用しない
2	安東鳳停寺大雄殿	1361年頃	外2内2	O	梁頭形(A類型)	最外郭の手先とその内側の手先まで
3	郭山開元寺大雄殿	1368年	外2内2	O	梁頭形(A類型)	最外郭の手先とその内側の手先まで
4	正陽寺般若殿	14世紀頃	外2内3	X	雲栱形(B類型)	最外郭の手先とその内側の手先まで
5	槐山覚淵寺毘盧殿	14世紀頃	外2内2	O	梁頭形(B類型、正面) 雲栱形(B類型)	最外郭の手先とその内側の手先まで
6	釋王寺応真堂	1386年	外2内2	X	梁頭形(A類型)	最外郭の手先とその内側の手先まで
7	釋王寺護持門	1393年	外2内2	X	雲栱形(B類型)	最外郭の手先とその内側の手先まで
8	平原法興寺藏經閣	1401年	外2内2	O	梁頭形(A類型)	最外郭の手先とその内側の手先まで
9	ソウル崇禮門(下層)	1448年	外2内2	X	梁頭形(A類型) *隅梁：梁頭形(B類型)	最外郭の手先とその内側の手先まで
10	驪州神勒寺祖師堂	1472年	外2内2	X	雲栱形(B類型)	最外郭の手先とその内側の手先まで
11	平壤普通門(上・下層)	1473年(修理)	外2内2	X	上層：梁頭形(A類型) 下層：雲栱形(B類型)	一手先に秤肘木を使用しない
12	瑞山開心寺大雄殿	1484年	外2内3	O	梁頭形(A類型)	最外郭の手先とその内側の手先まで
13	安城清源寺大雄殿	1535-1550年	外2内2	O	梁頭形(A類型)	最外郭の手先とその内側の手先まで
14	春川清平寺極楽殿	1550年	外2内2	X	梁頭形(A類型)	最外郭の手先とその内側の手先まで
15	安城石南寺靈山殿	1562-1565年	外2内2	X	雲栱形(B類型)	最外郭の手先とその内側の手先まで
16	蔚珍佛影寺應真殿	1578年	外2内2	X	雲栱形(B類型)	最外郭の手先とその内側の手先まで

### 6.2.1 結合A類型

梁頭形の木鼻を結合A類型として出した建築10棟に対し、平斗拱と中備斗拱の構成について分析を行っていく。

平斗拱に虚梁を使用した建築5棟は、開元寺大雄殿を除いた鳳停寺大雄殿と法興寺藏經閣、開心寺大雄殿、清源寺大雄殿の4棟は、2章で行った考察を通じて、次のような組み方を用いたことが明らかとなった。

まず、外側と内側を二手先に構成した鳳停寺大雄殿と法興寺藏經閣、清源寺大雄殿3棟を見ると(図2-62~図2-69参照)、二手先組物の平斗拱において、1段目の力肘木<sup>18)</sup>は、柱真に小秤肘木を組み枳肘木とし、2段目の力肘木<sup>19)</sup>は、外側と内側の一手先に小秤肘木を、柱真には大秤肘木が組まれる。1段目から2段目の構成は、一手先組物の1段目と2段目の構成と同じである。3段目には虚梁が載って虚梁の下端に、外側と内側の二手先に小秤肘木を、外側と内側の一手先には大秤肘木を組み、柱真では通肘木が差し込まれる。4段目に当たる外側と内側の各手先と柱真には通肘木を載せ、虚梁の上端側面の柄穴に差し込まれる。外側の二手先に載る4段目の通肘木は出桁受通肘木となる。開元寺大雄殿の場合も、平斗拱において上記の構成原理が用いられている<sup>20)</sup>。

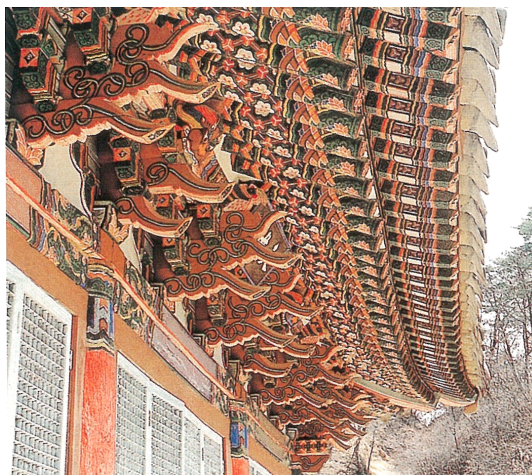


図 6-11 開元寺大雄殿の組物廻り(正面)  
(『北韓文化財解説集Ⅱ(寺刹建築編)』、p.177より)

次に、外側を二手先、内側は三手先の組物を持つ開心寺大雄殿でも(図2-79参照)、1段目から3段目までを上述した組物と同じ形式に構成している。4段目に当たる位置において、外側の二手先と一手先、柱真に通肘木を組み、内側の三手先に小秤肘木を、二手先には大秤肘

18) 1段目の力肘木を普通の肘木にしたのは鳳停寺大雄殿1棟であり、他5棟は擬似尾垂木としている。

19) 2段目の力肘木は、5棟の全てが、擬似尾垂木としている。

20) 梁間方向の断面図(図4-10)と写真(図4-11)を参照(国立文化財研究所、『北韓文化財解説集Ⅱ(寺刹建築編)』、1998.12、pp.176~177より)。

木を、一手先には通肘木を組んでいる<sup>21)</sup>。そして、5段目に当たる位置には、柱真と内側の三手先・二手先・一手先に通肘木が載る<sup>22)</sup>。

つまり、各手先において、最外郭の手先とその内側の手先まで秤肘木を用い、それより内側の手先や柱真では通肘木を組むという原則を守っていることが確認できる。

虚梁を使用した5棟の中備斗拱にも、平斗拱に用いられた組物の構成原理が用いられている。

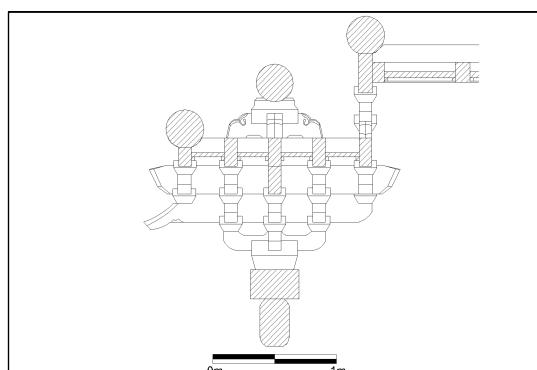


図 6-12 鳳停寺大雄殿の中備斗拱(梁間断面)  
(筆者作図)

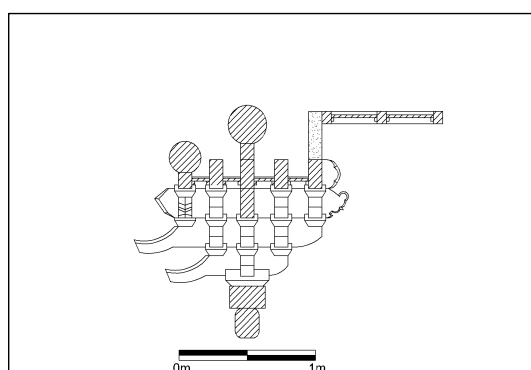


図 6-13 法興寺藏經閣の中備斗拱(梁間断面)  
(筆者作図)

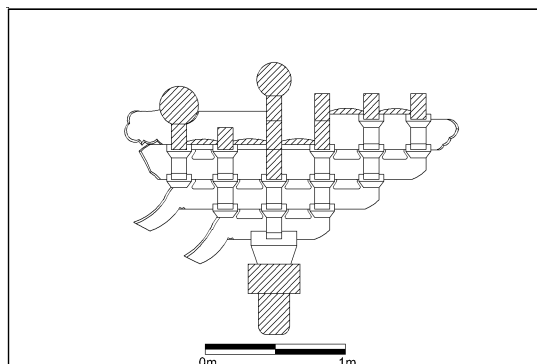


図 6-14 開心寺大雄殿の中備斗拱(梁間断面)  
(筆者作図)

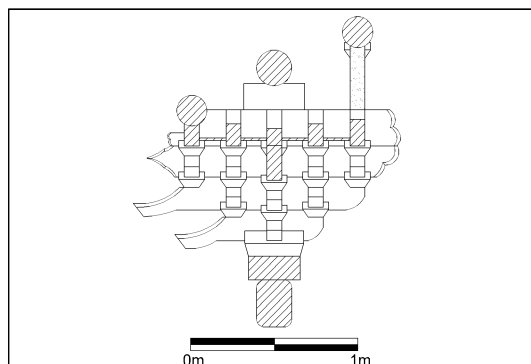


図 6-15 清源寺大雄殿の中備斗拱(梁間断面)  
(筆者作図)

中備斗拱において、1段目から2段目までは、平斗拱と同様にし、3段目では、外側に先端部を三分頭形にした力肘木を載せ、外側と内側の二手先に小秤肘木を、外側と内側の一手先には大秤肘木を、柱真では通肘木を組んでいる。4段目に当たる位置において<sup>23)</sup>、外側と内側を

21) 開心寺大雄殿の4段目において、外側の二手先と一手先には、雲栱に該当する部材が載り、二手先と一手先の通肘木と組まれる。梁真の部分に大梁が載り、内側の三手先および二手先の秤肘木と一手先の通肘木が大梁の下段に組み込まれる。

22) 5段目に載る通肘木は、大梁の側面枅穴に差し込まれる。

23) 4段目に雲栱に当たる材を載せた建築は、鳳停寺大雄殿と開元寺大雄殿、開心寺大雄殿、清源寺大雄殿があり、鳳停寺大雄殿は外側と内側に木鼻を出してない。法興寺藏經閣の場合、外側に木鼻を出してないが、内側の二手先の通肘木に雲形木鼻を取り付けている。出桁受通肘木が載る4段目においては、雲

二手先に構成した鳳停寺大雄殿と開元寺大雄殿、法興寺藏經閣、清源寺大雄殿4棟は、各手先と柱真に通肘木を載せ、外側の二手先に載る4段目の通肘木は出桁受通肘木となる。外側を二手先、内側は三手先の組物を持つ開心寺大雄殿は、4段目に雲栱<sup>24)</sup>が載る。雲栱において、外側の二手先と一手先、柱真に通肘木を組み、内側の三手先に小秤肘木を、二手先には大秤肘木を、一手先には通肘木を組んでいる。そして、5段目に当たる位置には、柱真と内側の三手先・二手先・一手先に通肘木が載る。

外側と内側を二手先とした組物と、外側を二手先に、内側を三手先とした組物において、平斗栱と中備斗栱の構成をまとめて見ると、1段目と2段目は、一手先組物の1段目・2段目と同じ構成を持つ。また、2段目から4段目(内側を二手先とした組物)もしくは5段目(内側を三手先とした組物)まで、各手先において、最外郭の手先とその内側の手先まで秤肘木を用い、それより内側の手先や柱真では通肘木を組むという原則が守られている。

平斗栱に梁を結合A類型として組み梁頭形の木鼻を出した建築は、平壤崇仁殿(1325年)と釋王寺応真堂(1368年)、ソウル崇禮門(下層、1448年)、平壤普通門(上層、1473年修理)、清平寺極楽殿(1550年)の5棟がある。そのうち、虚梁を使用した建築の組物と同じ組み方を用いた建築は、釋王寺応真堂とソウル崇禮門、清平寺極楽殿の3棟が該当する。他の平壤崇仁殿と平壤普通門の2棟は、一手先の部分に秤肘木や通肘木を持たない構成となっている。

まず、釋王寺応真堂とソウル崇禮門、清平寺極楽殿の3棟における平斗栱と中備斗栱の構成を分析する。この3棟の組物は、外側と内側を二手先に統一している。

平斗栱において、1段目から2段目までは虚梁を用いた平斗栱と同じ形式として、秤肘木が各段の力肘木に組まれる。3段目には虚梁の代わりに梁が載り、梁の下端に、外側と内側の二手先に小秤肘木を、外側と内側の一手先に大秤肘木を、柱真には通肘木を差し込む。4段目に当たる外側と内側の各手先と柱真には通肘木を載せ、梁の上端側面の枘穴に差し込む。つまり、虚梁を用いた平斗栱と同じ構成形式が見られる。

中備斗栱の場合も、1段目から4段目まで、虚梁を使用した建築の中備斗栱と同じく構成し、各手先において、最外郭の手先とその内側の手先まで秤肘木を用い、それより内側の手先や柱真では通肘木を組むという原則を守っている。

---

栱の使用や、木鼻を出すという選択的な表現が建築ごとに違う。

24) 4段目に載った雲栱は外側に木鼻を出したものと内側に木鼻を出したものが別材である。外側のは、外側の二手先から柱真までに、内側のは、内側の三手先から一手先までの位置に載っている。

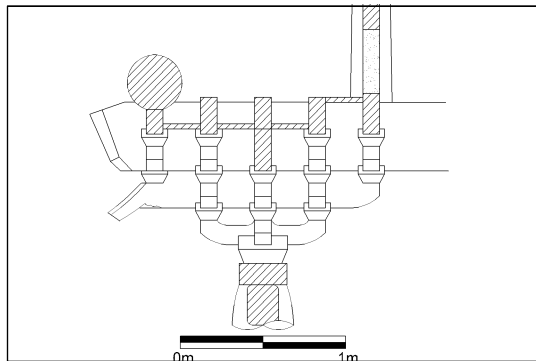


図 6-16 釋王寺応真堂の平斗栱(梁間断面)  
(筆者作図)

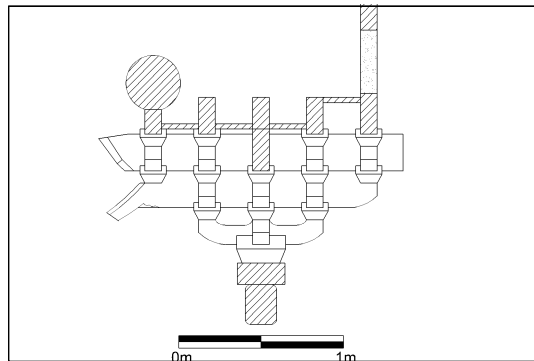


図 6-17 釋王寺応真堂の中備斗栱(梁間断面)  
(筆者作図)

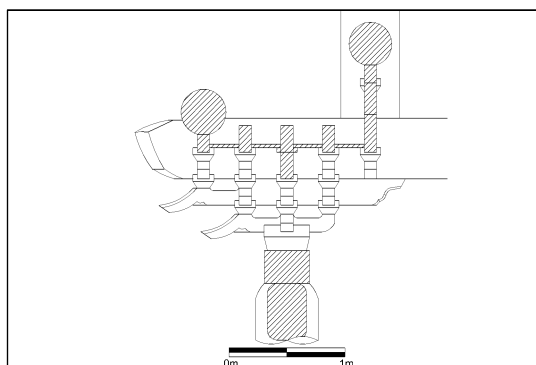


図 6-18 ソウル崇禮門(下層)の平斗栱(梁間断面)  
(筆者作図)

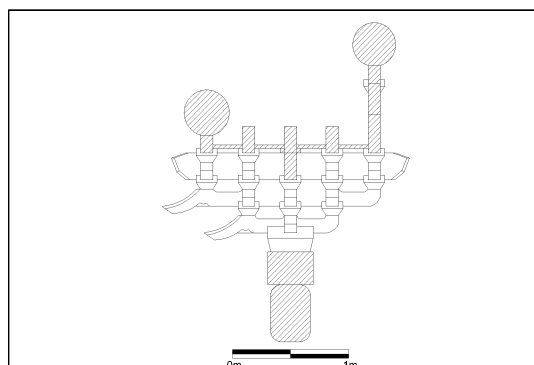


図 6-19 ソウル崇禮門(下層)の中備斗栱(梁間断面)  
(筆者作図)

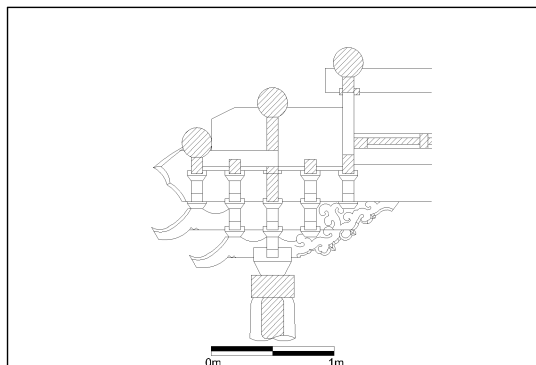


図 6-20 清平寺極楽殿の平斗栱(梁間断面)  
(筆者作図)

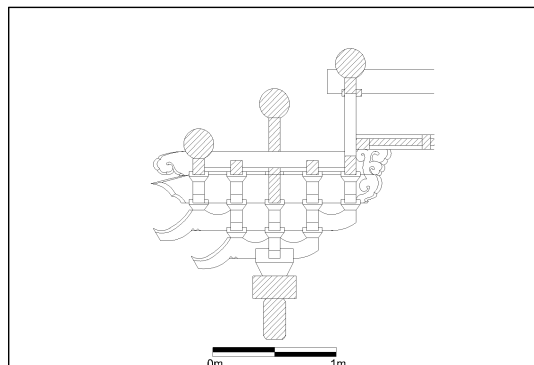


図 6-21 清平寺極楽殿の中備斗栱(梁間断面)  
(筆者作図)

次に、一手先の部分に秤肘木や通肘木を組まない、平壤崇仁殿と平壤普通門の2棟における平斗栱と中備斗栱の構成を分析する。平壤崇仁殿と平壤普通門の組物は、外側と内側を二手先として構成し、共通する組み方を用いている。

平斗栱において<sup>25)</sup>、1段目の力肘木(普通の形状の肘木)は、柱真に小秤肘木を組み秤肘木

25) 平壤普通門の場合、平斗栱に梁を掛け梁頭形木鼻(三分頭形)を出した1層の平斗栱を対象に分析

とすることは、上述した二手先組物と同じである。2段目の力肘木（擬似尾垂木）<sup>26)</sup>では、外側と内側の一手先に秤肘木を組まず、柱真では大秤肘木を組む。3段目に、他の二手先組物と同じく梁が載る。4段目に当たる位置において、外側の二手先と柱真には通肘木を、外側の二手先には大秤肘木を梁の上端側面の枅穴に差し込む。そして、外側と内側の一手先には何も組まない。5段目もしくは6段目に当たる位置では<sup>27)</sup>、内側の二手先に通肘木を載せ、内側の二手先に載る桁を受けるようにしている。

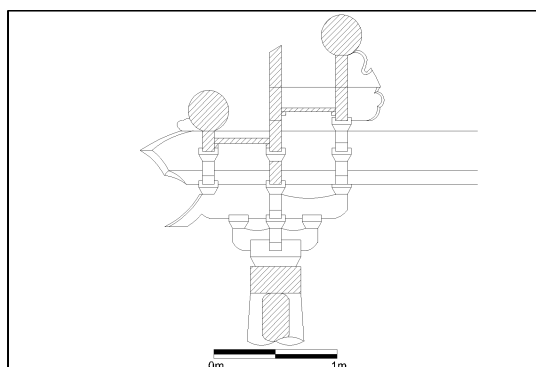


図 6-22 平壤崇仁殿の平斗栱(梁間断面)  
(筆者作図)

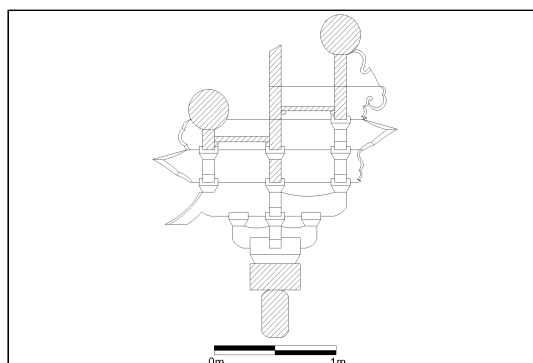


図 6-23 平壤崇仁殿の中備斗栱(梁間断面)  
(筆者作図)

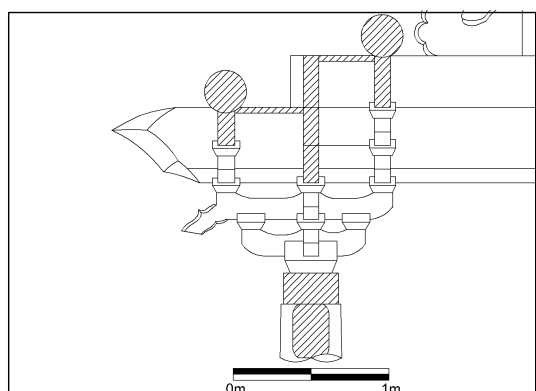


図 6-24 平壤普通門(下層)の平斗栱(梁間断面)  
(筆者作図)

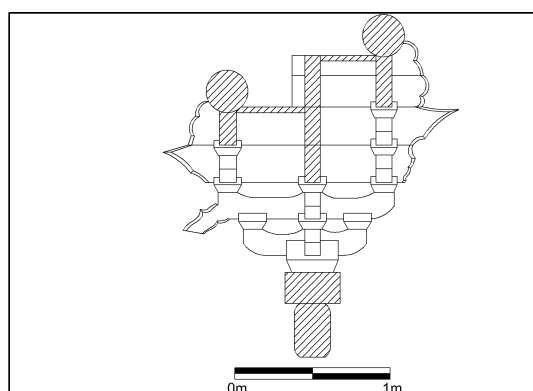


図 6-25 平壤普通門(下層)の中備斗栱(梁間断面)  
(筆者作図)

する。

26) 平壤崇仁殿と平壤普通門における2段目の力肘木は擬似尾垂木であるが、平壤普通門の擬似尾垂木の場合は、柱心包系組物に見られる削型曲線を持つことが特徴である。

27) 平壤崇仁殿は5段目と6段目に当たる位置において、内側の二手先に通肘木を重ねて載せ、内側に雲形の木鼻を出した部材と組んでいる。平壤普通門の場合は、5段目に当たる位置において、内側の二手先に通肘木を載せ、5段目にさらに重ねて載せた梁と組んでいる。



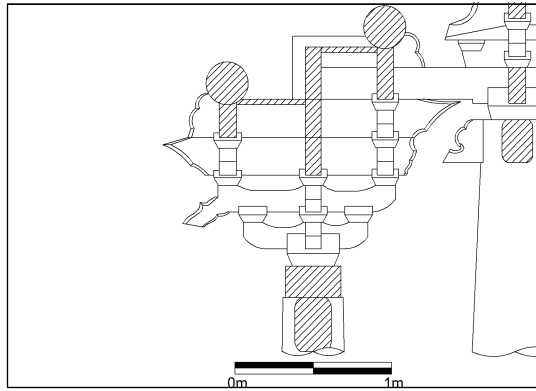


図 6-26 平壤普通門(上層)の平斗栱(梁間断面)  
(筆者作図)

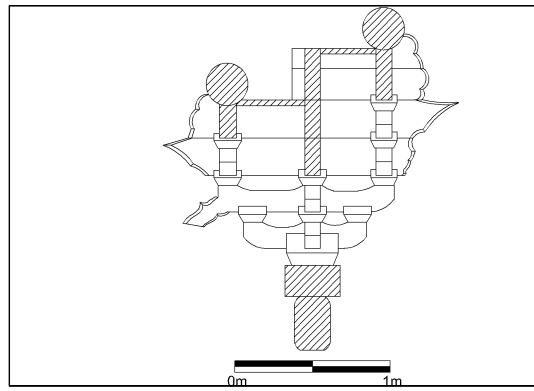


図 6-27 平壤普通門(上層)の中備斗栱(梁間断面)  
(筆者作図)

この2棟の平斗栱において、外部表現を見ると、梁の木鼻に、二手先に載せた3段目の小秤肘木と4段目の出桁受通肘木を組み込み、結合A類型に該当する形式としていることが分かる。

内部表現を見ると、内側の二手先では、3段目の小秤肘木と4段目の大秤肘木が重なり、梁と組む共通点が見られる。このような形式は、安国寺大雄宝殿(上層)の一手先組物の平斗栱において、内側の一手先の構成と同じであり、平壤崇仁殿や平壤普通門に見られる組物の構成形式が、安国寺大雄宝殿上層の組物の構成に影響を与えた可能性があると考えられる。

平壤崇仁殿と平壤普通門の中備斗栱において、組物の段ごとに組まれる秤肘木や通肘木は、平斗栱と同じ構成形式を用いている。

1段目と2段目は平斗栱の1・2段目の構成と同様である。3段目には、外側の先端部を三分頭形に、内側の先端部は柱心包系組物に見られる刳型曲線を用いた形状の木鼻を持つ力肘木を載せ、外側と内側の二手先に小秤肘木を、柱真には通肘木を組ませた。4段目には、外側の先端部を雲形に、内側の先端部は三分頭形にした力肘木を載せ、外側の二手先と柱真に通肘木を組み、内側の二手先には大秤肘木を組んでいる。そして、5段目と6段目には、内側に雲形の肘木に当たる部材を載せ、内側の二手先に通肘木を載せ、内側の二手先の組物の最も上段に載る桁を受けるようにした。平壤普通門の2層の場合、平斗栱に梁を掛けず、平斗栱と中備斗栱を1層の中備斗栱と同じ形式として構成した。2層における平斗栱と中備斗栱の間に見える差は、平斗栱の場合、母屋柱に掛け渡した水平材が、5段目に当たる内側の部分に掛かる。

平壤崇仁殿と平壤普通門の2棟の平斗栱と中備斗栱は、ほぼ同じ構成や意匠形式を持っている。このように共通する特徴は、組物において定型化された構成や意匠的な形式が存在し、その模範となる形式に平壤崇仁殿と平壤普通門の2棟が従っていたものと考えられる。

## 6.2.2 結合B類型

木鼻を結合B類型として組み出したように表現している建築は、正陽寺般若殿と覺淵寺毘盧殿、釋王寺護持門、神勒寺祖師堂、石南寺靈山殿、佛影寺應眞殿の6棟がある。正陽寺般若殿を除く5棟は、外側と内側を二手先に構成した組物を持つ。正陽寺般若殿の場合は、外側を二手先、内側を三手先とした(図2-99参照)。これらの6棟における平斗栱と中備斗栱は、結合A類型の建築の中備斗栱の1段目から3段目までと同じ構成を持つ。

外側と内側を二手先とした場合、4段目においては、各手先と柱真に通肘木が載り、平斗栱では梁(虚梁)または雲栱と生まれ、中備斗栱では雲栱と生まれる<sup>28)</sup>(図2-69参照)。

外側を二手先に、内側を三手先にした、正陽寺般若殿の4段目は、外側の二手先から内側の一手先まで通肘木を、内側の三手先には小秤肘木、内側の二手先は大秤肘木を載せ、平斗栱では梁または雲栱<sup>29)</sup>、中備斗栱では雲栱と生まれている。そして5段目には柱真と内側の一・二・三手先に通肘木が載り、平斗栱の場合は梁の側面に差し込まれ、中備斗栱の場合は内側に載せた肘木に生まれている。

二手先の組物を設けた16棟の組物構成の分析をまとめて見ると、内側の手先数を二手先にしたものから三手先にしたものまで、各手先において、最外郭の手先とその内側の手先まで秤肘木を用い、それより内側の手先や柱真では通肘木を組むという原理が守られている。特に、平壤崇仁殿と平壤普通門の2棟でも、上記の原理範囲に当てはまる。構成的に異なる部分は、一手先の部分に秤肘木や通肘木を組まないことと、組物の4段目において、内側の二手先に大秤肘木を組むことである。

そして、二手先の組物も、結合A類型や結合B類型として木鼻を出す平斗栱において、類型ごとに梁の掛かる位置が違うが、平斗栱の各段に生まれる秤肘木や通肘木は、同じ組み方がなされている。このような組み方は平斗栱と中備斗栱に共通する。

このような共通する組み方から、高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築において、二手先の組物も、模範となる構成形式が存在したと考えられる。そして、虚梁を使用した建築の場合も、その模範となる形式に従い平斗栱と中備斗栱を構成し、結合A類型や結合B類型として平斗栱に木鼻を出すという典型的な外部表現を維持しようとした。

---

28) 釋王寺護持門は、梁を3段目に載せている。このような梁の掛け方は結合A類型の典型的な特徴であるが、梁の先端部は外側の二手先と一手先の間で止まっている。そして、梁頭形の木鼻を出さず、外観には、結合B類型として木鼻を出したように表現されている。

29) 正背面の平斗栱には、梁間方向の梁が正結合B類型として生まれ、両側面の平斗栱には、桁行方向の梁が上段結合式として掛かり、平斗栱の4段目には雲栱が載っている。

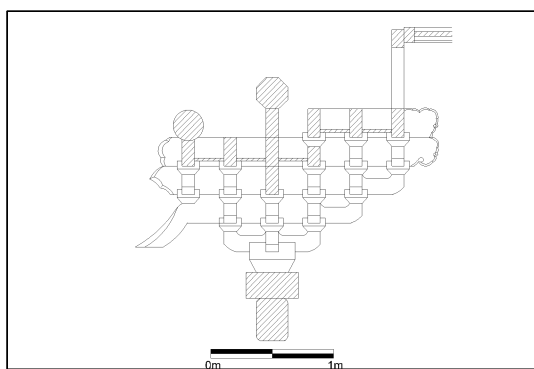


図 6-28 正陽寺般若殿の中備斗栱(梁間断面)  
(筆者作図)

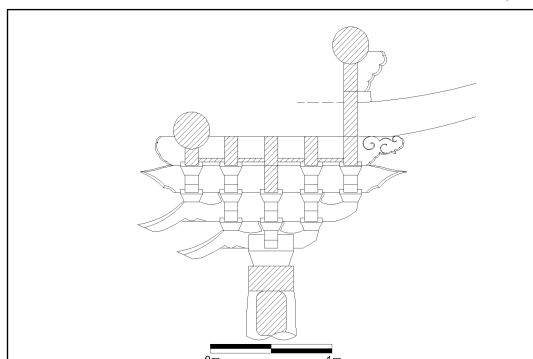


図 6-29 覺淵寺毘盧殿の平斗栱(桁行断面)  
(筆者作図)

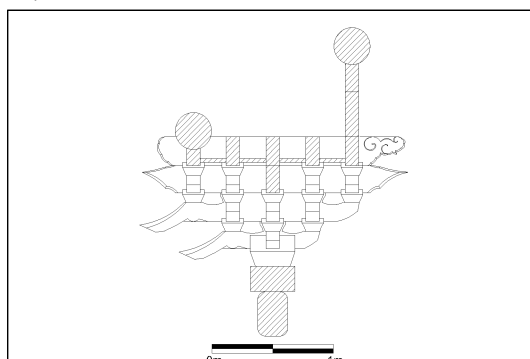


図 6-30 覺淵寺毘盧殿の中備斗栱(梁間断面)  
(筆者作図)

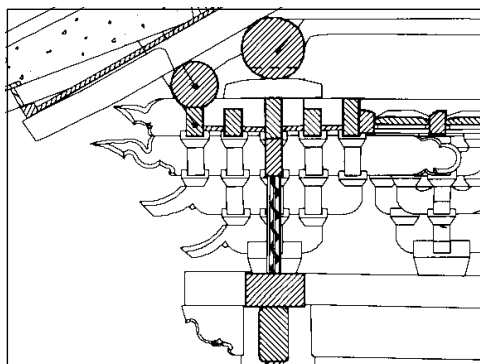


図 6-31 神勒寺祖師堂の中備斗栱(梁間断面)  
(『神勒寺祖師堂実測調査報告書図版』、p.130より)

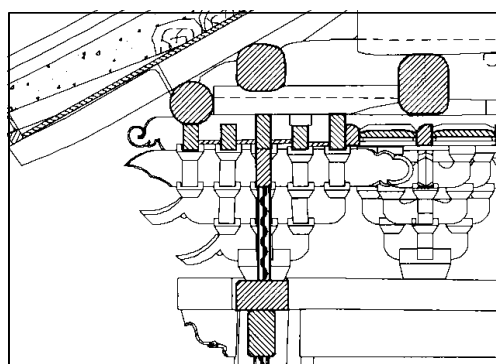


図 6-32 神勒寺祖師堂の平斗栱(桁行断面)  
(『神勒寺祖師堂実測調査報告書図版』、p.131より)

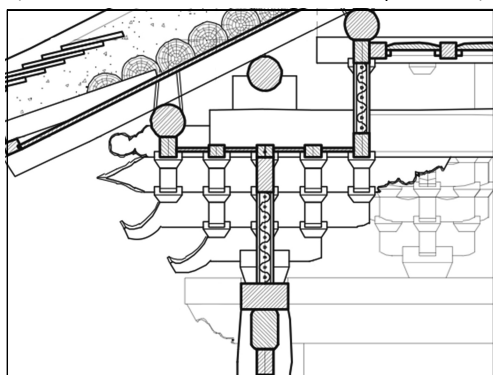


図 6-33 石南寺靈山殿の平斗栱(梁間断面)  
(『石南寺靈山殿解体実測修理報告書』、p.351より)

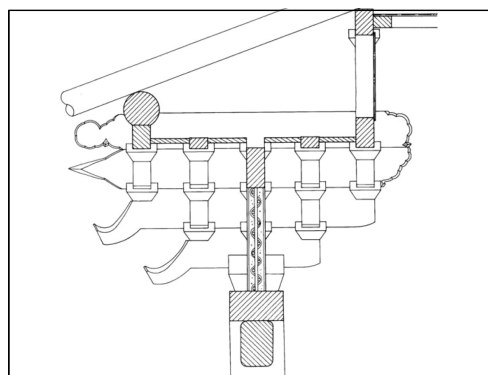


図 6-34 石南寺靈山殿の中備斗栱(梁間断面)  
(『石南寺靈山殿解体実測修理報告書』、p.340より)

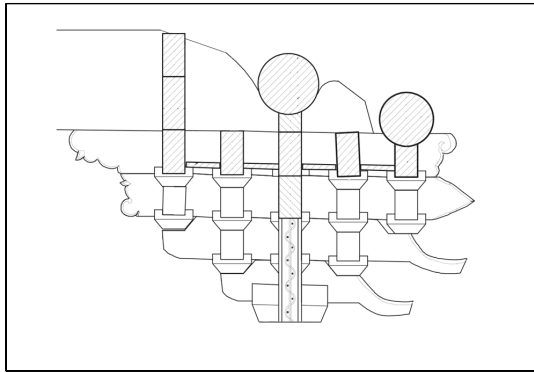


図 6-35 佛影寺應真殿の平斗栱(梁間断面)  
『佛影寺應真殿精密実測調査報告書』、p.353より

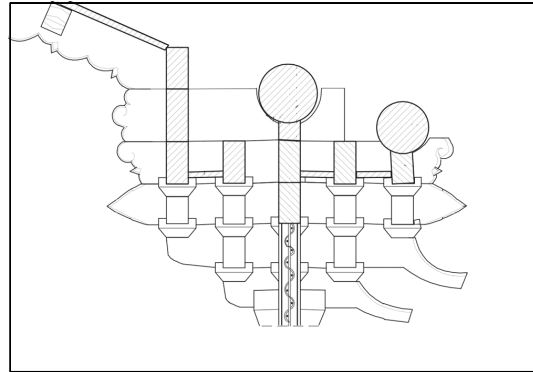


図 6-36 佛影寺應真殿の平斗栱(梁間断面)  
『佛影寺應真殿精密実測調査報告書』、p.345より

### 6.3 三手先の組物

高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築において、三手先の組物を用いた建築は25棟の中で4棟あり、14世紀から15世紀の間に建立された(表6-4参照)。

〈表6-4〉 外部において三手先組物の建築

順番	建築名	年代	組物の手先	平斗栱における虚梁の使用	平斗栱の外観表現	秤肘木の使用
1	燕灘心源寺普光殿	1374年	外3内3	O	梁頭形(A類型)	最外郭の手先とその内側の手先まで
2	安岳月精寺極楽宝殿	14世紀頃	外3内2	O	梁頭形(A類型)	最外郭の手先とその内側の手先まで
3	安国寺大雄宝殿(下層)	1419年	外3内4	X	梁頭形(A類型)	最外郭の手先とその内側の手先まで
4	ソウル崇禮門(上層)	1448年	外3内2	X	梁頭形(A類型)	最外郭の手先とその内側の手先まで

14世紀の建築は、心源寺普光殿(1374年)と月精寺極楽宝殿(14世紀頃)の2棟、15世紀の建築では、安国寺大雄宝殿(下層の組物)とソウル崇禮門(上層の組物)が当てはまる。

一手先と二手先までの組物は、結合A類型と結合B類型が混在していたが、三手先の組物を持つ4棟は、結合A類型として、梁もしくは虚梁を平斗栱に組み、梁頭形の木鼻(三分頭形)を出している。そのうち、平斗栱に虚梁を使用した建築は、心源寺普光殿と月精寺極楽宝殿の2棟があり、この2棟は、正背面の平斗栱には梁間方向の梁が組まれ三分頭形の木鼻を出し、両側面の平斗栱には、梁を掛けず、桁行方向の虚梁を掛け三分頭形の木鼻を出すことで共通している。

外側を三手先とした組物は、外側と内側を三手先としたものも含め、内側を二手先としたものと、内側を四手先としたものまで現れ、組物において、内側の手先数に最も多いバリエーションを見せる。外側と内側を三手先にしたのは心源寺普光殿1棟、内側を二手先にしたのは月精寺極楽宝殿とソウル崇禮門(上層)の2棟、内側を四手先にしたのは安国寺大雄宝殿(下層)1棟である。

三手先組物の、平斗栱と中備斗栱の構成について、内側の手先数で分類して分析を行う。

まず、内側を二手先とした、月精寺極楽宝殿とソウル崇禮門(上層)の事例を見る。

2章で行った虚梁と組物との結合原理に関する分析から、月精寺極楽宝殿における平斗栱の構成は、次のような組み方を用いたことが明らかとなった(図2-77、図2-78参照)。

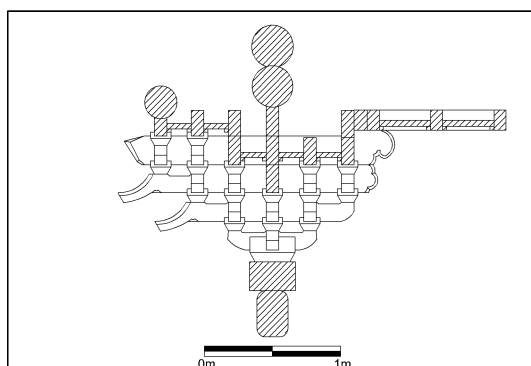


図 6-37 月精寺極楽宝殿の中備斗拱(梁間断面)  
(筆者作図)

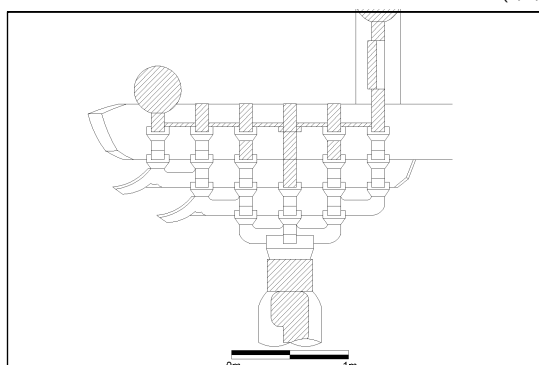


図 6-38 ソウル崇禮門(上層)の平斗拱(梁間断面)  
(筆者作図)

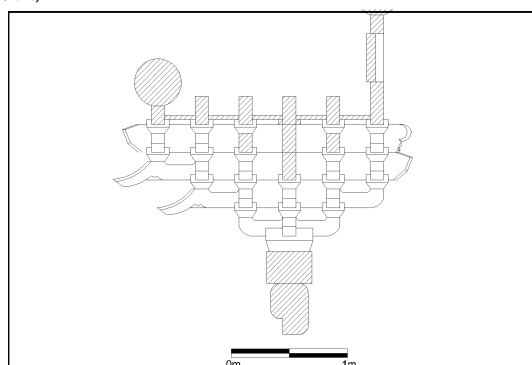


図 6-39 ソウル崇禮門(上層)の中備斗拱(梁間断面)  
(筆者作図)

1 段目と 2 段目は、二手先組物の 1・2 段目と同じく構成する。3 段目の力肘木には、外側と内側の二手先に小秤肘木を、外側と内側の一手先に大秤肘木を組み、柱真には通肘木を組む。4 段目には梁（虚梁）が載り、4 段目の外側において、三手先に小秤肘木、二手先には大秤肘木、一手先と柱真では通肘木を、梁（虚梁）の下段部に差し込む。4 段目の内側は、二手先として構成されているため、4 段目に当たる位置では、二手先と一手先に通肘木が載り、梁（虚梁）の下段部に差し込まれる。5 段目に当たる位置において、外側と内側の各手先と柱真に通肘木を載せ<sup>30)</sup>、梁（虚梁）の上段側面の枅穴に差し込む。そして、外側の三手先に載る通肘木は出桁受通肘木となる。

内側を二手先としたソウル崇禮門（上層）の組物の組み方も、上記した月精寺極楽宝殿の組物と基本的に同じ組み方となっている。月精寺極楽宝殿と異なるのは、出桁受通肘木が載る 5 段目において、内側の二手先の部分に通肘木ではなく、大秤肘木を載せるということである。出桁受通肘木が載る位置に、内側の最外郭の手先に大秤肘木を載せるという組み方は、安国寺大雄宝殿(上層)の一手先組物や平壤崇仁殿と平壤普通門の二手先組物にも見られる。

月精寺極楽宝殿とソウル崇禮門(上層)の中備斗拱にも、平斗拱と同じ組物の構成原理が用い

30) 月精寺極楽宝殿は、5 段目に当たる位置において、内側の一手先に通肘木を用いてない特色が見られる。

られている。1段目から5段目の位置に至るまで、各手先と柱真に使われる秤肘木と通肘木は、平斗拱と中備斗拱において同じく構成されている。平斗拱と中備斗拱の構成的の違いは、中備斗拱の場合、4段目と5段目（雲拱が組まれる位置）には力肘木材を載せていることである。

次に、三手先組物において、内側も三手先とした心源寺普光殿の平斗拱と中備斗拱の構成を見ていく（図2-71、図2-72参照）。

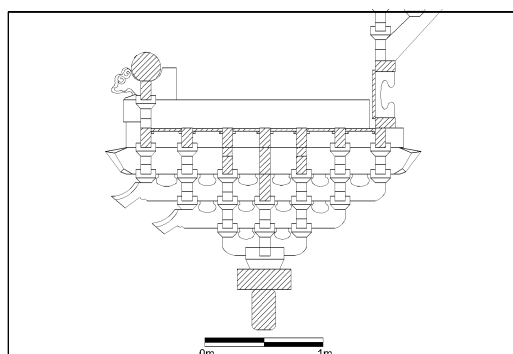


図 6-40 心源寺普光殿の中備斗拱(梁間断面)  
(筆者作図)

1段目から3段目まで、各手先と柱真に使われる秤肘木と通肘木は、上記の内側を二手先とした組物と同じく構成する。そして、4段目において、外側と内側の三手先に小秤肘木を、外側と内側の二手先に大秤肘木を組み、外側と内側の一手先と柱真には通肘木を組んでいる。5段目において、各手先と柱真には通肘木を載せ、外側の三手先に載った通肘木は、出桁受通肘木となる。

平斗拱の場合、4段目と5段目に当たる位置に梁（虚梁）が掛かり、4段目と5段目の秤肘木および通肘木が梁に組み込まれる。中備斗拱の場合、4段目に外側と内側の先端部を三分頭形の形状とした力肘木を、5段目には外側と内側の先端部を直角に切り出した力肘木を載せている<sup>31)</sup>。

そして、三手先組物において、内側の手先を四手先とした安国寺大雄宝殿(下層)の平斗拱と中備斗拱の構成を見る。1段目から4段目まで、各手先と柱真に使われる秤肘木と通肘木は、上記の内側を三手先とした組物と同じく構成している。5段目において、外側と内側の三手先に小秤肘木を、外側と内側の二手先に大秤肘木を組み、外側と内側の一手先と柱真には通肘木

31) 心源寺普光殿は、外側の三手先において、5段目の通肘木の上に、6段目に当たる位置に大秤肘木を、7段目に当たる位置に通肘木をさらに載せ、7段目の通肘木が出桁受通肘木となる。このような特徴は、他に見れない。

を組んでいる。5段目において、外側の各手先と柱真に通肘木を載せ、内側では、四手先に小秤肘木を、三手先には大秤肘木を載せ、内側の二手先と一手先に通肘木を使う。内側において、6段目に当たる位置には、四手先と三手先、二手先に通肘木を載せる。

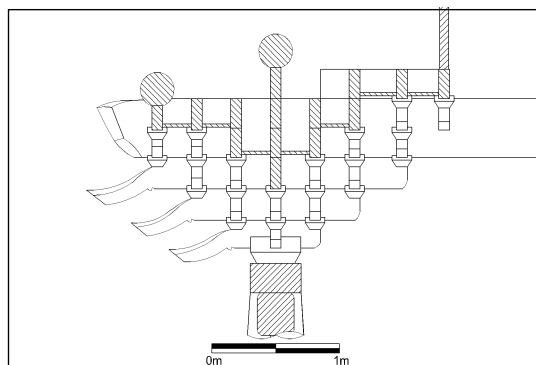


図 6-41 安国寺大雄宝殿(下層背面)の平斗栱(桁行断面)  
(筆者作図)

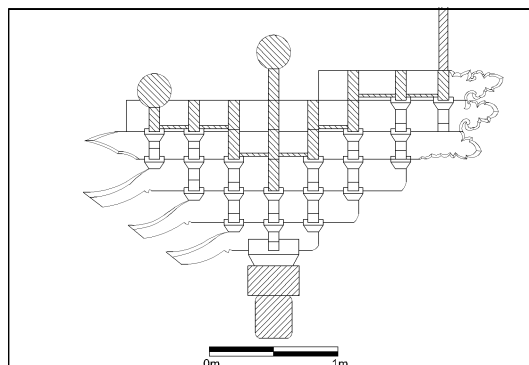


図 6-42 安国寺大雄宝殿(下層背面)の中備斗栱(桁行断面)  
(筆者作図)

平斗栱の場合、4段目と5段目に当たる位置に梁が掛かり、4段目と5段目の秤肘木および通肘木が梁に組み込まれる。中備斗栱の場合、4段目と5段目に力肘木を載せ、各手先と柱真に載せた秤肘木および通肘木と組む。そして6段目では、内側の四手先から一手先まで肘木材を載せ、各手先の通肘木と組まれる。

三手先の組物を設けた4棟の組物の構成をまとめて見ると、内側の手先数を二手先、三手先、四手先にしたものまで、各手先において、最外郭の手先とその内側の手先まで秤肘木を用い、それより内側の手先や柱真では通肘木を組むという原理を守っている。

また、結合A類型として木鼻を出す平斗栱と、中備斗栱において、各段に組まれる秤肘木や通肘木は、同じ組み方を用いている。

高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築において、三手先の組物も、模範となる構成形式が存在したと考えられ、虚梁を使用した心源寺普光殿と月精寺極楽宝殿の2棟の場合も、その模範となる形式に従い、平斗栱と中備斗栱を構成していたことが分かる。そして虚梁を用い、結合A類型として平斗栱に木鼻を出すという典型的な外部表現を維持しようとした。



## 6.4 四手先の組物

四手先の組物を設けたのは、高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築25棟の中で2棟、14世紀の建築と15～16世紀頃の建築に見られる(表6-5参照)。

〈表6-5〉 外部において四手先組物の建築

順番	建築名	年代	組物の手先	平斗拱における虚梁の使用	平斗拱の外観表現	秤肘木の使用
1	博川深源寺普光殿	1368年	外4内4	○	梁頭形(A類型)	最外郭の手先とその内側の手先まで
2	瑞興歸進寺極楽殿	1488-1505年	外4内4	○	梁頭形(A類型)	最外郭の手先とその内側の手先まで

14世紀の建築は、深源寺普光殿(1368年)1棟、15～16世紀頃の建築では、歸進寺極楽殿(1488-1505年)1棟である。

四手先の組物を持つ2棟は、虚梁を使用し、結合A類型として虚梁を平斗拱に組み、梁頭形の木鼻(三分頭形)<sup>32)</sup>を出している。一手先と二手先の組物は、結合A類型や結合B類型の二つのタイプの結合形式を用いるが、三手先から四手先の組物の組物では、結合A類型にするという特徴が見える。そして、外側を四手先にした組物は、内側の手先の数も四手先として構成している。

四手先の組物を持つ深源寺普光殿と歸進寺極楽殿の2棟における平斗拱の構成は、2章で行った虚梁と組物との結合原理に関する分析から、次のような組み方を用いたことが明らかになった(図2-73、図2-74、図2-75、図2-76参照)。

1段目と2段目、3段目は、三手先組物の1・2・3段目と同じく構成する。そして、4段目の力肘木では、外側と内側の三手先に小秤肘木を、外側と内側の二手先に大秤肘木を組み、外側と内側の一手先と柱真には通肘木を組む。5段目には虚梁が載り、虚梁の下段部に、外側と内側の四手先に小秤肘木を、外側と内側の三手先に大秤肘木を組み、外側と内側の二手先と一手先、柱真には通肘木を組み込む。6段目に当たる位置では、外側と内側の四手先から二手先まで通肘木を載せ、虚梁の上段側面の柄穴に差し込む。6段目の外側の四手先に載る通肘木は出桁受通肘木となる。6段目において、通肘木は、外側と内側の一手先には使われず、柱真には選択的な使用が窺える<sup>33)</sup>。

32) 深源寺普光殿の場合、正面と両側面の平斗拱には、鬼面を彫刻した虚梁の木鼻を出しているが、これは、修理の際の改造である。背面の平斗拱には高麗時代末・朝鮮時代初期の典型的な三分頭形とした虚梁の木鼻を用いている。

33) 6段目において、柱真に通肘木を載せているのは歸進寺極楽殿である。

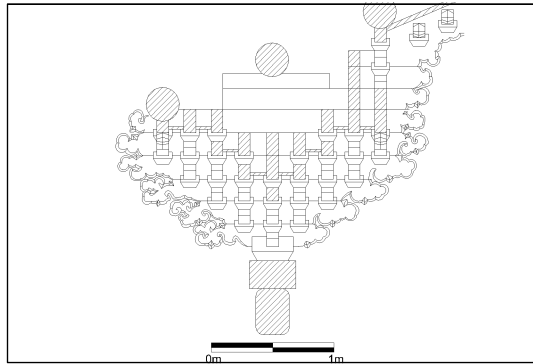


図 6-43 深源寺普光殿の中備斗栱(梁間断面)  
(筆者作図)

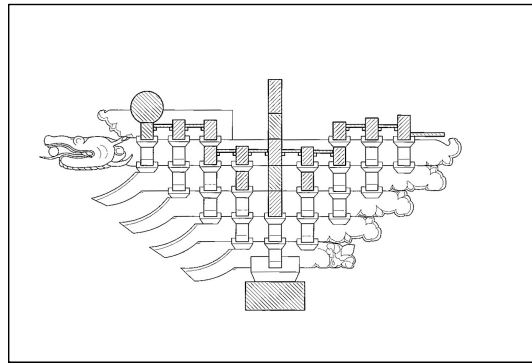


図 6-44 歸進寺極楽殿の中備斗栱(梁間断面)  
(『北朝鮮の伝統建築：黄海北道1』、p.99より)

中備斗栱にも、平斗栱と同じ組物の構成原理が用いられている。1段目から6段目の位置に至るまで、各手先と柱真に使われる秤肘木と通肘木は、平斗栱と中備斗栱の構成は同様である。平斗栱と中備斗栱の構成的な差は、中備斗栱の場合、5段目と6段目（雲栱が組まれる位置）に力肘木材を載せていることである。

四手先の組物を設けた2棟の組物の構成をまとめて見ると、各手先において、最外郭の手先とその内側の手先まで秤肘木を用い、それより内側の手先や柱真では通肘木を組むという原理が守られている。

また、結合A類型として木鼻を出す平斗栱と、中備斗栱において、各段に組まれる秤肘木や通肘木は、同じ組み方を用いてる。

高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築において、四手先の組物も、模範となる構成形式が存在し、虚梁を使用した深源寺普光殿と歸進寺極楽殿の2棟の場合も、その模範となる形式に従い、平斗栱と中備斗栱を構成したと考えられる。そして虚梁を用い、結合A類型として平斗栱に木鼻を出すという典型的な外部表現を維持しようとした。

## 6.5 正統的な多包系組物の構成形式

高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系組物において、一手先から四手先までの組物構成の分析に基づき、定型化された構造的・意匠的形式を備え、多包系組物の構成に模範となった形式、即ち正統的な多包系組物の構成形式を分類する。

高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築25棟の組物は、一手先の組物から四手先の組物に至るまで、確立した形式の組物の構成をもっている。一手先から四手先までの組物の構成に用いた組み方は、外側と内側の各手先において、最外郭の手先とその内側の手先まで秤肘木を用い、それより内側の手先や柱真では通肘木を組むという原理に当てはまる。このような構成原理は、12世紀頃の鳳停寺極楽殿の唐家の組物から確認できる。

25棟の組物を考察した結果、多包系組物の構成の際に、模範となっていた形式を見ると、鳳停寺極楽殿唐家の組物の構成をそのまま継承した形式と、一手先の部分に秤肘木や通肘木を組まない形式に分けられる。前者の形式に従ったのは鳳停寺極楽殿唐家系列と分類し、後者の形式を用いたのは平壤崇仁殿系列と分類する。

高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築25棟の中で、平壤崇仁殿と平壤普通門の2棟が平壤崇仁殿系列に該当し、それ以外の23棟は鳳停寺極楽殿唐家系列に当たる。

### 6.5.1 鳳停寺極楽殿唐家系列

鳳停寺極楽殿は、韓国に現存している最古の建築の一つである<sup>34)</sup>。鳳停寺極楽殿に収められている唐家も、鳳停寺極楽殿が建立された時期のもものと推定されている。製作年代に関する判断の根拠と挙げられるのは、斗の斗繰である。鳳停寺極楽殿の唐家に使われた大斗の斗繰は曲面を持ち、その形状は鳳停寺極楽殿に使われた大斗の斗繰と同様である。また、卷斗や方斗は斗が使われている。現存する14世紀以後に建立された多包系組物の大斗や卷斗、方斗などの斗繰の部分をも曲面ではなく、平面としたものがほとんどである<sup>35)</sup>。そして、肘木の両端を斜めに切っている特徴があり、14世紀以後多包系の肘木の両端を直角に切ることと異なる。また、高欄の形式も、14世紀以後の建築に見られない古式であり、古代新羅の佛国寺多宝塔(8世紀)の高欄の形式に該当する。そして、唐家には板張り天井(鏡天井に当たる)と組入天井を同時に設けている。特に組入天井は、鳳停寺極楽殿の唐家以外、現存する他の建築では見ら

---

34) 1363年(恭愍王12年)に屋根を修理した上梁文の記録から、建立年代は12世紀～13世紀頃と推測されている。(文化財庁、『鳳停寺極楽殿修理実測報告書』、2003.8、p.102)

35) 覚淵寺毘盧殿(14世紀頃)の場合、曲面の斗繰を持った卷斗や方斗がごく一部に残っている。また、高敞禪雲寺懺堂庵大雄殿(1619年)では、背面の組物に皿斗の形式の大斗と卷斗が使われており、17世紀の大修理を受ける以前には、高麗時代末期以前の多包系建築の姿を守っていた可能性もあると推測される。

れないものであり、古代中国や日本の組入天井と類似する形式をもっている。このような様式的な特徴<sup>36)</sup>から、鳳停寺極楽殿唐家の製作時期は鳳停寺極楽殿と同時期のものと判断され、鳳停寺極楽殿の修理履歴から12世紀頃のものとして推定されている<sup>37)</sup>。



図 6-45 鳳停寺極楽殿の組物  
(筆者撮影)

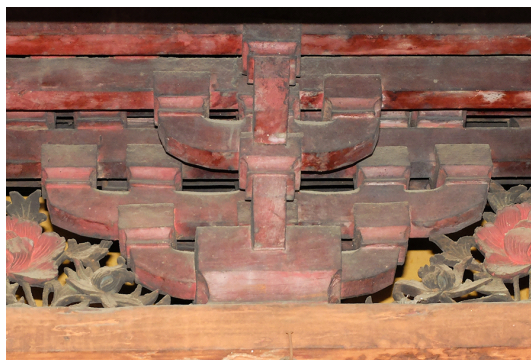


図 6-46 鳳停寺極楽殿唐家の組物  
(筆者撮影)



図 6-47 鳳停寺極楽殿唐家の組入天井  
(筆者撮影)



図 6-48 鳳停寺極楽殿唐家の高欄  
(筆者撮影)

鳳停寺極楽殿唐家は、外側を5手先、内側を2手先とした多包系組物を持つ。2章での考察から、鳳停寺極楽殿唐家の組物は、外側と内側の各手先において、最外郭の手先とその内側の手先に秤肘木を使用し、それより内側の手先と柱真には通肘木を使うという原理を用いていた。この組物の構成原理を用いた最古の事例が鳳停寺極楽殿唐家である。その後、この構成原理は、高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系組物にも継承され、この原理を守りながら、水平方向と垂直方向に拡張しながら手先の数を増やし、一手先から四手先まで、定型化した形式の組物を構成するようになっていた。

高麗時代に成立した組物の構成原理は、17世紀以後から20世紀初期までの多包系組物において維持されている<sup>38)</sup>。

36) 裴秉宣氏は、鳳停寺極楽殿唐家の様式的・構造的な特徴を挙げ、多包系建築の初期の姿と見た（裴秉宣、『多包系切妻造建築に関する研究』、ソウル大学校博士学位論文、1993.8、p.53）。

37) 様式的な判断から鳳停寺極楽殿の唐家を、鳳停寺極楽殿が建立された同時期と推定した、最も早い時期の研究と挙げられるのは、杉山信三氏の「朝鮮木造建築固有様の研究」（『日本建築学会論文集』、第36号、日本建築学会、1947.12、p.95）である。

特に、楞伽寺大雄殿（1644年）をはじめ、景福宮勤政殿（1867年）を代表する19世紀半ばから20世紀初期に建てられた宮殿の多包系組物でも、全体構成は上記の原理を維持しているが、1段目と2段目の柱真に、秤肘木の代わりに、板状の通肘木を載せるようになっており、1段目と2段目の柱真に秤肘木が使われたように見せかけている。



図 6-49 景福宮勤政殿の組物  
(筆者撮影)

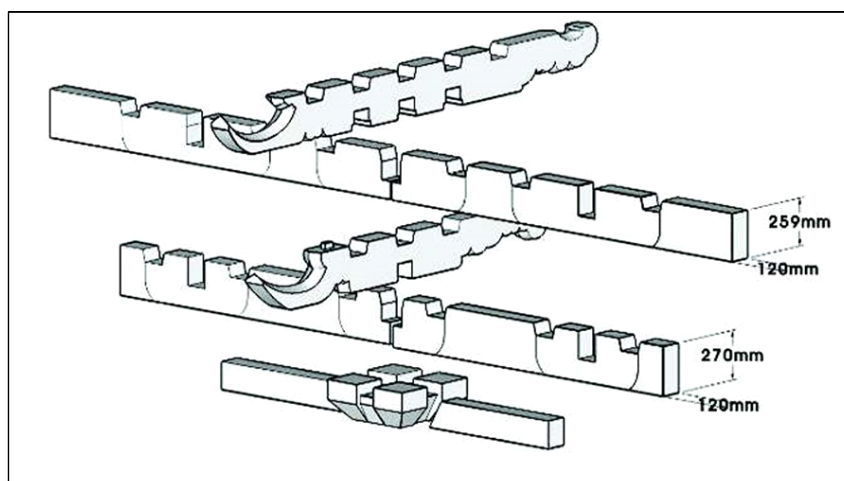


図 6-50 景福宮勤政殿の1段目と2段目の通肘木(柱真)  
(『韓国伝統木造建築物营造規範調査報告書』、p.377より)

38) 17世紀以後の多包系建築の中で、外側と内側の各手先において、最外郭の手先とその内側の二手先まで秤肘木を使用し、それより内側に通肘木を使うという組物を持った事例が確認できる。高敞禪雲寺大雄殿（1614年）と高敞禪雲寺懺堂庵大雄殿（1619年、正面の組物）、完州松廣寺大雄殿（1636年）、安城青竜寺大雄殿（17世紀、背面の組物）が上述した事例に該当する。高敞禪雲寺大雄殿と高敞禪雲寺懺堂庵大雄殿、完州松廣寺大雄殿、安城青竜寺大雄殿の組物は、外側と内側を三手先とした共通点があり、壬辰倭乱以後に再建された寺院建築である。上記の建築に用いられた組物の構成は、16世紀以前の多包系建築から存在していた可能性があると考えられる。特に、高敞禪雲寺懺堂庵大雄殿は、背面の組物において、外側の一手先と二手先に秤肘木を組まないという特色が見られ、平壤崇仁殿系列と共通する特徴も用いている。そのため、外側と内側の各手先において、最外郭の手先とその内側の二手先まで秤肘木を使用し、それより内側に通肘木を使うという組物の構成をもった建築は、朝鮮時代初期以前から存在した可能性もあると考えられる。

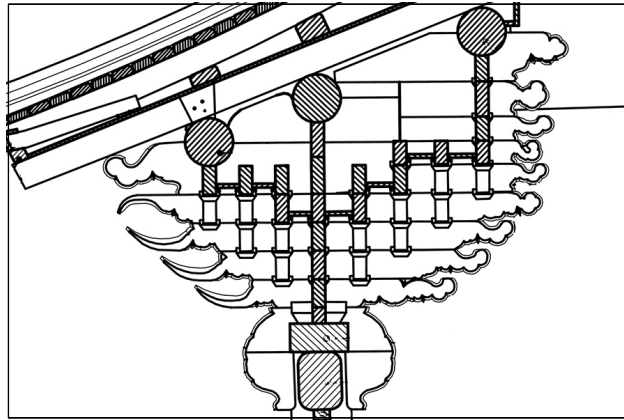


図 6-51 景福宮勤政殿(下層)の中備斗拱(梁間断面)  
 (『勤政殿補修工事及び実測調査報告書(下)』、p.377より)

この板状の通肘木において、1段目では小秤肘木、2段目には大秤肘木の形状のように彫刻が施されている。このような作為から、平斗拱と中備斗拱において、鳳停寺極楽殿唐家の組物が繋がる正統的な組物の構成を守ろうとした意図が読み取られる。

鳳停寺極楽殿唐家の組物に見られる構成原理は、現存する14世紀以後の官営及び寺院建築で共有されている。そして、多包系組物の最古の事例として挙げられる鳳停寺極楽殿唐家の組物も、12世紀頃の宮殿および官営、寺院の多包系建築に用いられた組物の構成原理を受け継いだ可能性がある。

高麗王朝の政治や貴族文化の中心であった開城の宮殿と官営、宗教建築に定型化した形式が成立し、それをきっかけに、全国的に模範となる多包系建築が生まれたと推測される。その模範となる構造や意匠の形式が、地方の多包系建築にも伝播することで、鳳停寺極楽殿の唐家に直接反映したものと考えられる。

地方の官営および寺院建築に、首都に見られる多包系建築の形式や技法が伝播した背景には、僧匠が大工として造営に参加したことが挙げられる。僧匠が寺院の工事に参加したのは、新羅時代末期の9世紀から見られ<sup>39)</sup>、高麗時代にも寺院の建設や官営建築の造営に僧匠が参加したことが知られている<sup>40)</sup>。そして、朝鮮の建国と伴って創建されたソウル崇禮門(1398年に竣工)にも、法輪寺の僧侶である覺希が大木(棟梁)として活躍したことが上梁文から確認できる<sup>41)</sup>。首都の宮殿や役所、霊廟、寺院などの多包系建築の造営に参加した僧匠が、工事が終わった後、地元の寺院や他の建設現場に移り、首都の多包系建築の形式を地方の多包系建築に

39) 新羅の眞聖女王8年(895年)に制作された『海印寺妙吉祥塔記』に、「大匠僧蘭交」、「匠士僧蘭交、僧清裕」という記事が確認できる。(金東旭、『韓国建築工匠史研究』、技文堂、1993.8、p.77)

40) 前掲書、金東旭(1993年)、pp.78~90

41) ソウル特別市教育委員会、『ソウル南大門修理報告書』、1966.2、p.78

移入させた可能性が考えられる。

また、首都の宮殿と官営建築において多包系建築の造営は、頻繁になされものではない。多包系建築の建造としては、宮殿および官営建築が多包系建築として建てられた数より、全国的に多く分布する寺院の方が多かったと思われる。火災や戦乱を受け、宮殿と官営の多包系建築の再建または新築が行われる際に、僧匠が造営に参加することで、その当時の寺院建築で流れた意匠的な特徴や技法が宮と官営建築に反映され、宮殿や官営建築、寺院建築において、同時代の様式的な特徴が共通して見られるようになったと推測される<sup>42)</sup>。

各地方には、客舎が建設され、中央から地方への統治の中心となる。高麗時代の客舎建築は、江陵臨瀛館三門（14世紀以前）と安城客舎正庁（14世紀以前）が現存しており、この2棟の客舎建築は、ある程度の定型化した形式の柱心包系建築である。江陵臨瀛館三門と安城客舎正庁に見る柱心包系建築の形式は、礼山修徳寺大雄殿（1308年）と成仏寺極楽殿（1374年）という寺院の柱心包系建築にも用いられている<sup>43)</sup>。すなわち、定型化された柱心包系建築の形式が、官営建築と寺院建築に共有されており、このような現象は多包系建築にも見られる。高麗時代において、定型化された建築形式が、官営と寺院の建築に共有される背景には、造営の際に模範となる建築が存在したこととともに、官営建築と寺院建築の建設への、僧匠の参加による建築技術の伝播も一つの要因であったと考えられる。

上述した建築生産の背景と建築技法が官営建築と寺院建築に伝播する過程を経て、鳳停寺極楽殿唐家に定型化された多包系組物の構成原理が用いられ、14世紀以後の多包系建築にも、鳳停寺極楽殿唐家の組物に見る構成原理が継承されたと考えられる。そして、官営と寺院の多包系建築に虚梁を掛ける技法が共有されたことも、上記の僧匠の造営活動が結びついていると考えられる。

鳳停寺極楽殿唐家の組物は、外側を五手先、内側を二手先として構成している。多包系組物を持つ唐家の中で、14世紀以前のものとして推測される他の事例は、安岳月精寺極楽宝殿の唐家がある<sup>44)</sup>。月精寺極楽宝殿唐家の組物は、外側を六手先、内側を二手先としている<sup>45)</sup>。『营造

---

42) 驪州神勒寺祖師堂（1472年）は、多包系組物に翼工（肘木）が使われた早い時期の建築であり、17世紀以後に建立された宮殿の多包系建築にも、驪州神勒寺祖師堂に見る翼工と折衷された多包系組物が現れる。このような現象は、僧匠が宮殿や官営の多包系建築の造営に参加したことが原因であろうと推測される。

43) 江陵臨瀛館三門と安城客舎正庁、修徳寺大雄殿、成仏寺極楽殿の組物と梁架構に関する考察は、第7章の「7.2 柱心包系建築における梁の位置変化」の項目で行う。

44) 安岳月精寺極楽宝殿に収められている仏壇と、その上の唐家は制作年代が異なり、唐家の方が仏壇より制作年代が古いものと推測されている（国立文化財研究所、『北朝鮮の伝統建築：黄海南道1』、2007.11、p.21）。唐家の軒丸瓦には日暉紋と分類される文様が用いられ、安岳月精寺極楽宝殿の唐家に使われた日暉紋の文様の軒丸瓦は、11世紀末頃から現れる（朴銀卿、「高麗瓦當文様の編年研究」、『考

法式』(北宋、1103年)の鋪作では、四鋪作から八鋪作まで、つまり一手先から五手先までの組物が記述されており、五手先を最大の手先数としている。高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築では、五手先の組物を設けた事例は現存せず、五手先の組物を使った建築の存在も不明である。現存する事例からは、四手先を最大としている。

鳳停寺極楽殿や月精寺極楽宝殿の唐家のように、外側を五手先または六手先、内側を二手先とした組物は、唐家における組物ならではの表現と見られる。建築では、外側を四手先までとした組物が使われていたと推測される。

高麗時代末・朝鮮時代初期における多包系建築において、四手先の組物を使った事例は、博川深源寺普光殿(1368年)と瑞興歸進寺極楽殿(1488-1505年)の2棟が確認でき、2棟ともに寺院建築である。そして、外側と内側の手先とも四手先を構成している。

韓国の宮殿の正殿は、17世紀以後のものが現存している。昌慶宮明政殿(1616年)にはじまり、昌徳宮仁政殿(1804年)、景福宮勤政殿(1868年)、徳寿宮中和殿(1906年)の4棟が、多包系建築の正殿であり、全て外側を三手先に、内側を四手先としている。朝鮮時代初期の多包系建築の正殿の場合も、外側を三手先とした組物を持っていた可能性がある。

高麗時代末期の宮殿(本闕)の正殿もしくは便殿と離宮の重要殿閣は、多包系建築として建てられたと推測され、その建築に用いられた組物は、外側を三手先もしくは四手先にしていたと推測される。特に、高麗時代の宮殿では、燃燈会と八閔会に代表される様々な仏教儀式がなされ、宮殿の正殿を含めて重要殿閣は、国の重要な儀礼が行われる王権のシンボリックな建築でありながら王朝が主催する仏教儀式の舞台ともなっていた<sup>46)</sup>。このような宮殿の用途から、高麗時代末期の宮殿の正殿は、仏殿に見られる四手先の組物を持つ多包系建築であったと推測される。

現存する高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築において、組物の外側の手先を、一手先と二手先にした平斗栱には、梁頭形の木鼻を結合A類型として出した事例と雲栱形の木鼻や梁頭形の木鼻を結合B類型として出した事例が共存している。外側の手先を、三手先と四手先にし

---

古歴史學志』、第4号、東亞大学校博物館、1988年、p.160)。そして、12~13世紀頃のものとして推定される浮石寺無量寿殿の軒丸瓦にも、月精寺極楽宝殿唐家の軒丸瓦と同じ文様の軒丸瓦が使われている。月精寺極楽宝殿唐家にみる日暉紋の文様の軒丸瓦は、モンゴルからの本格的な支配が始まる13世紀後半の以前まで使われていた。

45) 月精寺極楽宝殿唐家における組物の構成は、基本的には鳳停寺極楽殿唐家の構成原理に従っているが、2段目の力肘木(一手先に当たる肘木)の柱真に通肘木が使われる特色がある。

46) 『高麗史』と『高麗史節要』では燃燈会や八閔会を含めて1,232回の仏教儀式に関する記事が確認でき、そのうち738回の仏教儀式は、宮(正宮、719回)と離宮(118回)で行われた。宮の建築ごとに、仏教儀式の開催数を見ると、会慶殿(宣慶殿)97回、乾徳殿(大觀殿)64回、文徳殿(修文殿)57回、重光殿(康安殿)24回と確認できる。(ウソンフン、「高麗時代宮闕内仏行事の特性に関する研究-高麗史と高麗史節要の記録を中心に-」、『大韓建築学会論文集』計画系、第31巻第12号、大韓建築学会、2015.12、p.136)



た平斗栱は、梁頭形の木鼻（三分頭形）を結合A類型として出した事例のみ確認できる。そのうち、三手先の組物を持つ、安国寺大雄宝殿（下層、1419年）とソウル崇禮門（上層、1448年）では、梁が結合A類型として平斗栱に組まれた形式を持つ。この2棟において、平斗栱に組まれた梁は、内側の母屋柱に差し込まれる繫梁である。

四手先の組物をもつ、深源寺普光殿（1368年）と歸進寺極楽殿（1488～1505年）の2棟は、虚梁を結合A類型として平斗栱に組んだ事例であり、梁は虚梁の上に載っている。また、母屋柱を減柱および移柱している。つまり、高麗時代末・朝鮮時代初期の現存する多包系建築では、梁を四手先の平斗栱に組んだ事例は現存しない。

外側と内側の各手先において、最外郭の手先とその内側の手先まで秤肘木を用い、それより内側の手先や柱真では通肘木を組むという原理を守りながら、梁が平斗栱に正結合A類型として生まれ、梁頭形の木鼻（三分頭形）を出すという形式を用いるものが、正統的な四手先組物の形式と推定される。

高麗時代末期の多包系建築を継承し、朝鮮時代初期に建てられたソウル崇禮門は、14世紀から15世紀初期の宮殿と官営の多包系建築の姿をよく反映した建築と考えられ、上層の三手先組物の形式を基に、最高級の正統的な四手先組物の形式を推定した<sup>47)</sup>。

以下の図に示しているのは、推定される四手先の平斗栱と中備斗栱である<sup>48)</sup>。

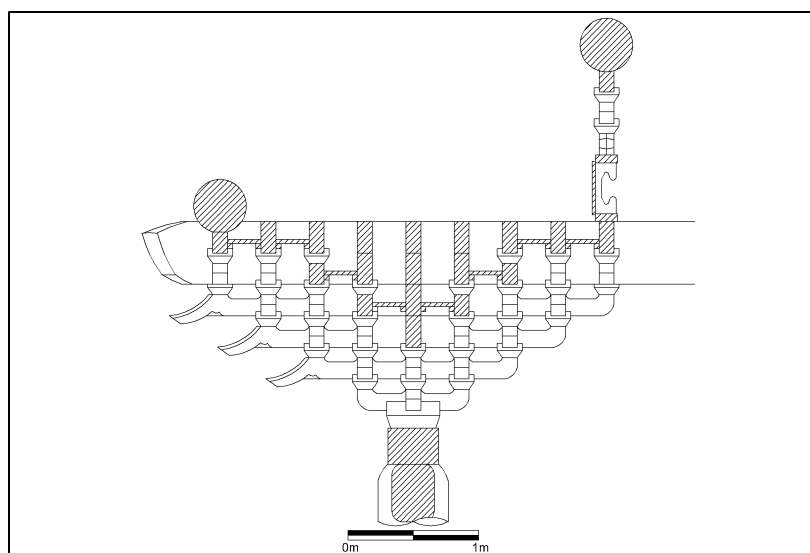


図 6-52 推定される正統的な四手先の平斗栱  
(筆者作図)

47) 結合B類型として雲栱形の木鼻を出す形式は、二手先組物までで使われており、高麗時代末期頃の最高級の正統的な四手先組物の形式には相応しくないと推定した。

48) 四手先の組物を持つ、博川深源寺普光殿（1368年）と瑞興歸進寺極楽殿（1488-1505年）の2棟は、外側も内側も四手先としていることから、推定される正統的な四手先組物の形式も、外側と内側ともに四手先として推定した。

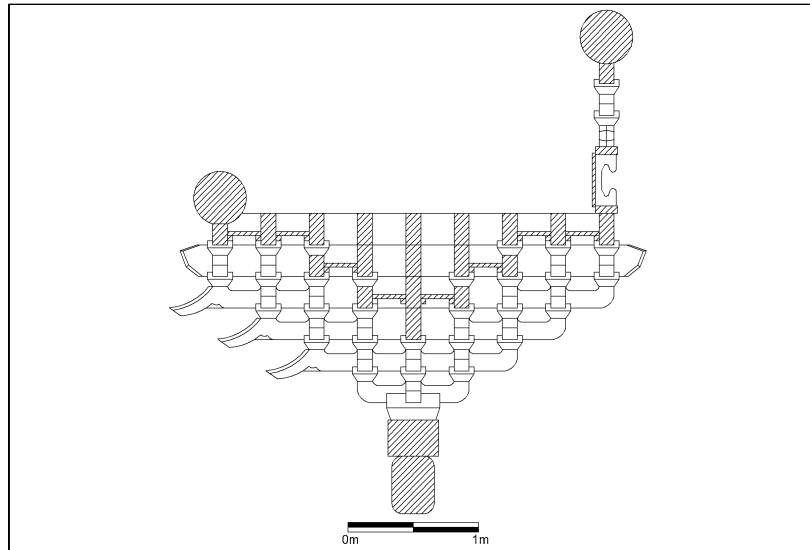


図 6-53 推定される正統的な四手先の中備斗拱  
(筆者作図)

結合A類型として梁が平斗拱に組まれると、室内における梁の断面のままに組物と結合し、外観に出された梁の木鼻が出桁を受けることになる。さらに梁が最上段の肘木に載ることで、組物の手先数が増えると、梁が組物と組まれる部分も長くなる。四手先の組物において、梁が平斗拱に組まれる部分も非常に長くなり、また、三分頭形の木鼻を持つことで、出桁の出よりさらに梁の木鼻を伸ばし、梁の先端部を作り出す必要がある。特に、ソウル崇禮門のプロポーシオンを基に、四手先の組物を想定すると、柱真から梁の木鼻の先端部までの距離は2mを超える<sup>49)</sup>。つまり、正統的な四手先組物に組まれる梁は、大径の非常に長い梁材が要求されることになる。推定の正統的な四手先組物を持つ建築を、1間を3mとし、奥行き2間の規模に設定する場合、母屋柱を省略し、大梁が正背面の平斗拱に掛け渡されると、梁材の長さは10mを超えるようになる。また、奥行きを3間とする場合、母屋柱を全て省略すると、13mを超える長い梁材が必要となり、このような梁材の獲得は、大変困難であったと予想される。現存する多包系建築の中で最も長材の梁を掛けた建築は、景福宮勤政殿であり、約10.5mの大梁を使用しており、13mを超える梁材を掛けた事例は現存しない。よって、側柱の内側に母屋柱を立て、梁を繫梁として平斗拱に組むということが、正統的な四手先組物の形式を実現しやすい構造であったと考えられる。

それゆえ、四手先の組物においては、手先と手先の間隔を狭くする工夫がなされると考えられる。深源寺普光殿と歸進寺極楽殿の四手先組物の手先間隔は、官営建築であるソウル崇禮門

49) ソウル崇禮門の組物において、手先と手先の間隔は平均369.7mmであり、推定した四手先組物も、ソウル崇禮門の間隔と同じく設定した。この場合、柱真から梁の先端部までの距離は2,077mmとなる。

より狭く設定していることが確認でき<sup>50)</sup>、この2棟の平斗栱には、全て虚梁を掛けている。現存する四手先組物の多包系建築において、平斗栱に虚梁を掛けた事例が現れる背景には、手先数の増加による、大径の長い梁材が必要とされるという制約も一つの原因であったと推測される。鳳停寺極楽殿唐家系列の組物において、正統的な多包系形式を備えた事例は、三手先の組物までに見られる。四手先の組物の場合は、定型化した組物の構成原理を守りながら、三分頭形の木鼻を持つ虚梁を正結合（A類型）として平斗栱に組んでる。虚梁を用い、正統的な四手先組物の形式を表現しようとした作為は、宮の正殿もしくは、最高級の宗教建築に使われた正統的な四手先組物の形式を模範としたことから生じたと推定できる。

---

50) 深源寺普光殿の手先の間隔は、214～231mmである（朝鮮遺跡遺物図鑑編纂委員会、『朝鮮遺跡遺物図鑑10高麗篇(1)』、1991.7、p.70の<図92>とp.72の<図97>を根拠にした。）。また、歸進寺極楽殿の組物は、258～279mmである（国立文化財研究所、『北朝鮮の伝統建築：黄海北道1』、2009.12、p.40、pp.98～101の内容を根拠にした。）。

## 6.5.2 平壤崇仁殿系列

二手先の組物において、一手先の部分に秤肘木や通肘木を組まないという特徴を持つ建築は、高麗時代末・朝鮮時代初期において、平壤崇仁殿（1325年）と平壤普通門（1473年に修理）の2棟がある。

鳳停寺極楽殿唐家系列の二手先組物との構造的な差としては、一手先の部分に秤肘木や通肘木を組まないことが挙げられる。しかし、各手先において、最外郭の手先とその内側の手先まで秤肘木を用い、それより内側の手先や柱真では通肘木を組むという原理の範囲内で、組物が構成されている。また、組物の4段目において、内側の二手先に大秤肘木を組むという特徴が見られるが、このような組み方は鳳停寺極楽殿唐家系列にも見られる。

平壤崇仁殿は単層、平壤普通門は重層建築であり、平面的な構成と梁架構、小屋組の形式は異なるが、2棟の平斗拱と中備斗拱は、ほぼ同じ構成や意匠形式を共有している。このような現象は、二手先の組物において、定型化された構成や意匠が存在し、その模範となる形式に平壤崇仁殿と平壤普通門の2棟は従っているものと考えられる。

つまり、高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築において、鳳停寺極楽殿唐家系列とは区別できる、別の形式が確立されていたと推定される。

平壤崇仁殿系列の二手先組物を設けた建築は、壬辰倭乱以後、17世紀に再建された宮殿建築や官宮建築に現れ、昌慶宮明政門（1616年）と平壤大同門（1635年）の2棟が現存している<sup>51)</sup>。

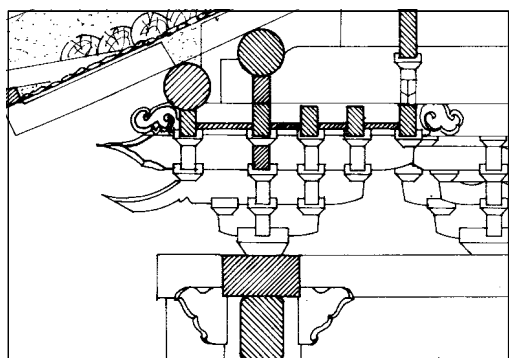


図 6-54 昌慶宮明政門の平斗拱(梁間断面)  
(『昌慶宮重建報告書(図版)』、図面127より)

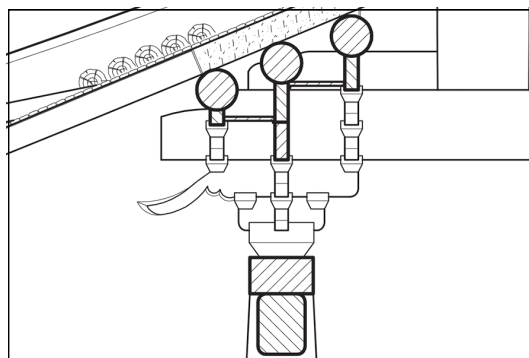


図 6-55 平壤大同門の平斗拱(梁間断面)  
(『北韓文化財解説集Ⅲ(一般建築編)』、p.87より)

51) 外側と内側を三手先とした建築の中で、高敞禪雲寺懺堂庵大雄殿（1619年）の背面組物では、外側の一手先と二手先に秤肘木を組まないという形式を用い、内側は、各手先において、最外郭の手先とその内側の二手先まで秤肘木を使用し、それより内側に通肘木を使うという構成を見せる。特に、背面の組物では、大斗と巻斗に皿斗が使われ、4段目の力肘木（外側）には、柱心包系の秤肘木が三手先と二手先に組まれている。このような特徴から、高麗時代に建てられた後、17世紀に大修理を受け、現在の姿になったと推測される。そして、高敞禪雲寺懺堂庵大雄殿の事例から一手先の部分に秤肘木や通肘木を組まないという形式は、三手先の組物まで使われたことが分かる。

昌慶宮明政門は、外側を二手先に、内側を三手先とした組物を持つ。そして、平壤崇仁殿系列の組物の構成は、外側の二手先に当たる。内側の三手先の構成は、鳳停寺極楽殿唐家系列の構成を用いている。

平壤大同門は、外側と内側を二手先とし、外側と内側ともに平壤崇仁殿系列の組物の構成としている。

平壤崇仁殿系列の二手先の組物は、特に、官宮建築や宮殿建築に使われている特徴があり、現存する事例からは、14世紀から17世紀まで確認できる。戦後の復興期である17世紀初期の昌慶宮明政門と平壤大同門の組物に、平壤崇仁殿系列の組物がまた使われたのは、16世紀末ごろまで、平壤崇仁殿系列の組物が模範となる形式として存在していたと考えられる。

特に、一手先に秤肘木を組まない特徴は、中国の華林寺大殿（964年、五代・宋初）や保国寺大殿（1013年、宋）など、10世紀頃の五代・宋の詰組に見られ、日本の東大寺鐘楼（1207～1210年）でも見える。一手先に秤肘木を組まないという詰組の形式は、東アジアの詰組建築の観点から見ると、古式に当たると言える。

10世紀頃、高麗王朝には、新しい形式で官宮建築が建てられた記録が見られる。

成宗二年（983年）、博士任老成<sup>52)</sup>が、宋から太廟堂と社稷堂、文宣王廟の図や建築関連の記録を持って帰国し、成宗に献した記述が確認できる<sup>53)</sup>。宋王朝の太廟堂や社稷堂、文宣王廟は、宋王朝の官式建築に当たるものである。

博士任老成の帰国後、成宗年間に太廟と社稷、文宣王廟が次々と建てられる。

太廟は成宗8年（989年）4月15日から工事が始まり<sup>54)</sup>、同年4月23日には、成宗が太廟を訪れ、自ら百官とともに建築材を運んだ<sup>55)</sup>。そして、成宗十一年（992年）11月に完成する<sup>56)</sup>。社稷の場合は、成宗十年（991年）閏2月に完成した記録が確認できる<sup>57)</sup>。文宣王廟は、竣工に関する明確な記事は見られないが、成宗十一年（992年）に国子監が創建された記事が見られ<sup>58)</sup>、また国子監の中に文宣王廟があったとする記録があることから<sup>59)</sup>、文宣王廟の建設は成

---

52) 任老成は、成宗年間に博士を歴任した文臣官僚である。（李樹健、『韓国中世社会史研究』、一潮閣、1984.4、p.215）

53) 『高麗史』卷三「世家」卷第三・成宗二年（983年）五月条：甲子 博士任老成至自宋、獻太廟堂圖一鋪、并記一卷、社稷堂圖一鋪、并記一卷、文宣王廟圖一鋪、祭器圖一卷、七十二賢贊記一卷。

54) 『高麗史』卷三「世家」卷第三・成宗八年（989年）四月条：乙丑 始營太廟。

55) 『高麗史』卷三「世家」卷第三・成宗八年（989年）四月条：癸酉 王詣太廟、率百官輸材。

56) 『高麗史』卷六十一「志」卷第十五「禮三」・「吉禮大祀」・「諸陵」拜陵儀条：成宗十一年十一月、太廟成、命儒臣、議定昭穆位次、及禘祫儀、遂行禘禮。

57) 『高麗史』卷三「世家」卷第三・成宗十年（991年）閏二月条：閏月 癸酉 始立社稷、（下略）

58) 『高麗史』卷七十四「志」卷第二十八「選舉 二」・「學校」・「國學」成宗十一年（992年）十二月：教、有司相得勝地、廣營書齋・學舍、量給田莊、以充學糧。又創國子監。

宗十一年（992年）の前後と見ることができる。

博士任老成が、成宗二年（983年）に宋から太廟堂と社稷堂、文宣王廟の図や関連記録をもって帰国した後、太廟をはじめ、社稷と文宣王廟という高麗王朝のシンボリックな官営建築の建設が始まったことが分かる。そして、太廟をはじめ、社稷と文宣王廟の建設は、ほぼ同時に行われ、成宗十年（991年）から成宗十一年（992年）の間に竣工となったと考えられる。

宋王朝の官式建築を模範として、高麗王朝の新しい官営建築を建てようとした成宗の意志により、博士任老成が宋に派遣されたとのであろう。。

10世紀頃の五代・宋初の華林寺大殿（964年）や保国寺大殿（1013年）に見られる、一手先に秤肘木を組まないという組物の形式が、宋代初期の官式建築にも用いられ、その宋の官式建築の形式が高麗王朝の官営多包系建築に反映された可能性があると考えられる。

成宗年間に建立された太廟や社稷、文宣王廟は現存しないため、その姿は不明であるが、宋の官式建築を基に高麗時代初期の建築的な形式や意匠が加味された形で建てられた可能性がある。成宗年間に建てられた新しい官営多包系建築は、その後、造営の際に模範となる高麗王朝の宮および官営多包系建築として成立した可能性もあると考えられる。

平壤崇仁殿は、忠肅王十二年（1325年）、忠肅王の令により、平壤府の箕子祠として建立され<sup>60</sup>、光海君4年（1612年）には崇仁殿として賜額された<sup>61</sup>。平壤崇仁殿の形式は、官営建築として建てられ、平壤崇仁殿の組物に模範となる形式は、開城の宮殿や官営多包系建築の形式を基にしたと考えられる。

平壤普通門の建立年代は不明であるが、朝鮮總督府により修理（1913年）が行われた際に墨書が発見され、その墨書銘から成代九年（1473年）に改修されたという記録が確認されている<sup>62</sup>。その「改修」というものを改建と見る研究者もいるが<sup>63</sup>、言葉通り、成代九年（1473年）の改修は、修理であった可能性もあり<sup>64</sup>、建立時期は高麗時代まで遡れる可能性もある。平壤

---

59) 『高麗史』卷七十四「志」卷第二十八「選舉 二」・「學校」・「國學」睿宗十四年（1119年）七月条：國學始立養賢庫、以養士。自國初、肇立文宣王廟于國子監、建官置師、至宣宗、將欲教育、而未遑。（下略）

60) 『高麗史』卷六三「志」卷第十七「禮 五」・「吉禮小祀」・「雜祀」忠肅王十二年（1325年）十月条：令平壤府、立箕子祠以祭。

61) 『朝鮮王朝實錄』「光海君日記中草本」五二卷、光海四年（1612年）4月27日（辛卯）条：（前略）平壤箕子祠、改以崇仁殿、立後主祀（下略）

62) 成代九年改修、萬曆四十二年甲寅八月日爲始改修、退柱五・上棟三・中都里二・衝椽一八・角舍羅八・上下臺椽反蓋瓦并爲改造、（下略）。（杉山信三、『高麗末朝鮮初の木造建築に関する研究』、私家本、1957、p.93、p.98）

63) 関野貞、『朝鮮の建築と芸術』、岩波書店、1941.8、p.160、前掲書、杉山信三（1957年）、p.93

64) 鄭寅國、『韓国建築様式論』、一志社、1974.8、p.291

崇仁殿と平壤普通門は、柱配置から梁架構、小屋組まで異なっているが、組物は、ほぼ同じ二手先の組物の形式を用いている。これは、模範となる組物の形式に従った結果と見られ、その形式は、14世紀初期の高麗王朝の官営多包系建築の形式に基いていたと推測される。また、平壤普通門の組物において、擬似尾垂木の形状に柱心包系の意匠的な特徴が見られる<sup>65)</sup>。このような特徴は朝鮮時代初期の官営多包系建築では確認できない。それゆえ、15世紀に行われた改修以前の擬似尾垂木の形式が、平壤普通門に残っていた可能性もある。

昌慶宮明政門は、壬辰倭乱以後、昌慶宮の復興工事に伴い光海君八年(1616年)に建てられた。『朝鮮王朝實錄』では、昌慶宮の殿閣の建設に当たり、明政殿以外の建築は、戦乱の以前の造営形式に従うようにした記録が確認できる<sup>66)</sup>。つまり、明政門の組物において、外側の一手先の部分に秤肘木や通肘木を組まない形式は、17世紀以前の明政門にも用いられていた可能性が高いと考えられる。明政門を竣工した同年には昌慶宮弘化門も完成した。弘化門の組物は、鳳停寺極楽殿唐家系列の組物に当たるもので、平壤崇仁殿系列と鳳停寺極楽殿唐家系列の組物が、17世紀以前の宮の多包系建築に共存し、使われていたと推定される。

平壤大同門は、1635年に再建されたものであり、二手先の組物において、一手先の部分に秤肘木や通肘木を組まないという形式を用いた最後の事例である。平壤大同門に平壤崇仁殿系列の組物が用いられたことは、以前の平壤大同門の形式、または平壤普通門の形式が、造営の際に模範となったと考えられる。平壤大同門の組物に使われた擬似尾垂木の形状は、17世紀以後に流行する擬似尾垂木の形状に従っている。また、梁の木鼻や頭貫の木鼻の形状も、平壤崇仁殿や平壤普通門と異なる。しかし、組物の構成は、平壤崇仁殿系列の組物に忠実に従っていることから、平壤崇仁殿系列の組物が、模範となる多包系組物の形式として、17世紀初期の官営多包系建築に用いられていたと推定できる。

---

65) 平壤普通門における擬似尾垂木の形状や、一手先に秤肘木を組まない特徴などを挙げ、杉山信三氏は、元により導入された多包系建築が、柱心包系組物の形式と折衷した形式と分類した(前掲書、杉山信三、1957年、pp.91~98)。

66) 『朝鮮王朝實錄』「光海君日記中草本」百六卷、光海八年(1616年)8月27日(乙丑)条：繕修都監啓曰：“備忘記有旨、‘明政(殿庭、甚爲廣闊、若稍向東退柱善造、則無異於仁政殿、而今則所造制度太狹、御榻亦低微狹窄、大禮則難行於此處、工役甚爲可惜。或)加造補簷、而加築同/月臺、御榻亦稍加補造、(則未知如何。更爲詳察議處、言于繕修都監’事、傳教)矣。上年此殿重建時、術官李懿信以爲：‘變局南向宜當’、其餘許多術官則‘決不可變局、仍舊營造宜當’、相持不決、奄過半年。秋節已晚、不得始役、臣等不勝悶慮。亟下明旨、斷定基向啓辭、聖批：‘外正殿依舊營造’事、命下矣。臣等只知遵守舊制、且奉丁寧聖旨、今已告成之後、承此太狹之教、臣等不勝慙然如失。(下略)

## 6.6 小結

虚梁を使用した多包系建築の組物に見られる一定の原理が、高麗時代末期・朝鮮時代初期の多包系建築に、どの程度用いられたかを明らかにするため、虚梁を使用した事例を含め、14世紀から16世紀までの多包系建築25棟を対象に、平斗栱と中備斗栱の構成を考察した。

高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築25棟の組物は、一手先の組物から四手先の組物まで、確立した形式をもっていた。それは、外側と内側の各手先において、最外郭の手先とその内側の手先に秤肘木を組み、それより内側の手先や柱真には通肘木を組むという原理である。

また、この原理は、平斗栱と中備斗栱といった組物の位置、梁や虚梁の結合形式、組物の内外の手先数など、周辺状況に関わらず、守られている。

上記の構成原理は、12世紀頃に作られた鳳停寺極楽殿の唐家の組物ですでに確認できる。

さらに、高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系組物は、一手先における秤肘木や通肘木の使用の有無によって、鳳停寺極楽殿唐家系列と平壤崇仁殿系列の二つに分類することができる。

多くが鳳停寺極楽殿唐家系列の組物に該当し、12世紀頃から20世紀初期に至るまでの多包系組物の主流をなしていたといえる。

鳳停寺極楽殿唐家系列の組物は、12世紀頃の宮殿および官営、寺院の多包系建築に用いられた組物の構成原理を受け継いだ可能性がある。高麗王朝の政治や貴族文化の中心であった開城の宮と官営、宗教建築に定型化した形式が成立した後、その模範となる多包系建築が全国的な官営建築および寺院建築に影響を及ぼしたと推測される。

現存する高麗時代の建築において、定型化された建築の形式が、官営建築と寺院建築に共有されており、このような現象は多包系を含め柱心包系建築にも見られる。高麗時代において、定型化された建築的な形式が、官営と寺院の建築に共有されるという背景には、造営の際に模範となる建築形式が存在したこととともに、官営建築と寺院建築の建設に、僧匠の造営参加による建築技術の伝播も一つの要因であると考えられる。

上述した建築生産の背景と建築技法が官営建築と寺院建築に伝播する過程を経て、鳳停寺極楽殿唐家に、中央からの定型化された多包系組物の構成原理が用いられ、14世紀以後の現存する多包系建築にも、その構成原理が継承されたと考えられる。そして、官営と寺院の多包系建築に虚梁を掛ける技法が共有されたことも、上記の僧匠の造営活動が結びついていると考えられる。

平壤崇仁殿系列の組物は、二手先から三手先の組物に見られ、そのうち、定型化された形式として確認できるものは、高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系官営建築や宮殿建築に使われた



二手先の組物である。現存する事例からは14世紀初期から、17世紀初期に再建された宮殿建築や官営建築に確認できる。

一手先に秤肘木を組まない手法は、10世紀頃の五代・宋の詰組建築や日本に禅宗様が導入された時期の詰組建築に見られ、東アジアの詰組建築の全体で見ると、古式に当たると言える。平壤崇仁殿系列の組物が、いつ頃から使い始められたかは明らかでないが、10世紀頃、成宗年間に建てられた新しい形式の官営建築がきっかけとなった可能性が高い。建立された太廟と社稷、文宣王廟は、宋王朝の官式を模範としたことから、10世紀頃の五代・宋初の華林寺大殿（964年）や保国寺大殿（1013年）に見られる、一手先に秤肘木を組まないという組物の形式が、高麗王朝の官営多包系建築に反映されたという推測もできる。

そして、平壤崇仁殿系列の組物を持つ唯一の宮殿建築である昌慶宮明政門は、壬辰倭乱以前の明政門の形式に従うという記録から、平壤崇仁殿系列の組物は、高麗王朝の建築を継承した朝鮮王朝の宮殿建築にも用いられ、17世紀初期まで、造営の際に模範となる形式として使われていたことが分かる。

以上の考察から、鳳停寺極楽殿唐家系列と平壤崇仁殿系列の組物は、高麗王朝に成立し、高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築において、模範となる形式、つまり、正統的な多包系組物の形式といえる。

そして、高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築に主流となっていた鳳停寺極楽殿唐家系列の組物の中で、最高級建築に使われたと思われる四手先組物について、その形を推定してみた（図6-52、図6-53参照）。三分頭形の木鼻を持つ梁が結合A類型として平斗栱に組みまると、室内における梁の断面のままに組物と結合し、梁の木鼻が出桁を受けることで、大径の非常に長い梁材が必要となる。それゆえ、側柱の内側に母屋柱を立て、梁を繫梁として平斗栱に組むということが、正統的な四手先組物の形式を実現しやすい構造であったと考えられる。

このような梁と組物との正結合形式からくる制限性により、正統的な多包系形式を備えた事例は、三手先の組物まで見られる。四手先の組物の場合は、定型化した組物の構成原理を守りながら、三分頭形の木鼻を持つ虚梁を正結合（A類型）として平斗栱に組んで。虚梁を用い、正統的な四手先組物の形式を表現しようとした作為は、宮の正殿もしくは、最高級の宗教建築に使われた正統的な四手先組物の形式を模範としたことから生じたと推定される。

## 7章. 高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築における梁の掛かる位置

高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築において、梁と組物との結合形式は、結合A類型と結合B類型という定型化された組み方に従う。その組み方から、外側の手先数により、組物に正結合式として梁が載る段が決まるようになる。よって、結合A類型と結合B類型において、正結合式として梁が掛かる位置を考察する。

また、結合類型ごとの設けられた梁架構の形式を分析し、〈正結合式〉を含め、〈上段結合式〉と〈減梁式〉の梁架構を利用した造営上の意図を考察する。

さらに、組物に梁の掛かる位置を変則的に変える技法は、高麗時代の柱心包系建築にも現れ、その梁の掛け方を考察し、多包系建築に見る梁の掛け方と比較する。

### 7.1 結合類型による梁の掛かる位置

梁と組物との結合形式は、出桁受通肘木を基準に、梁が組まれ木鼻を出す位置から、結合A類型と結合B類型の二つに分けられる。

結合A類型は、出桁受通肘木が載る段より、一つ下の段に梁が載る。そして、梁の下端に最外郭手先の小秤肘木が組み込まれ、その上に出桁受通肘木は梁上端側面に差し込まれる形式である。

結合B類型は、出桁受通肘木が載る段に梁が載り、梁の下端部に、最外郭の手先の出桁受通肘木を組むという形式である。

虚梁が組物に結合する形式も、結合類型ごとの正結合式にするという原則を守っていたことから、梁と虚梁が組物に組まれる位置は、結合AとB類型という定型化された組み方に従う。そして、組物に梁が載る段は、外側の手先数により決まっている。

高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築は、一手先から四手先までの組物を使っている。各手先の組物において、出桁受通肘木が載る段を見ると、まず一手先の組物は3段目に載る。そこから手先の数が増える分を足すと、手先数ごとの出桁受通肘木が載る段数となる。よって、二手先は4段目、三手先は5段目、四手先は6段目に出桁受通肘木が載る。

$$[\text{出桁受通肘木が載る段数} = \text{手先数} + 2]$$

結合A類型と結合B類型は、出桁受通肘木が載る段を基準に、組物に梁が載る段が決まる。結合A類型は、出桁受通肘木が載る段より、一つ下の段に梁が載るため、一手先の組物では2段目に梁が載ることになる。つまり、手先数に1を足すと、正結合式として梁が載る段数となる。

[結合A類型における正結合式の梁の載る段数 = 手先数 + 1]

上記の公式により、結合A類型の梁が載る段は、一手先の組物は2段目、二手先の組物は3段目、三手先の組物は4段目、四手先の組物は5段目となる。

結合B類型は、出桁受通肘木と同じ位置に梁が載るため、手先数に2を足すと、正結合式として梁が載る段数となる。

[結合B類型における正結合式の梁の載る段数 = 手先数 + 2]

上記の公式により、結合B類型の梁が載る段は、一手先の組物は3段目、二手先の組物は4段目、三手先の組物は5段目、四手先の組物は6段目となる。

## 7.2 結合A類型を用いた建築における梁の掛かる位置

高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築25棟の中で、平斗拱に結合A類型として木鼻を出す建築は17棟に該当する(表7-1参照)。

〈表7-1〉 結合A類型を用いた建築における梁の載る段

順番	建築名	年代	組物手先	梁の方向	虚梁の使用	結合A類型の梁の載る段数	梁(虚梁)が載った段数
1	平壤崇仁殿	1325年	外2内2	梁間方向	X	3	3(正結合式)
				桁行方向	X	3	3(正結合式)
2	安東鳳停寺大雄殿	1361年頃	外2内2	梁間方向	O	3	4(上段結合式)
				桁行方向	O	3	減梁式
3	博川深源寺普光殿	1368年	外4内4	梁間方向	O	5	6(上段結合式)
				桁行方向	O	5	減梁式
4	郭山開元寺大雄殿	1368年	外2内2	梁間方向	O	3	4(上段結合式)
				桁行方向	不明	3	4(上段結合式)
5	燕灘心源寺普光殿	1374年	外3内3	梁間方向	X	4	4(正結合式)
				桁行方向	O	4	減梁式
6	釋王寺応真堂	1386年	外2内2	梁間方向	X	3	3(正結合式)
7	安岳月精寺極楽宝殿	14C	外3内2	梁間方向	X	4	4(正結合式)
				桁行方向	O	4	減梁式
8	開城南大門	1392年	外1内1	梁間方向	O	2	3(上段結合式)
				桁行方向	O	2	3(上段結合式)
9	平原法興寺藏經閣	1401年	外2内2	梁間方向	O	3	4(上段結合式)
10	安国寺大雄宝殿	1419年	外3内4(下層)	梁間方向	X	4	4(正結合式)
				桁行方向	X	4	4(正結合式)
			外1内1(上層)	梁間方向	X	2	2(正結合式)
				桁行方向	X	2	2(正結合式)
11	ソウル崇禮門	1448年	外2内2(下層)	梁間方向	X	3	3(正結合式)
				桁行方向	X	3	3(正結合式)
			外3内2(上層)	梁間方向	X	4	4(正結合式)
				桁行方向	X	4	4(正結合式)
12	平壤普通門	1473年 (修理)	外2内2(下層)	梁間方向	X	3	3(正結合式)
				桁行方向	X	3	3(正結合式)
13	瑞山開心寺大雄殿	1484年	外2内3	梁間方向	O	3	4(上段結合式)
				側壁の繫梁	X	3	3(正結合式)
14	瑞興歸進寺極楽殿	1488-1505年	外4内4	梁間方向	O	5	6(上段結合式)
				桁行方向	O	5	6(上段結合式)
15	成佛寺応真殿	1327年 (1530年に多包系に改造)	外1内1	梁間方向	X	2	2(正結合式)
16	安城清源寺大雄殿	1535-1550年	外2内2	梁間方向	O	3	4(上段結合式)
				側壁の繫梁	X	3	3(正結合式)
17	春川清平寺極楽殿	1550年	外2内2	梁間方向	X	3	3(正結合式)
				桁行方向	X	3 (側面2列の平斗拱)	3(正結合式)
						3(雲拱) (側面3列の平斗拱)	減梁式

一手先の組物を設けたのは、開城南大門（1392年）と安国寺大雄宝殿（上層、1419年）、成佛寺応真殿（1530年）の3棟である。3棟のうち、梁を平斗拱に掛け、正統的な一手先の組物にしたのは、安国寺大雄宝殿（図6-2参照）と成佛寺応真殿（図6-4参照）の2棟の仏殿である。官営建築の開城南大門（図2-60参照）では、虚梁を掛け、虚梁の上段に梁を載せている。

二手先組物を持つ建築は、平壤崇仁殿（1325年）を含め10棟がある。その中で、梁を平斗拱に掛け、正統的な二手先組物を設けたのは、平壤崇仁殿と釋王寺応真堂（1386年）、ソウル崇禮門（下層、1448年）、平壤普通門（下層、1473年修理）、春川清平寺極楽殿（1550年）の5棟である。そして、虚梁を平斗拱に掛けたのは、安東鳳停寺大雄殿（1361年頃）をはじめ、郭山開元寺大雄殿（1368年）、平原法興寺藏經閣（1401年）、瑞山開心寺大雄殿（1484年）、安城清源寺大雄殿（1535～1550年）の5棟である。

官営建築で平壤崇仁殿（図6-22参照）とソウル崇禮門下層（図6-10参照）、平壤普通門下層（図6-24参照）の3棟は、梁を平斗拱に掛け、三分頭形の木鼻を出すという正統的な二手先組物にしている。虚梁を使用した建築は、すべて仏殿である。虚梁を用いる二手先組物において、梁間方向に掛けた虚梁の上段には梁間方向の梁を載せ、上段結合式の梁架構とした共通性が見られる。桁行方向の梁が掛かるようになる側面2間以上の寄棟造や入母屋造の建築の中で、鳳停寺大雄殿（奥行き3間）では、両側面の平斗拱に桁行方向の虚梁のみを掛け、梁は省略した（図4-27、図4-28参照）。開元寺大雄殿（奥行き3間）の場合、両側面の平斗拱に桁行方向の虚梁の使用は明らかではないが、桁行方向の梁（衝梁）を上段結合式として掛けている<sup>1)</sup>（図4-10、図4-11参照）。

三手先組物を持つ建築は、燕灘心源寺普光殿（1374年）と安岳月精寺極楽宝殿（14世紀頃）、安国寺大雄宝殿（下層）、ソウル崇禮門（上層）の4棟である。この4棟の場合、正背面の平斗拱には、梁間方向の梁が掛かり、正統的な三手先組物を構成している（図2-71、図2-77、図6-41、図6-38参照）。心源寺普光殿（図2-72参照）と月精寺極楽宝殿（図2-78参照）では、両側面の平斗拱に桁行方向の虚梁を組みながら、桁行方向に掛かる梁は省略している。三手先組物を設けた仏殿と官営建築では、正背面の平斗拱には虚梁が使われず、正統的な組物としている。一手先から二手先までの組物では、梁間方向と桁行方向の虚梁が平斗拱に掛かり、特に梁間方向の梁が、虚梁の上段に載るという上段結合式の梁架構で構成されていたこととは対照

---

1) 郭山開元寺大雄殿の正面平斗拱に三分頭形の木鼻を持つ梁間方向の虚梁を掛け、大梁が虚梁の上段に載せている。また、桁行方向の梁（衝梁）も上段結合式として載っていることから、両側面の平斗拱には、桁行方向の虚梁を掛け、外観において正面と両側面の平斗拱を同じ形式とした可能性がある。

的である。

四手先の組物を設けた建築は、博川深源寺普光殿（1368年）と瑞興歸進寺極楽殿（1488～1505年）の2棟がある。この2棟は、四面の平斗栱に梁間方向と桁行方向の虚梁を掛け、梁間方向の虚梁の上段に梁が載るといふ共通点がある。深源寺普光殿の場合は、両側面の平斗栱に桁行方向の虚梁を組み、桁行方向に掛かる梁は省略した（図2-73、図2-74参照）。歸進寺極楽殿では虚梁の上段に梁を載せ、上段結合式の梁架構とした（図2-75、図2-76参照）。四手先の組物を設けた2棟の仏殿の梁架構は、二手先の組物を用いた仏殿の梁架構と類似している。

梁（虚梁）が組物に結合A類型で組まれた建築において、一手先組物を持つ開城南大門を除き、官営建築である平壤崇仁殿（二手先）とソウル崇禮門（下層は二手先、上層は三手先）、平壤普通門（下層、二手先）は、平斗栱に梁を正結合式として組むという正統的な組物を設けている。虚梁を使用した建築は主に仏殿である。「正結合式の梁架構」から来る制限性、つまり、手先の数によって、梁の載る段が決まることで、梁の高さを自由に設けることができない。

よって、虚梁を用いて、外部における正統的な組物の表現論理に対応しながら、また外部の組物表現から自由に、上段結合式や減梁式の梁架構を設け、各建築に要求された個別的な計画に対応したと考えられる。

### 7.3 結合B類型を用いた建築における梁の掛かる位置

高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築25棟の中で、平斗栱に結合B類型として木鼻を出した建築は9棟に該当する(表7-2参照)。また、結合B類型を用いたのは一手先から二手先までの組物に見られる。

<表7-2> 結合B類型を用いた建築における梁の載る段

順番	建築名	年代	組物手先	梁の方向	虚梁の使用	結合B類型の梁の載る段数	梁(虚梁)が載った段数
1	正陽寺般若殿	14C	外2内3	梁間方向	X	4	4(正結合式)
				桁行方向	X	4	6+(上段結合式)
2	槐山覚淵寺毘盧殿	14C	外2内2	梁間方向	O (正面のみ)	4(虚梁)	5(上段結合式)
3	釋王寺護持門	1393年	外2内2	梁間方向	X	4	3
4	永興濬源殿正殿	1396年	外1内1	梁間方向	不明	不明	不明
				桁行方向	O(推定)	3(虚梁)	減梁式
5	驪州神勒寺祖師堂	1472年	外2内2	梁間方向	X	4	5(上段結合式)
				桁行方向	X	4	5(上段結合式)
6	平壤普通門	1473年(修理)	外2内2(上層)	梁間方向	X	4	減梁式
				桁行方向	X	4	減梁式
7	安邊客舎駕鶴樓	1486年(修理)	外1内1	梁間方向	X	3	3(正結合式)
				桁行方向	X	3	4+(上段結合式)
8	安城石南寺靈山殿	1562-1565年	外2内2	梁間方向	X	4	4(正結合式)
				桁行方向	X	4	減梁式
9	蔚珍佛影寺應眞殿	1578年	外2内2	梁間方向	X	4	5(上段結合式)

結合B類型の場合は、梁頭形と雲栱形の木鼻という、二つの形状の木鼻を組物に出す。梁頭形の木鼻を出すことは、結合A類型の事例と同じく、外観に梁の掛かる位置を示している。このような事例に当たるのは、槐山覚淵寺毘盧殿(14世紀頃)である(図2-69参照)。

雲栱形の木鼻を出した平斗栱は、中備斗栱と類似する外観表現がなされる。よって、その平斗栱には、梁の木鼻が露出するような表現をしないことで、外部表現によって梁の掛かる位置

が固定されない。そのため、雲拱形の木鼻をもつ多包系建築にも、虚梁を掛けた建築に設けられた上段結合式や減梁式の梁架構が使われる。

結合B類型として平斗拱に雲拱形の木鼻を出したように表現している建築8棟を中心に、手先数に分けて、平斗拱に梁が組まれた形式を考察し、＜上段結合式＞・＜減梁式＞の梁架構を設けた造営上の意図を考察する。

一手先の組物を持つ建築は、永興濬源殿正殿（1396年）と安邊客舎駕鶴樓（1486年修理）の2棟がある。



図 7-1 永興濬源殿正殿の全景  
（『朝鮮古蹟図譜11』、p.1528より）



図 7-2 永興濬源殿正殿の内部  
（『朝鮮古蹟図譜11』、p.1529より）

永興濬源殿正殿は、焼失以前の姿を残した写真や図などの資料が不足し、平斗拱に掛かった梁の位置が明らかではない。側面の平斗拱の場合、虚梁と推測される部材を掛けており、桁行方向の梁は省略したことまでは確認できる（図6-6参照）。

安邊客舎駕鶴樓では、梁間方向に掛けた梁は、正結合式として掛かっている（図6-8参照）。



図 7-3 安邊客舎駕鶴樓の中備斗拱  
（『朝鮮古蹟図譜11』、p.1567より）



図 7-4 安邊客舎駕鶴樓の桁行方向の梁  
（『朝鮮古蹟図譜11』、p.1567より）

これに対し、桁行方向の梁は、出桁受通肘木が載る段よりさらに高い位置に掛かり、上段結



合式となる（図6-9参照）。

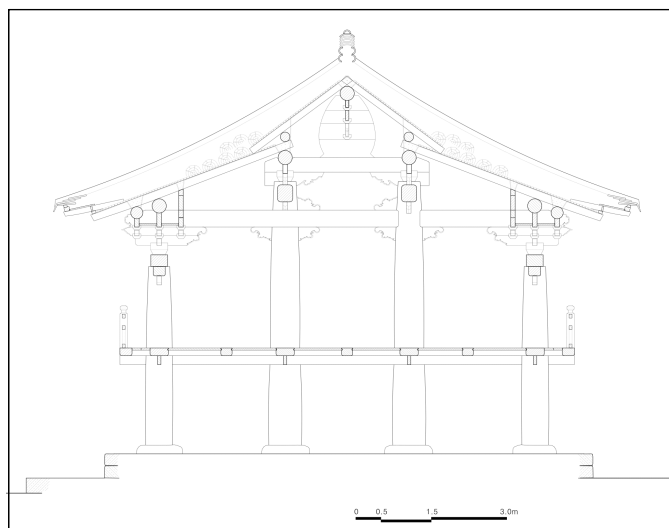


図 7-5 安邊客舎駕鶴樓の梁間方向断面図  
（『北韓文化財解説集Ⅲ(一般建築編)』、p.67より）

安邊客舎駕鶴樓の場合、梁間方向に掛かる梁の位置よりさらに高く桁行方向の梁を掛け、梁間方向の梁と桁行方向の梁が交差し組まれないようにした工夫がなされたと考えられる。

安邊客舎駕鶴樓は、平斗拱に雲拱形の木鼻を出し、中備斗拱と意匠的に同じくするため、外部の表現により制約がなく、上段結合式の梁架構が設けられていると考えられる。

二手先組物を持つ建築の中で、雲拱形の木鼻を出したように表現したのは、正陽寺般若殿（14世紀頃）をはじめ、釋王寺護持門（1393年）、驪州神勒寺祖師堂（1472年）、平壤普通門上層の組物（1473年修理）、安城石南寺靈山殿（1562-1565年）、蔚珍佛影寺應眞殿（1578年）の6棟が当てはまる。

その中で、出桁受通肘木が載る段に梁を掛けた事例は、正陽寺般若殿と安城石南寺靈山殿の2棟に確認できる。

出桁受通肘木が載る段と異なる位置に梁が掛かる事例は、釋王寺護持門と神勒寺祖師堂、佛影寺應眞殿（1578年）の3棟がある。また、平壤普通門上層の組物では、平斗拱に梁を掛けないという構成が確認できる。

まず、出桁受通肘木が載る段に梁を掛けた、正陽寺般若殿と安城石南寺靈山殿の事例を考察する。

正陽寺般若殿は、梁間方向の大梁と繫梁を平斗拱に正結合式として組み、桁行方向に掛かる

梁は、出桁受通肘木が載る段より、さらに高く掛かる上段結合式となっている。

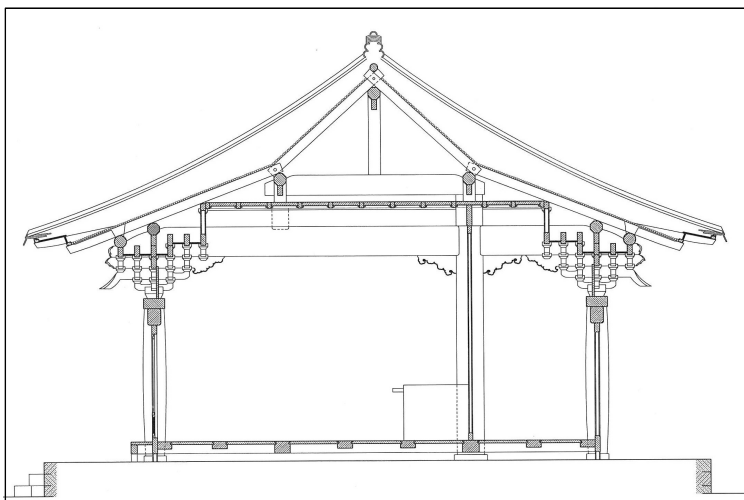


図 7-6 正陽寺般若殿の梁間方向断面図  
(『北韓文化財解説集Ⅱ(寺刹建築編)』、p.87より)



図 7-7 正陽寺般若殿の内部梁架構  
(『北韓傳統寺刹第10卷江原道』、p.210より)

桁行方向に掛かる梁には、衝梁<sup>2)</sup>が使われている。よって、桁行方向の衝梁が梁間方向の梁に直交して掛けられる際に、梁間方向の梁より高く衝梁を掛け、梁間方向の梁の側面部に仕口のための穴が開かないように工夫されていると考えられる。

このような意図から、梁間方向の梁は正結合式として平斗拱に組まれ、桁行方向の梁（衝梁）は上段結合式として構成したと推測される。

---

2) 正面から、側面2列目の側柱筋に衝梁が掛かり、側面3列目の側柱筋には繫梁が掛かる。

石南寺靈山殿の場合、梁間方向の梁は、出桁受通肘木が載る段に載り、雲拱形の木鼻が別材<sup>3)</sup>として出桁受通肘木と組んでいる（図4-73参照）。つまり、梁間方向の梁は、結合B類型における正結合の位置に梁を掛けたといえる。



図 7-8 石南寺靈山殿の側面の組物  
(筆者撮影)

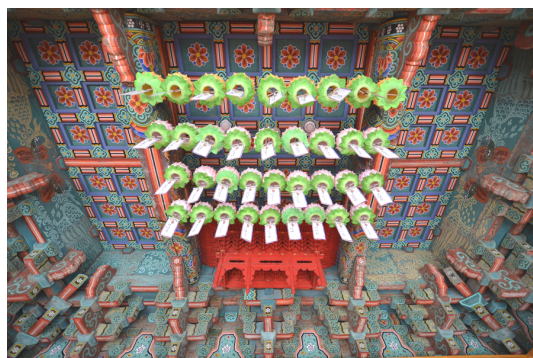


図 7-9 石南寺靈山殿の梁架構  
(筆者撮影)

側面が2間であり、母屋柱を減柱したため、衝梁が掛かるようになるが、両側面の平斗拱で、桁行方向の梁（衝梁）は省略されている（図4-74参照）。両側面の平斗拱において、梁の掛かる位置には、梁の代わりに雲拱を載せている。

次は、平斗拱において、出桁受通肘木が載る段と異なる位置に梁を掛けた、釋王寺護持門（1393年）と驪州神勒寺祖師堂（1472年）、蔚珍佛影寺應眞殿（1578年）の事例を考察する。

釋王寺護持門は、出桁受通肘木が載る段（4段目）より、下の段に梁が載っている（3段目）。



図 7-10 釋王寺護持門の全景  
(『朝鮮古蹟図譜12』、p.1694より)

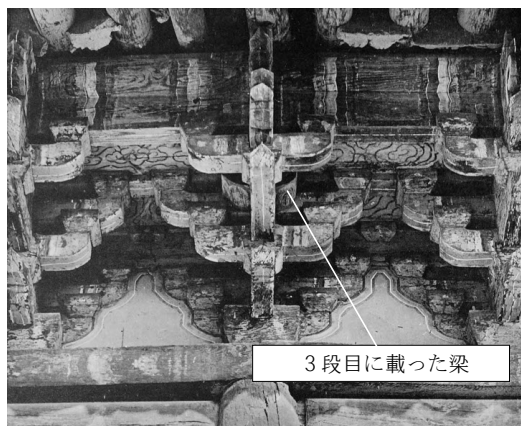


図 7-11 釋王寺護持門の平斗拱  
(『朝鮮古蹟図譜12』、p.1695より)

3) 建立当時には、梁が木鼻として出されいたものと考えられ、時代の経過とともに風食が生じて、修理の際に木鼻だけ切り取った可能性があると考えられる。

これは、結合A類型に見られる形式で、梁の先端部は外側の二手先と一手先の間で止まり、二手先から出された木鼻は別材となっている。そして、平斗栱と中備斗栱を類似する意匠として、組物廻りの意匠に一貫性を与えている。

建立当時から、雲栱形の木鼻であったのかは明らかでない。梁頭形の木鼻をもつ結合A類型で建築として建てられた後、修理の時に傷んだ木鼻の先端部を切り取り、別材の雲栱形の木鼻を取り付けた可能性も考えられる。

神勒寺祖師堂は、正面1間、側面2間の平面であり。正背面の組物は中備斗栱となる。

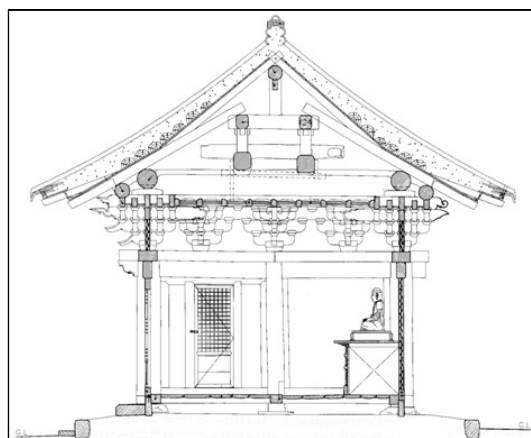


図 7-12 驪州神勒寺祖師堂の梁間方向断面図  
 (『神勒寺祖師堂実測調査報告書図版』、p.130より)

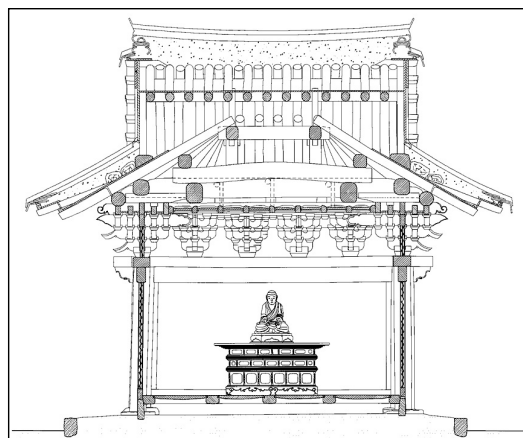


図 7-13 驪州神勒寺祖師堂の桁行方向断面図  
 (『神勒寺祖師堂実測調査報告書図版』、p.131より)

梁間方向の梁が載る位置は、出桁受通肘木が載る段より高く、上段結合式の梁架構となっている。両側面の平斗栱には、桁行方向の衝梁が使われ、梁間方向の梁と同じ高さに載っている。神勒寺祖師堂は室内を画さずに一つの空間としており、設置された格天井も全体を一つの枠組みとして設けられている。つまり、室内を分断しないために、天井より高い位置に梁を載せる必要があり、梁間方向の梁を、上段結合式として正背面の平斗栱に架け渡したと考えられる。

蔚珍佛影寺應眞殿は、切妻造の建築であり、梁間方向の梁のみ平斗栱に掛かる。

梁は、出桁受通肘木の載る段より高く掛け、上段結合式の梁架構とした。この建築の室内には、見せかけ尾垂木尻を設け、その上段に板張り天井を張り、板張り天井との間には格天井を設けている。格天井は二重梁の側面に取り付く。このような天井の構成形式は、虚梁を用いた建築である心源寺普光殿や深源寺普光殿、棲雲寺大雄殿に見られる構成と同じである。上段結合式の梁架構から、室内空間の垂直的な拡張を狙った意図が読み取れる。

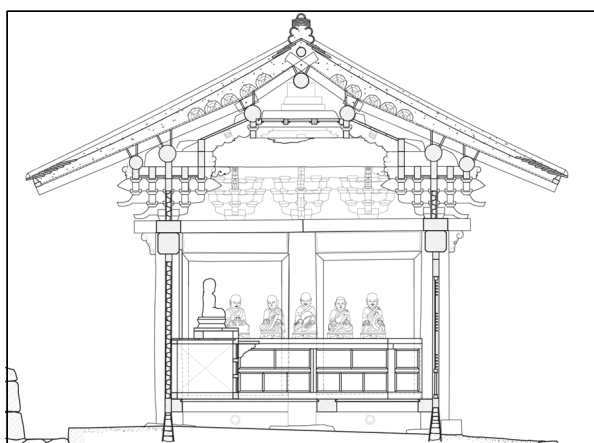


図 7-14 佛影寺應眞殿の梁間方向断面図  
 (『佛影寺應眞殿精密実測調査報告書』、p.303より)

そして、平斗拱に梁を掛けてない平壤普通門(1473年修理)上層の組物を考察する。

平壤普通門は、1層では、繫梁を平斗拱に正結合式で組み、外観には三分頭形の木鼻を出している(図6-24参照)。その繫梁は内側の母屋柱に差し込まれている。

2層の側柱は、1層の繫梁の上に立てられている。2層には隅柱を立てず、1層の隅木の上に頭貫と台輪を載せ、2層の隅の部分に隅斗拱を置くことで、2層の隅部とする特殊な構成となっている4)。

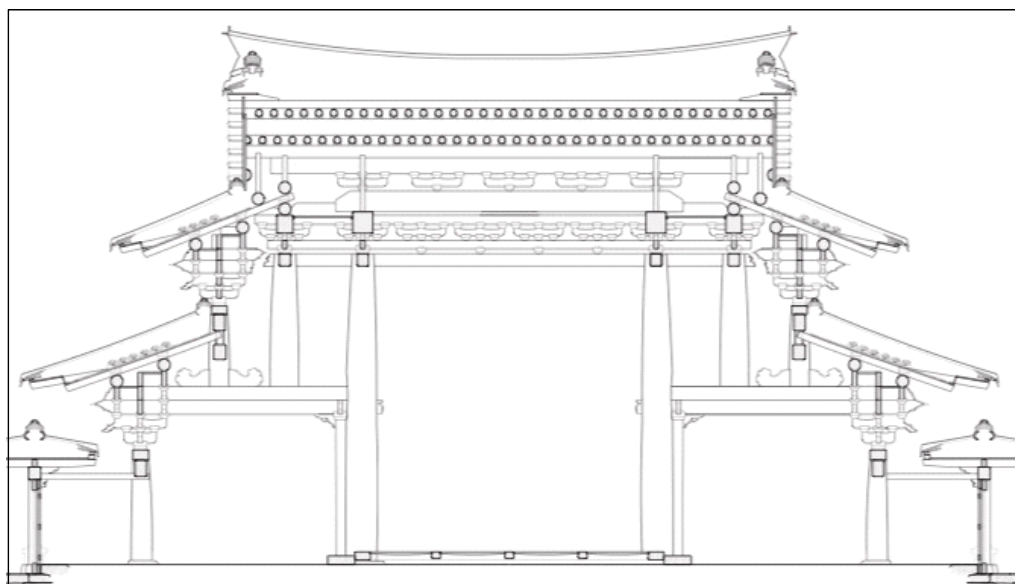


図 7-15 平壤普通門の桁行方向断面図  
 (『北韓文化財解説集Ⅲ(一般建築編)』、p.81より)

4) 国立文化財研究所、『北韓文化財解説集Ⅲ(一般建築編)』、2002.12、p.79

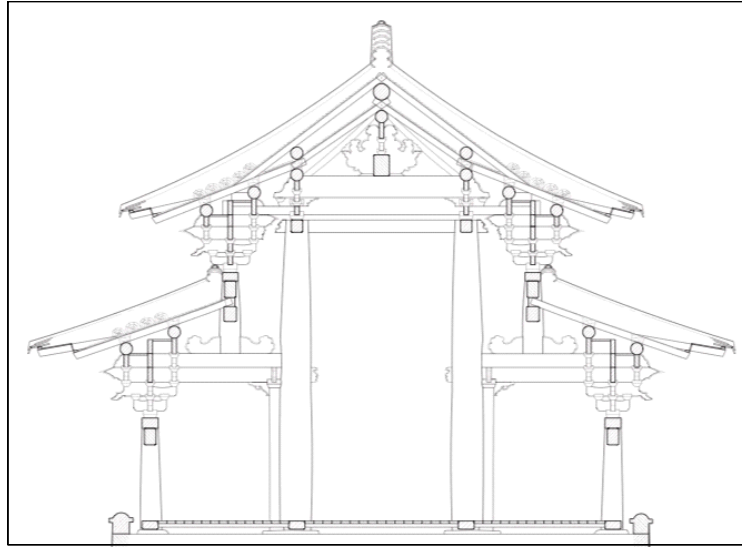
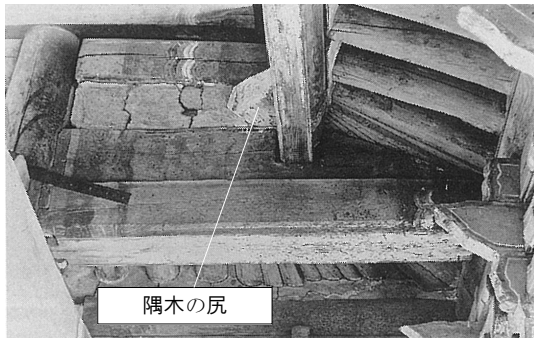


図 7-16 平壤普通門の梁間方向断面図  
 (『北韓文化財解説朱集Ⅲ(一般建築編)』、p.81より)



隅木の尻  
 図 7-17 平壤普通門1層の隅木の尻  
 (『小川敬吉調査文化財資料』、p.76より)



図 7-18 平壤普通門の内部梁架構  
 (『北韓文化財解説朱集Ⅲ(一般建築編)』、p.80より)

さらに、2層の平斗栱には梁を掛けず(図6-26参照)、1層の母屋柱が通柱として2層の母屋柱となり、その上に梁が掛かり、二重梁のように母屋桁と棟木を支える。そのため、2層の平斗栱は梁を組まない構成となり、平斗栱と中備斗栱が同様の形式となっている。平斗栱と中備斗栱の最上段には、雲栱が載り、出桁受通肘木と組まれ出桁を受ける。

結合A類型の場合、三分頭形に代表される梁頭形の木鼻を組物に出し、梁からの木鼻が組物に出されたことを明示的に表現している。そのため、この外観によって梁の掛かる位置を規定する制限性を乗り越えるために虚梁を用い、上段結合式や減梁式の梁架構を構成することで、多様な室内空間を可能とした。

一方で、結合B類型の場合は、梁頭形の木鼻と雲栱形の木鼻、二つの形状の木鼻を組物に出す。梁頭形の木鼻を出すことは、結合A類型の事例と同じく、外観によって梁の掛かる位置が固定される。しかし、雲栱形の木鼻を出した平斗栱は、梁の木鼻が露出するような表現をしないことで、外部表現によって梁の掛かる位置が固定されない。このような理由から、雲栱形の木鼻をもつ多包系建築にも、梁頭形の木鼻を組物として出す建築に使われた上段結合式や減梁式の梁架構が使われ、建築ごとに要求された個別的な計画に対応したと考えられる。

また、平斗栱に結合B類型の正結合式として梁を掛けた正陽寺般若殿と安邊客舎駕鶴樓、安城石南寺靈山殿の3棟は、梁間方向の梁を正結合式に、桁行方向の梁は、上段結合式または減梁式の梁架構としている。このような梁架構は、虚梁を用いた多包系建築に見られる梁架構と類似している。

## 7.4 柱心包系建築における梁の位置変化

梁が組物と組まれ、外観に梁の木鼻を出すという外部の表現原理により、梁の掛かる高さが固定される。外部の表現原理を守りながらも、実際の梁を高く掛けようとした試みは、側柱の頭に挿肘木を組む柱心包系組物を持った建築にも現れる。14世紀以前に建てられた江陵臨瀛館三門や安城客舎正庁、14世紀の修徳寺大雄殿や成佛寺極楽殿の事例を分析しよう。

### ① 江陵臨瀛館三門（江陵客舎門、14世紀以前<sup>5)</sup>）

桁行三間、梁間二間、一重、切妻造、本瓦葺



図 7-19 江陵臨瀛館三門の側面の組物  
(筆者撮影)



図 7-20 江陵臨瀛館三門の中央間の組物-3  
(筆者撮影)

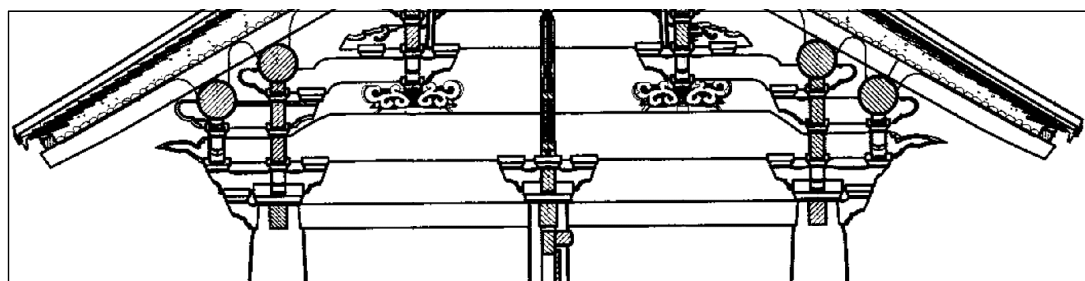


図 7-21 江陵臨瀛館三門の梁間方向断面図(部分)  
(『江陵客舎門実測・修理報告書』、p.582より)

柱頭にて頭貫に交差し梁間方向の水平材が組まれ、1段目の肘木として一手先を出す<sup>6)</sup>。大

5) 当初材と見られる柱や梁材に関する年輪年代測定の結果、14世紀以前に建立された推定される(文化財庁・江陵市庁、『江陵客舎門実測・修理報告書』、2004.12、p.376)。

6) 高麗時代における柱心包系建築において、挿肘木を柱頭に組む形式の源流となる事例が、江陵臨瀛館三門(切妻造)に見られる。江陵臨瀛館三門の側面にて、正背面の側柱に組まれる頭貫が肘木形の木鼻を出し、組物の一手先になる形式を用いている。中央間の柱頭にも隅柱に組まれた頭貫の木鼻と同じ形式の肘木形木鼻を組み、これが、挿肘木ようになる。そのため、このような肘木を‘虚楹차’(ホッチョムチャ)と言い、見せかける肘木の意味を持つ(金王植、『分かりやすい韓国建築用語辞典』、ドンニョク、2007.4、p.121)。これは、切妻造建築の側壁部(隅柱上部の組物)における組物の構成を、中央間の平斗拱にも同様に表現する原則が反映されたことに起因すると考えられる。虚梁を用いた切妻造の多包系建



斗に2段目の力肘木を秤肘木と組み杵肘木とし、二手先にした。3段目に木鼻を出す部材は大梁であり、柱真において通肘木と組み、梁の木鼻は二手先の秤肘木と組まれる。梁の木鼻の形状は、嘴のような形としている。4段目に雲形の木鼻を出す水平材は、柱真において通肘木と組まれ、その木鼻は、実肘木と組み出桁を受ける。5段目に、4段目の木鼻と同様な雲形の木鼻を出す部材がある、牛尾梁<sup>7)</sup>と分類される。その部材の木鼻は、側桁受通肘木と組まれ、側桁を受ける。3段目の梁の木鼻は、他の肘木や水平材の幅より太い断面形状の木鼻として出されている。内側において、2段目の力肘木は、正面部に出した肘木と同じ形式の肘木として、3段目の梁を受けている。4段目の雲形木鼻を出す水平材は、2段目の力肘木と同様な形状で、5段目の牛尾梁を支えるようにしている。

## ② 安城客舎正庁(14世紀以前<sup>8)</sup>)

桁行三間、梁間二間、一重、切妻造、本瓦葺



図 7-22 安城客舎正庁の中央間の組物  
(筆者撮影)



図 7-23 安城客舎正庁の中央間の組物(内側)  
(筆者撮影)

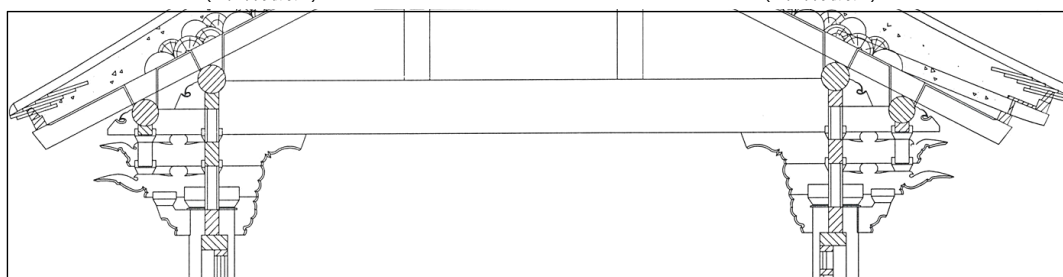


図 7-24 安城客舎正庁の梁間方向断面図(部分)  
(『安城客舎解体重建工事報告書』、p.198より)

柱頭に1段目の肘木として挿肘木を組み、一手先とした。大斗に2段目の力肘木と秤肘木を組み杵肘木として、二手先とする。2段目の力肘木の木鼻は、嘴のような形状を用い、その木鼻にも、同じ表現が見られる。

7) 牛の尻のような形の曲がり梁を意味する。(前掲書、金王植、2007年、p.152)

8) 安城客舎正庁の組物には、曲面を持つ斗椽の巻斗が一部に残っている。このような巻斗は14世紀以後の建築に見れないものであり、安城客舎正庁が建立された時期は14世紀以前と推測される。

鼻が肘木下の方に曲がり、更に上向きに伸ばされ円弧を描くような形となっている。この木鼻の形状は、江陵臨瀛館三門の3段目の梁の木鼻と同様である。

3段目の力肘木は柱真で通肘木と組み、二手先には秤肘木が組まれる。3段目の力肘木の先端部も、2段目の力肘木のように嘴の形状の木鼻を用いている<sup>9)</sup>。4段目で木鼻を出す部材は大梁（虹梁）であり、その梁は、柱真で実肘木と組み、先端部の木鼻は二手先の秤肘木の上に載る出桁受通肘木と組み、出桁を支えている。梁の木鼻の形状は、上部を嘴のような形にし、下部に下ると斜めに切り出し三角形の形として突出させた木鼻にした。5段目で木鼻を出す水平材は、柱真の側桁を受ける材であり、側桁受通肘木と組み側桁を受ける。5段目の木鼻の形状は、4段目に出した梁の木鼻と同様である。

1段目の挿肘木、2・3段目の力肘木、5段目の木鼻は、同じ幅であったが、4段目の梁の木鼻は肘木の幅より太い断面の形状として出されている。内側において、1段目から3段目の肘木が重なり、4段目は梁を受ける梁持送りの形状をしていた。

### ③ 修徳寺大雄殿（1308年<sup>10)</sup>）

桁行三間、梁間三間、一重、切妻造、本瓦葺



図 7-25 修徳寺大雄殿の中央間の組物  
(筆者撮影)



図 7-26 修徳寺大雄殿の側面の組物  
(筆者撮影)

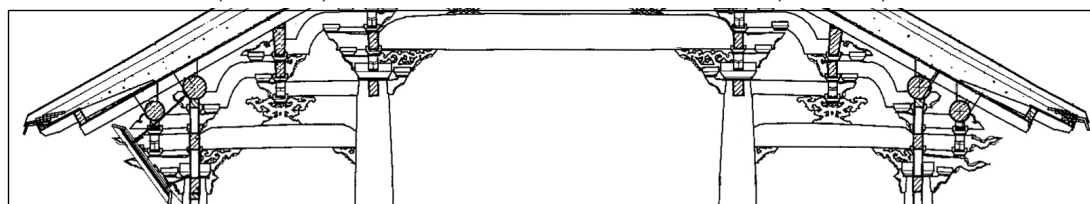


図 7-27 修徳寺大雄殿の梁間方向断面図(部分)  
(『修徳寺大雄殿実測調査報告書』、p.242より)

柱頭に1段目の肘木として挿肘木を組み、一手先とする。大斗に2段目の力肘木と秤肘木を

9) 翼工の木鼻と類似する形状である。

10) 1937年に行われた解体修理で、墨書銘が発見され、1308年に建立されたことが明らかになった（杉山信三、「朝鮮木造建築様式的研究序説」、『日本建築學會論文集』、第36號、1947.12、p.101）。

組み枳肘木とし、二手先となる。2段目力肘木の木鼻は、安城客舎正庁の2段目力肘木の木鼻と同様に、嘴のような形状の木鼻している。3段目に木鼻を出す部材は繫梁であり、柱真で通肘木と組み、梁の木鼻は二手先に枳肘木と組まれる。梁の木鼻の形状は、2段目力肘木の木鼻と同様の嘴の形である。4段目に置かれた水平材は、柱真で枳肘木（左右に巻斗を2ずつ置く）と組み、その先端部は、実肘木と組み出桁を受ける。4段目の水平材の木鼻は、安城客舎正庁にて4段目と5段目の木鼻の同様に、上部を嘴のような形にし、下部に下ると斜めに切り出し三角形の形とした。5段目には牛尾梁が載り。その木鼻が、側桁受通肘木と組み、側桁を受ける。牛尾梁の木鼻の形状は4段目の木鼻と同様としている。

3段目の梁の木鼻は、他の肘木や水平材の幅より太い断面形状である。内側において、1段目・2段目の肘木を重ね、3段目は梁を受ける梁持送りの形状としている。4段目の水平材は、1段目の挿肘木の形状とし、牛尾梁を支えている。

修徳寺大雄殿の組物と梁との構成は、江陵臨瀛館三門と安城客舎正庁の形式を折衷したような、両方の特徴が混ざられている。

#### ④ 成佛寺極楽殿（1374年<sup>11)</sup>）

桁行三間、梁間二間、一重、切妻造、本瓦葺

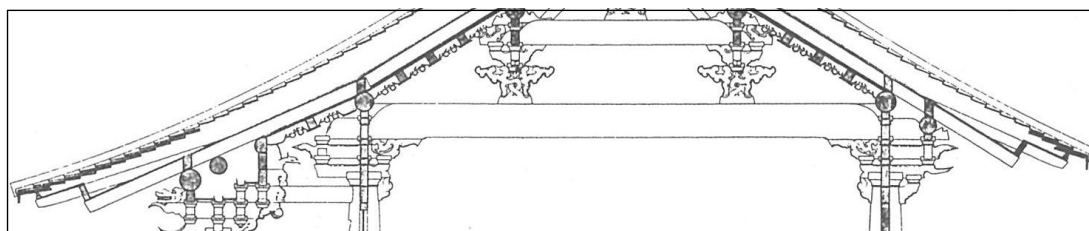


図 7-28 成佛寺極楽殿(修理前)の梁間方向/桁行方向断面図(部分)  
 (『韓国古建築の保存—浮石寺・成仏寺修理工事報告—』、p.30より)

成佛寺極楽殿は、安城客舎正庁の組物構成とほぼ同様である。

安城客舎正庁との違いは、4段目に掛かる梁が、柱真で通肘木と組まれること、側桁と出桁受通肘木に5段目の水平材を組まず、ただ4段目の大梁に載っていることである。

また、室内において、1段目の挿肘木は雲形のような形状になり、3段目の肘木は異色の肘木の形を用いている。3段目の肘木は、4段目の梁を受ける梁持送りとなるという点が、安城客舎正庁との違う部分である。

11) 成佛寺極楽殿は、1374年に建立され、1530年と1644年に修理を受けた。韓国戦争で大きい被害を受けたが、戦後に復旧した（国立文化財研究所、『北韓文化財解説集Ⅱ(寺刹建築編)』、1998.12、pp.35～39）。

## 7.5 小結

高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築において、梁と組物との結合形式は、出桁受通肘木を基準に、梁が組まれ木鼻を出す位置から、結合A類型と結合B類型の二つに分けられる。

梁と虚梁が組物に組まれる位置は、結合AとB類型という定型化された組み方に従うため、組物に梁が載る段は、外側の手先数により決まるようになる。よって、正結合式として梁が載る段は、類型ごとに公式が得られる。

結合A類型は、手先数に1を足すと、正結合式として梁が載る段数に当たり、結合B類型は、手先数に2を足すと、正結合式として梁が載る段数に当てはまる。

$$[\text{結合A類型における正結合式の梁の載る段数} = \text{手先数} + 1]$$

$$[\text{結合B類型における正結合式の梁の載る段数} = \text{手先数} + 2]$$

梁（虚梁）が組物に結合A類型と組まれた建築において、官営建築では、平斗栱に梁を正結合式として組むという正統的な組物を設けるという傾向が見られる。虚梁を使用している建築は主に仏殿である。虚梁を用いて、外部の組物表現から自由に、上段結合式や減梁式の梁架構を設け、各建築に要求された個別的な計画に対応した。

一方で、雲栱形の木鼻を結合B類型として出す建築は、虚梁を使用した建築で見られる<上段結合式>や<減梁式>の梁架構を利用することで、これらの要求にこたえようとした。雲栱形の木鼻を出す建築は、梁の木鼻が外部に出ていることを明示しなくてすむので、梁頭形の木鼻を出す建築に比べ、比較的自由に梁架構を構成することができる。<上段結合式>・<減梁式>の梁架構を用いたのは、正結合式の形式の梁架構から来る制限性を克服すると同時に、室内空間におけるの様々な計画に対応するためであろう。<上段結合式>・<減梁式>の梁架構を利用した造営上の意図は、虚梁を使用した建築と共通する。

柱心包系建築でも、定型化した組物構成や意匠表現が見られ、また、内部において梁を高く設ける手法がなされている。つまり、虚梁を用いた多包系建築と類似する特徴が、柱心包系建築にも読み取ることができる。



## 8章. 補論

### 8.1 洪城高山寺大雄殿に見られる14世紀以前の多包系建築の表現形式

韓国忠清南道洪城郡に所在している洪城高山寺大雄殿は、その建立年代が不明であるが、組物や細部に高麗時代の建築形式を用いていることで、高麗時代末・朝鮮時代初期の建築と推測されている<sup>1)</sup>。桁行三間(6,382m)、梁間三間(5,029m)で一重、入母屋造、本瓦葺の小規模の建築である。高山寺大雄殿は、柱の上部だけ組物を乗せる柱心包系建築であるが、多包系組物の要素も持っている折衷式の建築である。



図 8-1 高山寺大雄殿の前景  
(筆者撮影)



図 8-2 高山寺大雄殿の隅の部分  
(筆者撮影)



図 8-3 高山寺大雄殿の修理以前  
(『洪城高山寺大雄殿実測調査報告書』より)



図 8-4 高山寺大雄殿の修理以前  
(『洪城高山寺大雄殿実測調査報告書』より)

#### ① 洪城高山寺大雄殿における台輪と丸桁の特徴

洪城高山寺大雄殿は柱心包系建築であるが、多包系建築の要素である台輪を持っていることが特徴である。特に注目される点は台輪鼻の形である。現存する14世紀以後の高麗時代及び朝

1) 文化財庁、『洪城高山寺大雄殿実測調査報告書』、2005.12、pp.57～73

鮮時代における多包系建築の台輪鼻は、直角裁去の台輪鼻を出すことが通例である。しかし、洪城高山寺大雄殿は削形付台輪鼻を持つことで、異色といえる。また、方形断面の丸桁を用いたも注目される。韓国において現存最古建築である鳳停寺極楽殿をはじめ、丸桁は円形断面となることが一般的である。しかし、洪城高山寺大雄殿では方形断面の丸桁(具体的には上部が長辺である台形を持っており、さらに丸桁の鼻は拳鼻の形式になっている。

## ② 高山寺大雄殿と14世紀以前における多包系建築の表現

高山寺大雄殿の台輪と丸桁の形態的な特徴は、高麗時代末期(14世紀)以後の韓国における柱心包系及び多包系建築の様式とは異なる。ところが、14世紀以前の建築に収められている唐家で確認できる多包系形式の要素には、高山寺大雄殿の台輪と丸桁に通ずる類似性が存在する。

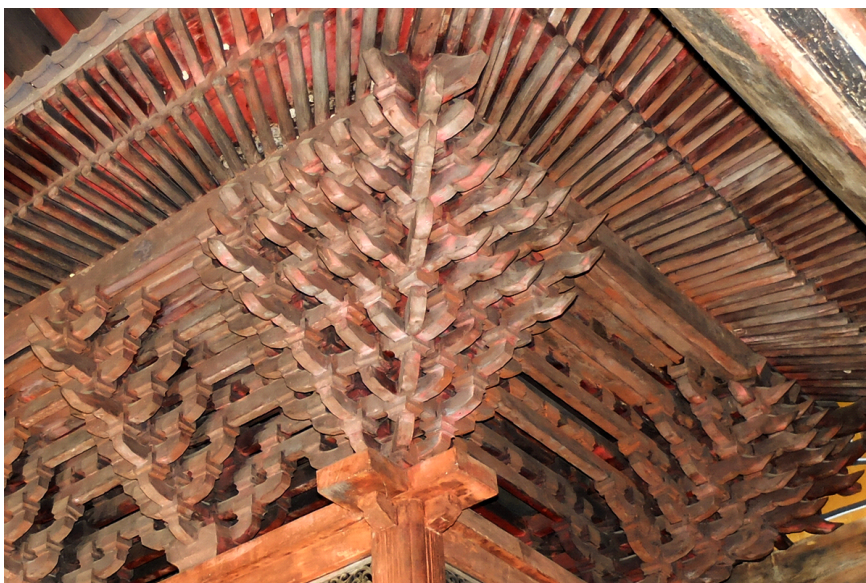


図 8-5 鳳停寺極楽殿唐家の隅部分  
(筆者撮影)

モンゴルが13世紀に高麗を攻める以前に建立された建築で、韓国最古建築である鳳停寺極楽殿(柱心包)の唐家と北朝鮮に所在して安岳月精寺極楽宝殿の唐家の事例が比較考察の対象となる。鳳停寺極楽殿は、1363年に屋根修理があった記録や修理履歴から12世紀頃に建立された建築と推測されている。また、その唐家も鳳停寺極楽殿建立当初に作られたと認められている。

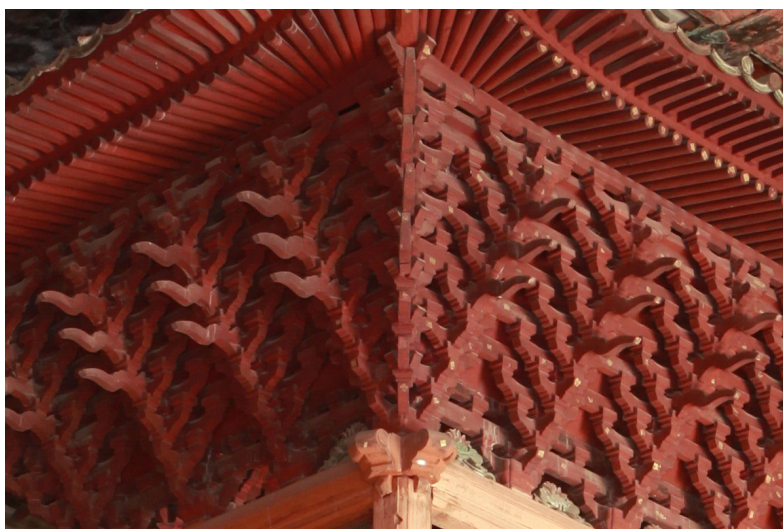


図 8-6 月精寺極楽宝殿唐家の隅部分  
 (『北韓伝統寺刹第6巻黄海南道』、p.154より)



図 8-7 月精寺極楽宝殿唐家の日暉紋の軒丸瓦  
 (『北韓伝統寺刹第6巻黄海南道』、p.156より)

安岳月精寺極楽宝殿は、その形式から高麗時代末・朝鮮時代初期(14世紀頃)推測されている建築である<sup>2)</sup>。内部にある唐家は、月精寺極楽宝殿建立以前に作られたもので、その後極楽宝殿に移動されたと推測されている。唐家が月精寺極楽宝殿より先に作られたと考えられる根拠としては、唐家の日暉紋の軒丸瓦が挙げられる。月精寺極楽宝殿の唐家における日暉紋の様式は、12世紀前期頃の慶州皇竜寺の日暉紋の軒丸瓦文様に類似するもので、14世紀以後、元の影響を受ける以前の形式とされているためである<sup>3)</sup>。

2) 国立文化財研究所、『北韓文化財解説集Ⅱ寺刹建築篇』、1998、p.66

3) 朴銀卿、「高麗瓦當文様編年研究」、『考古歴史學志No.'88』、東亞大博物館、p.160



### ③ 台輪と丸桁の比較

鳳停寺極楽殿の唐家の台輪は直角裁去の台輪鼻を持っており、このような形状は韓国における多包建築においては一般的な形式といえる。安岳月精寺極楽宝殿の唐家は、装飾的な削形付台輪鼻を持っており、渦巻の彫刻も施されている。さらに中国や日本の形式とは異なる台輪鼻を見せている。洪城高山寺大雄殿の台輪鼻は渦巻の彫刻は持たないが、削形付台輪鼻を用いている。従って、削形付台輪鼻は、洪城高山寺大雄殿の特異な事例ではなく、14世紀以前の多包建築の表現要素としてすでに登場していたと考えられる。

### ④ 丸桁の形と構成方式

鳳停寺極楽殿及び安岳月精寺極楽宝殿の唐家は、丸桁が方形断面で、洪城高山寺大雄殿も方形の一種である台形断面となっており、方形の丸桁にもいくつかバリエーションがあったと考えられる。また三事例とも、丸桁鼻が拳鼻となる共通点を持つものの、それぞれ細部の装飾は異なることから、方形の丸桁鼻にも形態的な多様性があったことがうかがえる。

洪城高山寺大雄殿は、建築四面の組物が統一された形式で、丸桁の下部に木鼻を持つようになっている。この木鼻は、建築内部に用いられている曲梁(大梁上部の梁)の尻である。鳳停寺極楽殿の唐家は、洪城高山寺大雄殿の事例と似た形式で、丸桁の下部に肘木の木鼻を持っている。このような表現原理は、円形の丸桁を持つ柱心包及び多包系の建築で一般的に用いられている。安岳月精寺極楽宝殿の唐家の場合、丸桁下部に木鼻を持たないことが特徴で、これは五代・宋初期の華林寺大殿をはじめ、宋時代の中国や日本の禅宗様建築に多く見える特徴である。

洪城高山寺大雄殿に見られる多包系の要素は、14世紀以後の建築と比較すると異色であるが、14世紀以前における多包系の表現要素と比較すると、元の影響を受ける以前の段階に導入された多包系建築と通じると考えられる。

## 8.2 高麗時代末・朝鮮時代初期における多包系建築の位置付け

### 8.2.1 梁頭形の木鼻を出す建築の格

梁が組物と組まれ、建築の外部に梁の木鼻として表現することは、すでに古代建築から見られたものである。建築の外観を統一または一貫性のある形式とするための目的があった。その形式は大きく二つの形式に分けられる。

一つ目は、建築内部に使われた梁の種類や梁がかかる位置を明らかに表現しないものである。これは梁の木鼻が組物の肘木として使われる際に多く現れる。事例としては、中国の南禅寺大殿(8世紀)や仏光寺大殿(9世紀)、日本の唐招提寺金堂(8世紀末)などの事例から理解できる。この形式は、古代・中世の中国や日本の事例から見ると、高級建築に多く用いられた形式となる。中国における詰組建築が五代以後発生し、宋や遼・金代に多く建てられたが<sup>4)</sup>、その時代の現存している例から見ると、梁の木鼻を積極的に表現しないものが一般的である。日本の禅宗様の場合も梁木鼻を出さない形式である。韓国建築で、このような事例に当たるのは高麗時代の柱心包系建築の中で14世紀以前のものである。

二つ目は、建築内部に用いられた梁の種類や位置を外観に突出して表現することである。最も古い事例は日本の法隆寺回廊(飛鳥時代)や奈良時代の校倉などから理解できる。古代・中世建築で比較的格の低い建築に用いられた傾向がみえる。しかし、中国元代以後、梁の木鼻を持ち出す建築が高級建築となる逆転現象が起きる。元代の永楽宮純陽殿(1358年、山西省芮城)から柱列上部に多く太い梁木鼻を出す事例が確認できる<sup>5)</sup>。それ以後、明・清代の宮殿の正殿などの最高級建築には、梁木鼻を持ち出す多包系建築が続く。このような事例に当たる韓国の建築は、三分頭形の梁の木鼻を持ち出す多包系建築から現れ、14世紀初期の事例から確認できる<sup>6)</sup>。14世紀初期以後、梁木鼻を持ち出す多包系建築が最高級の建築形式となり、この傾向は20世紀初期の宮殿建築や官宮建築まで続く。

現在までの調査結果によると韓国と北朝鮮を含めて、現存最古の多包系建築は、北朝鮮の平壤にある崇仁殿である。この建築は箕子(ギザ)朝鮮の箕子を祭るため、1325年に建立された祠堂であり、平壤に現存する最も古い建築として有名である<sup>7)</sup>。この建物は正面3間、側面3間の規模、入母屋造の屋根となっている。建物内の母屋柱が省略されなかったことで、側柱の平斗

---

4) 温静、「中国遼・金代の建築における補間鋪作の形式」、『日本建築学会計画系論文集第78巻 第683号』、2013.1 pp.231-236

5) 関口欣也、「高麗末李朝前期における詰組系様式の系統」、『佛教藝術』、第113号、1977.6、p.77

6) 1325年に建立された平壤崇仁殿が最も古い事例と挙げられる。

7) 国立文化財研究所、『北韓文化財解説集Ⅲ[一般建築]』1998年、p.296

栱に結合する繫梁の構成と母屋柱の載る大梁の構成からくる特徴がよくみられる。特に、組物と梁が組まれる正統的な結合方法が用いられていることと、三分頭形の梁の木鼻を出す最も古い事例であることが注目される。この建築は、官営建築として建立され、高麗時代末期における官営建築の典型を従っていた可能性があると考えられる。虚梁を用いた高麗時代末期の建築が、外観に表現しようとした模範となる建築が、この平壤崇仁殿であると考えられる。つまり、高麗時代の首都である開京から平壤に移入された高麗時代の官営建築として位置つけられる平壤崇仁殿から、14世紀初期段階には、すでに、正統性を確立した多包系建築が建てられていたことを読み取られる。そこから、多包系建築の模範となる正統的な建築の成立時期は、13世紀まで遡る可能性もあると考えられる。

17世紀以後からは、寺院建築を中心に、雲栱形木鼻を結合B類型として平斗栱に出す多包系建築の増加する。また、梁頭形の木鼻を平斗栱に出す場合、三分頭系の木鼻がほとんど使われなくなる傾向を見せる。

これに対し、官営建築の中で、特に宮殿の多包系建築では、三分頭形の木鼻を出す事例が20世紀まで続く。高麗時代末期における正統的な組み方の三分頭形の木鼻を用いた事例は、19世紀初期の昌徳宮 仁政殿（1804年再建）まで用いられる。

### 8.2.2 尾垂木の退化した建築

柱上部の組物が三分頭の梁木鼻を用いることは、柱上部の軒を支持する構造に尾垂木を持たないことを前提とする。この形式は中備組物には尾垂木を用いることが選択として可能であるが、梁木鼻が出る部分に関しては、構造的に尾垂木が組み込めない。韓国において現存している尾垂木を持つ建築は1棟(花巖寺極樂殿、1605年)のみであり、この建築の場合も三分頭の梁木鼻は持たない多包系建築である。数少ない事例から韓国における尾垂木を持つ建築の特徴を語ることは無理だが、尾垂木の建築が退化した理由には、宮殿の正殿や仏堂など最高級の建築に三分頭の梁木鼻を持ち出す建築が優先されたことが原因であったと推測される。

- 尾垂木を用いて軒廻りを構成する多包系形式は梁の木鼻が出ない。
- 尾垂木のように組物の肘木を見せかけながら、大梁の優先的な構造を用いる。尾垂木を用いる多包系の建築と外部表現に差が現れる。
- 14世紀の初期段階には、すでに韓国における多包系の形式が定着されている。

### 8.2.3 雲拱を用いる多包系組物

高麗時代における柱心包系組物に一般的に用いられている。多包系組物に雲拱に該当する部材が組み込まれた最も古い事例は、鳳停寺極楽殿の唐家から確認できる。

中国の建築で、雲拱に当たる部材が使われたのは15世紀以前にはほとんど見られず、仏光寺文殊殿に、出桁の下に雲拱のような部材を使っているのが古い例である。清代以後建立された官式建築から雲拱に当たる部材の使用が一般的に見られる。

日本の場合、詰組系建築の中で最も古い事例である東大寺鐘楼に、雲拱が組み込まれる位置に肘木を出す特徴が見られる。しかし、東大寺鐘楼を特例として、他の禅宗様の組物を用いた建築では、雲拱に該当する部材が使われてない。

### 8.2.4 柱心包系および翼工系組物の建築との折衷

三分頭形の木鼻を使った柱心包系および翼工系の建築が現れる。最も古い事例は、榮州浮石寺祖師堂（1377年）である。

朝鮮時代以後の三陟竹西樓（1403年）の事例の以後からは、形式的に定型化した事例が現れる。三分頭形の木鼻を使った柱心包系および翼工系建築は、壬辰倭亂以後の復興期に当たる17世紀初期頃建てられた建築に見られ、18世紀以後には、ほとんど見えなくなる。宗廟の建築には、18世紀以後にも、三分頭形の木鼻を用いた翼工系組物の建築が建てられた。



## 結章

### 1. 虚梁の作為から見た高麗時代末・朝鮮時代初期における多包系建築の特徴

多包系建築において、虚梁の使用は14世紀から16世紀に建立された建築に集中しており、14世紀ごろには、虚梁を使用した多包系建築の造営が全国的に広がっていた。虚梁を使用する技法は、官営建築と寺院建築に共有されており、小規模建築から大型建築まで、様々な屋根の種類の建築に、虚梁が使われていた。虚梁は、梁が組物と組まれ木鼻を出す全ての位置（梁間・桁行・隅方向）で構成され、一手先から四手先までの多様な組物の形式に合わせて虚梁が組まれている。このような汎用性のある虚梁の使用は、14世紀頃にすでに見られる。

多包系建築では、様々な梁方向に虚梁が用いられている。梁の方向別（梁間、桁行、隅行）に虚梁を組み合わせ、梁架構に関わらずに、斗栱（平斗栱と隅斗栱）に梁の木鼻を出し、組物廻りの構成と意匠に一貫性を与えようとした。つまり、虚梁を設けた理由は、多包系建築の外部表現における規範を守るためであった。

規範となる外部表現として、組物の構成形式を見ると、一手先から四手先の組物まで、一定の原理が用いられていることである。その原理は、外側と内側の各手先において、最外郭の手先とその内側の手先に秤肘木を組み、それより内側の手先や柱真には通肘木を組むことである。このような組み方は、12世紀頃の鳳停寺極楽殿の唐家の組物で確認でき、虚梁を用いた建築の組物にも、その原理は継承されていた。

また、正結合の形式として梁と組物が組まれた意匠も、規範となる外部表現に含まれている。梁と組物との正結合の形式類型は、出桁受通肘木を基準に、梁が組まれ木鼻を出す位置より、<A類型>と<B類型>に分けられ、虚梁と組物との結合も、結合類型ごとの正結合の形式に従っている。

規範となる外部表現が存在したのは、定型化された構造と意匠を整えた多包系建築、つまり、造営の際に模範となる正統的な多包系建築が成立していたことを意味する。虚梁を持つ14世紀以後の多包系建築の組物は、12世紀頃の鳳停寺極楽殿唐家の多包系組物の構成を継承していることから、12世紀から13世紀には正統的な多包系建築が成立していたと推定できる。

外部における虚梁および梁の意匠を見ると、梁間方向および桁行方向に掛けられた梁の木鼻を、三分頭形にするのが一般的である。そして、三分頭形の木鼻を持つ梁や虚梁は、結合A類

型として組物に組まれる。このような意匠的な特徴と構成的な共通点から、高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築の外部表現は、定型化されていたことが読み取られる。

隅方向に掛けた虚梁は、雲形や蓮蕾形の木鼻を用い、結合B類型として組物と組まれるという共通点がある。蓮蕾形の木鼻は柱心包系建築の梁に見られるもので、多包系建築に柱心包系建築の意匠的な要素が折衷されていたと考えられる。

内部における虚梁の意匠は、建築ごとの様々な組物の構成・意匠と梁架構の形式に応じ、多様性のある表現を持つという特徴がある。

室内における空間の計画と、それと関連する梁架構の形式は、虚梁が考案された背景となる。虚梁を設けた平斗拱や隅斗拱に載る梁組は、＜上段結合式＞または＜減梁式＞の梁架構となる。

＜上段結合式＞の梁架構からは、内部における空間の垂直的な拡張を意図したことが読み取れる。虚梁の上段部に梁を載せることで、正結合式の梁架構より、高い位置に梁組が構成される。外観では、虚梁を用いることで、典型的な梁と組物の結合形式の表現を維持しながら、大梁の架構とその上に構成する小屋組全体の構造をより高く設けようとした。＜上段結合式＞の梁架構による空間の垂直的な拡張は、天井を設置した建築と化粧屋根裏にした建築、両方に有効であったと考えられる。また、建築の奥行きが深くなる場合や、隅の部分の平面が長方形となる場合、また、組物の手先の数が増加する場合などに、上段結合式の梁架構と木鼻を担う虚梁を用いることで、比較的短い部材で梁架構を構成することが可能となる。つまり、虚梁の使用は、大径の長尺材の使用の節減にも効果的であったと考えられる。

＜減梁式＞の梁架構は、桁行方向に掛かる衝梁を減梁する。虚梁を用いた仏殿に見られる特徴である。中央間と両脇の間において、空間的な位階を分ける装置として、中央間に掛かった梁間方向の梁と、その梁が画した空間に設けた天井を利用した。桁行方向の梁である衝梁を省略し、脇の間の格天井に桁行方向の梁が貫入しないようにし、脇の間を一つの空間としている。そして、桁行方向の虚梁を掛け、外観では典型的な梁と組物の結合形式を維持させようとした。

＜上段結合式＞および＜減梁式＞の梁架構による空間は、研究対象の中で、高麗時代末期である14世紀にはすでに現れ、虚梁が使用された最後の時期である17世紀半ばまで続く。

また、高麗時代末・朝鮮時代初期における入母屋造や寄棟造建築は、隅方向の梁が必須ではない構造を選択しており。特に脇の間において、隅梁がなくても、桁行方向の梁だけでも十分屋根から来る荷重を受けられるようになっていた。隅梁の構造的な必要性が衰退したことを含め、部材の節約のため、隅梁の退化が加速していった。

虚梁の発生は、多包系建築において、梁と組物が組まれる「正結合式の梁架構」から来る制限性に起因した。平斗栱に梁を掛け、梁頭形の木鼻を出すということが、梁の掛かる位置を側柱列の平面配置に従属させる。また、組物において、手先の数によって、梁の載る段が決まることで、梁の高さを自由に設けられない。さらに、三分頭形で代表される梁頭形の木鼻を持つ梁が、室内における梁の身、そのままの規格で組物に組み、その木鼻が出桁を受けることで、組物の外側の手先の数が増えると、出桁の出も長くなるので、梁の木鼻が出桁を受けるためには、さらに大径の長尺材が必要となる。

定型化された外部における表現論理、即ち、正統的な多包系建築の計画論理に対応しながら、「正結合式の梁架構」から来る制限性を乗り越えるための方案として、虚梁が考案されたと言える。虚梁を用いることで、外部意匠の論理から解放され、室内空間の梁架構を自由に構成できるようになり、建築ごとに要求される個別的な計画への対応が可能となった。

## 2. 高麗時代末・朝鮮時代初期における多包系建築の正統性

高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築は、一手先から四手先までの組物を持ち、確立した形式をもっていた。それは、外側と内側の各手先において、最外郭の手先とその内側の手先に秤肘木を組み、それより内側の手先や柱真には通肘木を組むという原理である。また、この原理は、平斗栱と中備斗栱といった組物の位置、梁や虚梁の結合形式、組物の内外の手先数など、周辺の状態に関わらず、守られている。

上記の構成原理は、12世紀頃に作られた鳳停寺極楽殿の唐家の組物ですでに確認できる。また、この原理を用いた組物は、17世紀から20世紀初期に建立された多包系建築の組物でも守られている。したがって、上記の原理は、高麗時代末・朝鮮時代初期における多包系建築の正統的な原理と言える。

高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系組物は、一手先における秤肘木や通肘木の使用の有無によって、鳳停寺極楽殿唐家系列と平壤崇仁殿系列の二つに分類することができる。

多くが鳳停寺極楽殿唐家系列の組物に該当し、12世紀頃から20世紀初期に至るまでの多包系組物の主流をなしていたといえる。

平壤崇仁殿系列の組物は、二手先から三手先の組物に見られ、そのうち、定型化された形式として確認できるものは、高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系官宮建築や宮殿建築に使われた二手先の組物である。現存する事例からは14世紀初期から、17世紀初期に再建された宮殿



建築や官営建築にまで確認できる。

鳳停寺極楽殿唐家系列と平壤崇仁殿系列の組物は、高麗王朝の政治や貴族文化の中心であった開城の宮と官営、宗教建築から、造営の際に模範となる形式として成立していたと推定される。そして、首都から地方に至るまで、定型化した形式として多包系建築が建立されたことは、中央からの模範となる建築の形式に従うということとともに、僧匠が官営建築と寺院建築の建設に参加したのも、建築を実現するための技術が伝播された一つの要因と推測される。

平壤崇仁殿系列組物の特徴である一手先に秤肘木を組まない手法は、10世紀頃の五代・宋の詰組建築に見られる。そして、成宗年間（10世紀後半）に、高麗王朝に新しい官営建築が建立される。その時の新官営建築は、宋王朝の官式建築を模範としていた。これがきっかけとなり、一手先に秤肘木を組まないという組物を持つ多包系建築が、官営建築として定型化され、高麗時代末期の官営建築から朝鮮の建国後の宮殿や官営建築まで継承されたと推定される。

14世紀以後の多包系建築に主流となる鳳停寺極楽殿唐家系列の組物と、一部の官営建築と宮殿建築に見られる平壤崇仁殿系列の組物は、高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築において、造営の際に模範となる組物の形式、つまり、正統的な組物の形式として位置づけられる。

そして、高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築において、最高級建築に使われたと思われる正統的な四手先組物について、その形を推定してみた。多包系建築に主流となっていた鳳停寺極楽殿唐家系列の四手先の組物に、正結合形式（A類型）として梁が組まれ三分頭形の木鼻を出すという構成形式からは、大径の非常に長い梁材が必要となる。それゆえ、奥行き3間以上の規模である多包系建築の場合、側柱の内側に母屋柱を立て、梁を繫梁として平斗栱に組むということが、正統的な四手先組物の形式を実現しやすい構造であったと考えられる。

このような梁と組物との正結合形式からくる制限性により、正統的な多包系形式を備えた事例は、三手先の組物までで見られる。四手先の組物の場合は、定型化した組物の構成原理を守りながら、三分頭形の木鼻を持つ虚梁を正結合（A類型）として平斗栱に組んでいる。虚梁を用い、正統的な四手先組物の形式を表現しようとした作為は、宮の正殿もしくは、最高級の宗教建築に使われた正統的な四手先組物の形式を模範としたことから生じたと推定できる。

高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築において、梁と組物との結合形式は、出桁受通肘木を基準に、梁が組まれ木鼻を出す位置から、結合A類型と結合B類型の二つに分けられる。梁と虚梁が組物に組まれる位置は、結合AとB類型という定型化された組み方に従うため、組物に梁が載る段は、外側の手先数により決まるようになる。よって、類型ごとに、正結合式として梁が載る段は、公式化できる。

結合A類型は、手先数に1を足すと、正結合式として梁が載る段数に当たり、結合B類型は、手先数に2を足すと、正結合式として梁が載る段数に当てはまる。

[結合A類型における正結合式の梁の載る段数 = 手先数 + 1]

[結合B類型における正結合式の梁の載る段数 = 手先数 + 2]

梁頭形の木鼻を結合A類型として出す建築と、雲栱形および梁頭形の木鼻を結合B類型として出す建築において、母屋柱を省略しながら、梁組みを全て正結合式とすることは難しい。しかし、外部表現としては正結合式の意匠が求められる上、内部空間の自由も要求された。

梁（虚梁）が組物に結合A類型と組まれた建築において、官営建築では、平斗栱に梁を正結合式として組むという正統的な組物を設けるという傾向が見られる。虚梁を使用している建築は主に仏殿である。虚梁を用いて、外部の組物表現から自由に、上段結合式や減梁式の梁架構を設け、各建築に要求された個別的な計画に対応した。

雲栱形の木鼻を結合B類型として出す建築は、虚梁を使用した建築で見られる<上段結合式>や<減梁式>の梁架構を利用することで、これらの要求にこたえようとした。雲栱形の木鼻を出す建築は、梁の木鼻が外部に出ていることを明示しなくてすむので、梁頭形の木鼻を出す建築に比べ、比較的自由に梁架構を構成することができる。その<上段結合式>・<減梁式>の梁架構を用いたのは、正結合式の形式の梁架構から来る制限性を克服すると同時に、室内空間における様々な計画に対応するためであろう。<上段結合式>・<減梁式>の梁架構を利用した造営上の意図は、虚梁を使用した建築と共通する。

### 3. 今後の課題

東アジアの木造建築において、虚梁のような見せかけ技法を用いる事例を調査し、韓国の事例と比較考察する必要がある。そこから、虚梁を用いる技法の特殊性や普遍性に関する位置付けが可能となる。さらに韓国の多包系建築の特質を再評価するきっかけになると考えられる。

また、高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系組物の正統的な原理をもって、中国や日本の詰組組物の構成形式を比較する必要がある。この比較研究を通じて、韓国における多包系組物の特質をより明確にすることが期待される。そして、中国と日本の建築、それぞれの特質の把握や理解を深めることにつながると考えられる。



# 参考文献

## <古文献>

- 『高麗史』
- 『朝鮮王朝實錄』
- 『華城城役儀軌』
- 『榮造法式』( 東南大学所蔵本 )

## <単行本>

- 関野貞、『東京帝国大学韓国建築調査報告』、東京帝国大学工学部、1904.8.
- 朝鮮總督府内務部地方局、『朝鮮寺刹史料(下)』、1911.3.
- 朝鮮總督府編、『朝鮮金石總覽(下)』、1919.3.
- 朝鮮總督府、『朝鮮古蹟図譜12』、1932.3.
- 杉山信三、『日本朝鮮比較建築史』、大八洲出版、1946.12.
- 杉山信三、『朝鮮建築史研究報告第一冊』、私家本、1949.08.
- 杉山信三、『高麗末朝鮮初の木造建築に関する研究』、私家本、1953.
- 国立博物館、『美術・考古学用語集建築篇』、ソウル新聞社、1955.11.
- 張起仁、『建築用語集』、建築学会編、英崙社、1958.11.
- 尹張燮、『韓国建築史』、東明社、1973.
- 鄭寅國、『韓国建築様式論』、一志社、1974.8.
- 杉山信三、『韓国の中世建築』、相模書房、1984.10.
- 中西章、『朝鮮半島の建築』、理工學社、1989.8.
- リハソン( 이화선 )、『朝鮮建築史(1)』、科学百科事典綜合出版社、1989.12.
- 朝鮮遺跡遺物図鑑編纂委員会、『朝鮮遺跡遺物図鑑10高麗篇(1)』、1991.7.
- 朝鮮遺跡遺物図鑑編纂委員会、『朝鮮遺跡遺物図鑑13李朝篇(1)』、1993.4.
- 金東旭、『韓国建築工匠史研究』、技文堂、1993.8.
- 朝鮮遺跡遺物図鑑編纂委員会、『朝鮮遺跡遺物図鑑15李朝篇(3)』、1993.12.
- 朝鮮技術發展史編纂委員会、『朝鮮技術發展史3(高麗編)』、科学百科事典綜合出版社、1994.8.
- 朝鮮技術發展史編纂委員会、『朝鮮技術發展史4(李朝前期編)』、科学百科事典綜合出版

社、1997.1.

国立文化財研究所、『北韓文化財解説集Ⅱ(寺刹建築編)』、1998.12.

高裕燮遺著、『又玄高裕燮先生の韓国建築美術史草稿』、デウオン社(대원사)、1999.1.

尹張燮、『新版韓国の建築』、ソウル大学校出版部、2002.12.

国立文化財研究所、『北韓文化財解説集Ⅲ(一般建築編)』、2002.12.

張起仁、『韓国建築大系Ⅴ木造』、再版、普成閣、2005.11.

金東賢、『韓国木造建築の技法』、1版5刷、発言、2005.12.

金東旭、『韓国建築の歴史』、技文堂、1997.2.

金王植、『韓国建築史概論』、明知大学校出版部、2007.2.

国立文化財研究所、『北朝鮮の伝統建築：黄海南道1』、2007.11.

国立文化財研究所、『北朝鮮の伝統建築：黄海北道1』、2009.12.

大韓仏教曹溪宗民族共同体推進本部、『北韓伝統寺刹第1巻 平壤・平安南道』、養士齋、2011.6.

大韓仏教曹溪宗民族共同体推進本部、『北韓伝統寺刹第2巻 平安北道(上)』、養士齋、2011.6.

大韓仏教曹溪宗民族共同体推進本部、『北韓伝統寺刹第3巻 平安北道(中)』、養士齋、2011.6.

大韓仏教曹溪宗民族共同体推進本部、『北韓伝統寺刹第4巻 平安北道(下)』、養士齋、2011.6.

大韓仏教曹溪宗民族共同体推進本部、『北韓伝統寺刹第5巻 開城』、養士齋、2011.6.

大韓仏教曹溪宗民族共同体推進本部、『北韓伝統寺刹第6巻 黄海南道』、養士齋、2011.6.

大韓仏教曹溪宗民族共同体推進本部、『北韓伝統寺刹第7巻 黄海北道』、養士齋、2011.6.

大韓仏教曹溪宗民族共同体推進本部、『北韓伝統寺刹第8巻 慈江道・咸鏡南道(上)』、養士齋、2011.6.

大韓仏教曹溪宗民族共同体推進本部、『北韓伝統寺刹第9巻 咸鏡南道(下)・咸鏡北道』、養士齋、2011.6.

大韓仏教曹溪宗民族共同体推進本部、『北韓伝統寺刹第10巻 江原道』、養士齋、2011.6.

関口欣也、『江南禅院の源流、高麗の発展—関口欣也著作集〈第2巻〉』、中央公論美術出版、2012.3.

片桐正夫、『朝鮮木造建築の研究—架構技術の発展と様式の成立—』、相模書房、2014.7.

## <論文>

関野貞、「韓国芸術の変遷に就て」、『建築雑誌』、24(277)、1910.1.

関野貞、「朝鮮最古の木造建築」、『朝鮮と建築』、第2輯第8号、1923.11.

藤島亥治郎、「朝鮮建築史論其五」、『建築雑誌』、第44輯第536号、日本建築学会、1930.8.

杉山信三、「朝鮮木造建築固有様の研究」、『日本建築學會論文集』、第36號、1947.12.

杉山信三、「朝鮮木造建築様式的研究序説」、『日本建築學會論文集』、第36號、1947.12.

杉山信三、「朝鮮の唐様建築に就て」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』、計画系23(秋)、

1948.

関口欣也、「高麗末李朝前期における詰組系様式の系統」、『佛教藝術』、第113號、1977.6.

中西章、「韓國多包系建築の梁頭及び中備斗拱の木鼻について」、『日本建築学会学術講演梗概集』、計画系53(建築歴史・建築意匠)、日本建築学会、1978.09.

中西章、「朝鮮、多包系建築における斗拱の内・外手先数の差について」、『日本建築学会学術講演梗概集』、計画系58(建築歴史・建築意匠)、日本建築学会、1983.09.

中西章、「朝鮮多包系建築の梁頭形木鼻について」、『日本建築学会学術講演梗概集』、計画系59、日本建築学会、1984.10.

中西章、「梁の位置の変化と内部手先数の増加からみた朝鮮多包系建築の斗拱形式の変遷について」、『日本建築学会計画系論文報告集』、第351號、日本建築学会、1985.5.

中西章、「朝鮮多包系建築における斗拱手先方向一体化について」、『日本建築学会計画系論文報告集』、第352號、日本建築学会、1985.06.

中西章、「朝鮮多包系建築の斗拱における木鼻形式の変遷について」、『日本建築学会計画系論文報告集』、第356號、日本建築学会、1985.10.

朴銀卿、「高麗瓦當文様の編年研究」、『考古歴史學志』、第4号、東亞大学校博物館、1988年.

朴大儁、朱南哲、「下昂に関する研究」、『大韓建築学会論文集』、計画系第5巻第8号、大韓建築学会、1989.8.

裴秉宣、「我が国木造建築の架構形式と結構法」、『大韓建築学会誌』、第36巻第4号、大韓建築学会、1992.7.

金キョンス(김경수)、「14~19世紀、我が国の寺院金堂の年代考証について」、『朝鮮考古研究』、1994年第4号累計第93号、社会科学院考古学研究所、1994.11.

金鴻植、「仏寺建築」、『韓国建築史』、大韓建築学会編、技文堂、1996.

柳成龍、朱南哲、「出目翼工の起源と変遷に関する研究」、『大韓建築学会論文集』、計画系第13巻第4号、大韓建築学会、1997.4.

朱南哲、「高麗時代末朝鮮時代初期の栱包に関する研究」、『大韓建築学会論文集』、計画系第13巻第11号、大韓建築学会、1997.11.

李演魯、朱南哲、「高麗末朝鮮初多包建築栱包の結構特性に関する研究-栱包と梁の結構を柱心に-」、『大韓建築学会論文集』、計画系第19巻第8号、大韓建築学会、2003.8.

徐東千、韓東洙、「中國元代木造建築の構造と結構特性に関する研究-陝西省韓城地域の元代建築を中心に-」、『建築歴史研究』、第14巻3号、2005.9.

柳成龍、「多包建築における隅部の組物形式の変遷に関する研究、-内外二手先組物を中心に-」、『大韓建築学会論文集』、計画系第22巻第6号、大韓建築学会、2006.6.

柳成龍、「鳳停寺大雄殿における入母屋造の屋根架構に関する研究」、『大韓建築学会論文集』、計画系第23巻第5号、大韓建築学会、2007.5.

鄭淵相、「朝鮮時代木造建築の桁と梁の結構方法に関する研究」、『建築歴史研究』、第16巻第6号、韓国建築歴史学会、2007.12.

ジョウンキョン( 조은경 )、ハンジュソン( 한주성 )、「安岳月精寺極楽宝殿の建築特性に関する研究」、『大韓建築学会支会連合会学術発表大会論文集』、大韓建築学会支会連合会、2008.12.

金東旭、「改訂韓国建築の歴史」、技文堂、改訂板3刷、2010.1

裴秉宣、「高麗多包系建築遺構と同時代中国木造建築の比較考察」、『美術史研究』、25号、美術史研究、2011.

張憲德、「中国唐・宋木造建築の下昂結構技法の変遷に関する研究」、『建築歴史研究』、第20巻6号、2011.12.

温静、「中国遼・金代の建築における補間鋪作の形式」、『日本建築学会計画系論文集第78巻第683号』、2013.1.

アンデハン( 안대환 )、「神勒寺極楽宝殿の平面と桁配置計画に関する研究」、『大韓建築学会論文集』、計画系第29巻第6号、大韓建築学会、2013.6.

アンデハン( 안대환 )、「神勒寺極楽宝殿での部材間の相関関係に関する研究」、『大韓建築学会論文集』、計画系第29巻第11号、大韓建築学会、2013.11.

ウソンフン( 우성훈 )、「高麗時代宮闕内仏行事の特性に関する研究-高麗史と高麗史節要の記録を中心に-」、『大韓建築学会論文集』計画系、第31巻第12号、大韓建築学会、2015.12.

## <学位論文>

張慶浩、「韓国木造建築に現れる包に関する研究」、弘益大学校修士学位論文、1975.11

李潤錫、「朝鮮中期多包系佛殿包作の分數に関する研究」、漢陽大学校修士学位論文、1988.2

裴秉宣、「多包系切妻造建築に関する研究」、ソウル大学校博士學位論文、1993.8.

片桐正夫、「朝鮮木造建築の架構技術発展と様式成立に関する史的研究：遺構にみる軒組形式の分析」、日本大学博士學位論文、1995.7.

ヤンユンシク( 양윤식 )、「朝鮮中期多包系建築の栱包意匠」、ソウル大学校博士學位論文、2000.2.

李演魯、「韓国伝統木造建築の梁に関する研究」、高麗大学校博士學位論文、2002.8.

梁宰瑛、「朝鮮時代多包式建築の架構発達過程に関する研究」、高麗大学校博士學位論文、2007.2.

金碩顯、『韓国における伝統的な建築の衝梁(チュンリヤン)に関する研究』、明知大学大学院  
建築学科修士論文、2010.2.

### <修理・実測報告書>

- 国立博物館、『無為寺極樂殿修理工事報告書』、1958.
- ソウル特別市教育委員会、『ソウル南大門修理報告書』、1966.2.
- 文化公報部文化財管理局、『昌慶宮重建報告書(図版)』、1987.12.
- 文化公報部文化財管理局、『昌慶宮重建報告書』、1989.3.
- 文化財管理局文化財研究所、『小川敬吉調査文化財資料』、海外所在文化財調査書第5冊、  
1994.12.
- 杉山信三、『韓国古建築の保存－浮石寺・成仏寺修理工事報告－』、韓国古建築の保存刊行  
会、1996.11.
- 文化財管理局、『昌徳宮仁政殿実測調査報告書』、1998.12.
- 文化財庁、『禅雲寺懺堂庵大雄殿精密実測調査報告書』、1999.12.
- 安城市、『安城客舎解体重建工事報告書』、2000.4.
- 文化財庁、『徳寿宮中和殿実測・修理調査報告書』、2001.12.
- 文化財庁、『浮石寺無量寿殿実測調査報告書(本文)』、2002.11.
- 文化財庁、『浮石寺無量寿殿実測調査報告書(図版)』、2002.11.
- 文化財庁、『完州松廣寺大雄殿修理報告書』、2002.12.
- 文化財庁、『勤政殿補修工事及び実測調査報告書(上)、(下)』、2003.12.
- 安東市、『鳳停寺大雄殿解体修理工事報告書』、2004.1.
- 文化財庁、『銀海寺居祖庵靈山殿精密実測調査報告書』、2004.6.
- 文化財庁・江陵市庁、『江陵客舎門実測・修理報告書』、2004.12.
- 文化財庁、『神勒寺祖師堂実測調査報告書図版』、2005.9.
- 文化財庁、『禅雲寺大雄殿実測調査報告書』、2005.10.
- 文化財庁、『修徳寺大雄殿実測調査報告書』、2005.11.
- 文化財庁、『洪城高山寺大雄殿実測調査報告書』、2005.12.
- ソウル特別市中央区、『崇禮門精密実測調査報告書』、2006.2.
- 安城市、『石南寺靈山殿解体実測修理報告書』、2007.8.
- 文化財庁、『開心寺大雄殿修理・実測報告書』、2007.12.
- 京畿道安城市、『(2008年度第1號)京畿道指定文化財実測調査報告書、清源寺大雄展、陽城郷  
校』、2008.11.



文化財庁、『傳燈寺大雄殿・薬師殿精密実測調査報告書（上）』、2008.12.  
京畿道安城市、『清源寺大雄展年輪年代測定（最終報告書）』、2009.12.  
文化財庁、『昌慶宮弘化門精密実測調査報告書』、2010.12.  
文化財庁、『崇禮門木部材年輪年代分析および寄贈木材基礎調査研究報告書』、2011.9.  
文化財庁、『佛影寺應眞殿精密実測調査報告書』、2012.10.  
京畿道驪州郡、『驪州神勒寺修理実測報告書』、2012.7.  
文化財庁、『崇禮門復旧および城郭復原工事解体実測報告書』、2013.6.  
文化財庁、『崇禮門復旧および城郭復原工事修理報告書』、2013.6.  
文化財庁、『安城青竜寺大雄殿精密実測調査報告書』、2013.10.

### <その他>

金東旭、「[資料]柱心包、多包という用語はいつから使っていたか」、『建築歴史研究』、第17巻第5号、韓国建築歴史学会、2008.10.

